

川柳句文集

赤えんぴつ

田中正坊

序

文

安請け合いは大怪我のもと、と言うことわざがある。田中正坊さんのご依頼にのってしまつて、えらいこつちやと嘆くばかりである。

私の好きなことばに、いかけ屋（鍋、釜などをハンダで修理する業）のおやっさんが、軍艦を受け取ったよう、と言うのがある。大阪落語によく出てくる。このいかけ屋の感慨、私にとつては二度目である。

十六年前、田辺聖子著『嫌妻権』（文庫版）の解説を光文社から電話依頼された時、貧しいことばの引き出しから出たことばである。

『嫌妻権』まさに巨大な軍艦だったが、今度の句文集『赤えんぴつ』も手強い軍艦だった。

この軍艦の主体の文章が、大毎（大阪毎日新聞）社会部記者、ペンで半生を過ごされたプロの手になるものである。素人のいかけ屋が云々するのもおこがましいのだが、成り行きにまかせて筆を進めることにする。

たつぷりある文章の内、川柳関係をのぞけば、紀行文と映画と読書に関するものに大別できる。生来の旅好き、旅行マニアと言うことばがぴったりで、この書を手にされる方で海外へ旅された人があれば共

感、感動されるであろう。また愛書家でもあり、その読書歴を伺うと、あれよあれよと、羨ましくなる。

映画も、映画通、と言うより映画大通と言う方がふさわしいくらい。

この軍艦の主砲と言うべき、川柳に関する文章。これは凄い。初心者には絶好の入門書ともなり、ベテラン作家にはこよなき、栄養たっぷりな愛読書となるに違いない内容を含んでいる。

「定型と音字数」「いろいろな定型」「定型こぼれ話」「音韻を考える」「季語と句語」どれもこれも見事な川柳論であり、再読三読に値する貴重な文献である。

また大正、昭和一桁の世代にとって、「神風特攻隊の絶唱」は必読すべき一文である。

川柳作品は二百句、いずれも堅実な温厚な作品ばかり、私好みの八句を並べよう。

隣にはミサイルがあり米がない

若葉マークが送って行つてやると言う

差し引きをすれば妻には借りがある

加害者と思っていないスモーカー

天女なら炊事洗濯してくれぬ

タンポポの綿毛も僕も旅が好き

急がずに雨だれでよしキーボード

懐かしや田中絹代と逢うテレビ

書名は田中正坊句文集『赤えんぴつ』ではあるが、この二百五十頁のこの本の重み、ご本人のこれまでの喜怒哀楽、八十数年の重みがひしひしと感じられる好著である。

平成十七年三月

岩井三窓

(番傘川柳本社参与)

川柳句文集 赤えんぴつ

も く じ

序 文	岩井三窓	3
-----	------	---

赤えんぴつ	11
-------	----

国東半島への旅	12	中国の旅終る	14
古くて新しい国	16	ひめゆりの心	18
ミーシャの国	20	図書館礼賛	22
文学館と阿部知二	24	映画・小説・川柳	26
映画一〇一年	28	世界遺産への旅	30
句文集刊行余話	32	七月二十八日	34
西尾 葉先生と私	36	鶴彬忌について	38
山頭火と「銃後」	40		

川柳こぼれ話	43
--------	----

辞典あれこれ	44	外来語について	46
さまざまな表記法	48	川柳の用字用語	50
漢字は適切に	52	文章の書き方	54
定型と音字数	56	いろいろな定型	59
定型こぼれ話	61	音韻を考える	64

リズムを大切に	67	季節感への配慮	69
数詞を使った句	72	固有名詞のメリット	75
「課題」の扱い方	78	メルヘンを詠む	80
ユーモア句のすすめ	83	色についての考察	86
映画・演劇と川柳	89	レクイエム―忌日の句	93

続 ペンシル……………97

閑人閑話……………149

新しい中国詩―漢俳	150	古い中国詩―漢詩	152
季語と句語	155	私の川柳修行	160
神風特攻隊の絶唱	163	戦争と短詩型文芸	166
カタカナ語と川柳	169	薬あれこれ	171
私の読書ノート	173	私の映画ノート	175
私の旅行ノート	178	川柳の本―句集	180
川柳の本―図書	183	誌上川柳大会考	185
老人文芸 ええじゃないか	188		

レモネード……………191

文章について……………192

関東の農村……………196

大衆文学論……………200

『街道をゆく』……………204

春城への旅……………208

大毎社会部一〇〇年……………212

中国再訪記……………216

私の健康白書……………220

忘れられぬ日……………194

戦死やあわれ……………198

花と私と川柳……………202

友人との対話から……………206

三人の女性……………210

羊の国を訪れて……………214

日本の軍隊考……………218

私の粗食メニュー……………222

ペンシル（再録）……………223

あとがき……………251

赤えんぴつ

国東半島への旅

年末から新年にかけての四日間を北九州への旅ですごした。何かと小うるさいお正月を旅へ逃避したいという長年の願望と、磨崖仏で知られる国東（くにさき）半島を訪れたいという希望が合致するツアーを見つけたからである。

十二月三十一日朝、私たちの乗った「さんふらわあ」号は別府港に到着し、パスで国東半島へ向かった。九州の東北端、瀬戸内海に突出するほぼ円形の半島で、平安朝時代以降に仏教文化が花開いた土地である。六郷満山とよばれ、国東六郷には二十八山・六十五か寺があり、六万九千三百三十八体の仏が祀られているという。

初めに訪れたのは熊野磨崖仏。鬼が一夜で築いたと伝えられる自然石の乱積み石段をあえぎあえぎ登ると、岩壁に不動明王像と大日如来像が刻まれている。ユーモラスな表情のお不動さんは高さ八メートルで日本一大きい。次にお詣りしたのは、藤原時代作の木造阿弥陀如来座像はじめ九体の仏像を祀った真木（まき）大堂と、堂内一面の壁や柱に彩色壁画が描かれた国宝

の富貴（ふき）寺大堂で、天念寺を経て半島の円心部に位置する両子（ふたご）寺を巡拝した。明けて一月一日は、ホテルでお屠蘇を祝った後、このツアーのハイライトで七か所に大小六十余体が彫られた臼杵（うすき）石仏群を拝観し、原尻の滝や戦国の山城の名残りをとどめる岡城址なども見学、翌二日は小雨の降る中、湯布院を経て全国八幡宮の総本社として知られる宇佐神宮をひきまきらぬ初詣での人波にもまれて参拝した。

全く地理にうとく、臼杵も国東半島にあるとばかり思いこんでいた私だが、この旅を通して、かつて畿内と大陸との接点にあったこの地の文化について認識を新たにすることができた。ここには磨崖仏だけでなく、さまざまな石仏や国東塔、鳥居などの石造文化財があり、仁王像も石に刻まれている。この石の文化は、民俗の巨石信仰とも結びつき、大陸の仏教文化との接触によって発展をとげたものとみられる。

さらに、半島の要の位置にある宇佐神宮とのかかわりも見落とせない。六郷満山の寺々はいずれも八幡神の化身である仁聞菩薩の開基とされ、両子寺の奥之院には本尊である十一面千手観音の両脇に宇佐の二神像が配されている。宇佐の祭神は応神天皇、比売神、神功皇后だが、この比売神こそ、日本史の曙に登場する卑弥呼その人であると思うのは、私の新年のロマンだろうか。

（一九八八年二月）

中国の旅終る

九月二十三日、川柳塔社訪中団一行を乗せた日航機が上海から大阪空港に到着した時、楽しいツアーから帰ったというよりも、何か一つの仕事を終えたような気分になった。今回の北京―洛陽―西安―上海吟行の旅で、いささか荷が重いピンチヒッターの団長役を務めたこともあるが、昭和五十九年から始まった中国旅行が隔年ごとに実施され、今回でシリーズを完結した思いがしたからである。

まず第一回は、西尾葉主幹を団長として二十三人が上海―蘇州―桂林に遊び、第二回は橘高薫風副主幹を団長とする二十一人が北京―万里の長城―大同を回って、各地の風光と文物にふれるとともに、中国の人たちとの交流を深めた。そして本誌には、東野大八執筆による現地の事前紹介が行われ、訪中団員の旅行吟と紀行文が紙面を飾った。

ところで、中国の旅行関係者が投票で選んだ「中国十大風景名勝」という観光地ベストテンがある。第一位は万里の長城、つづいて桂林の山水、杭州の西湖、北京の故宮、蘇州の園林、

安徽の黄山、長江の三峡、台湾の日月潭、承徳の山荘、西安の秦陵と並ぶが、顧みると三回の吟行で、このうち五か所を訪れている。また、「六大古都」の北京・南京・西安・洛陽・杭州・開封のうち三か所、「三大石窟」は敦煌を除く二か所を見ている。あの広大な中国を、わずか三回くらいで見つくすことはできないが、どうにかポイントだけは押さえられたのではないだろうか。

今回の何よりの収穫は、「国際旅遊年」のこの年に限って開放された北京の天安門城楼に登上したこと、スケジュールの変更もあって、三千年王城の地であり、日中文化交流の遺跡が多い大唐の都、長安（西安）と、長くその副都であった洛陽の歴史的文物をくまなく參觀できたことであった。そして西安と友好都市である奈良市長の紹介状を持って訪れた西安市人民政府への表敬訪問では、全員が接見室に通されて市長代理の鄧友民外事弁公室主任らと懇談した。北京大学出身の「文人」で、川柳を含む日本の短詩型文芸についても話し合い、これまでで最も実のある交流を実現して有終の美を飾った。

さて最終日、西安から空路で着いた上海では、雨による交通渋滞で市内に入れず、空港付近のホテルに立ち寄った。その中国風の建物に確かに見覚えがあると思ったら、何と第一回訪中で旅装を解いた西園飯店であった。

（一九八八年十一月）

古くて新しい国

三冊目のパスポートによる初旅行は、予期せぬことから韓国行きとなった。前年のオリンピック開催を契機に、すっかり様相を新たにしたことは、新聞やテレビで承知していたが、去る五月、福岡で開かれた「アジア太平洋博」で訪れた韓国館が、民族衣装をまとった清楚な案内嬢を含めて非常に印象が良く、地図やガイドブックまでプレゼントされた。そこへ格安なツアーがあるので行かないか、という誘いがかった。

出発予定日の七月二十六日は、現地の天候不良のためにキャンセルとなり、翌朝の日航臨時便で釜山へ飛んだが、空港に到着すると一行は私たち夫妻と娘一家の五人だけで、専属のガイドが付き、ワゴン車による家族旅行となった。その日は新羅王朝の古都として知られる慶州へ直行し、韓国十大寺院の一つで石造の多宝塔・釈迦塔がある仏国寺に参拝、さらに正式には大陵苑と呼ばれる古墳公園や国立慶州博物館を見学した。

そこからソウル郊外にある温陽市への六時間のドライブはハードだったが、道路は名神並み

のハイウエーで、ホテルの温泉大浴場で疲れを休め、二十八日は午前中から目的地のソウル市内に入った。東京都にひつてきする人口約千万人のこの大都市を一日で観光するのは、はじめから無理な話で、市内を走りながら国宝第一号の南大門や漢江の河畔にそそりたつ六十三階建の大韓生命ビルを遠望し、朝鮮王朝の正宮であった景福宮に向かった。

この宮殿は、北京の故宮を小規模にしたようなたたずまいで、中国文化を色濃く投影しているのを感じたが、その敷地の中心部に建っているのが韓国最大の国立中央博物館。案内書のどこにも記載されていなかったが、ガイドの尹さんに聞いてみると、これはかつての朝鮮総督府の庁舎であった。彼女は私たちへの配慮か、日本統治時代のことにはほとんど触れなかったが、史跡の案内で文禄・慶長の役に言及したのにはハッとさせられた。

国土をローラーにかけたようなあの朝鮮戦争で無残に破壊された韓国だが、私の見たかぎりでは古文化財は見事に保存・復元され、古い歴史と伝統を誇っていた。また、長い間、窮乏にあえいだ国民が、今は胸を張って闊歩しており、街を走る車はすべて国産車で、まだ開発途上とは言え、高層ビルが立ち並ぶソウルは、世界のどの国の首都と比べても見劣りしない。わずか三日間の旅ではあったが、私はこの古くて新しい国を再発見した。

(一九八九年九月)

ひめゆりの心

二月下旬の三日間、沖縄県へ旅行した。私は沖縄が日本に復帰した翌年の一九七二（昭和四十七）年、那覇市で開かれた歴史教育者協議会全国大会への参加を兼ねて沖縄を訪れており、十八年ぶりの再訪ということになる。

遠近にかかわらず旅行した折、私はつとめて記念館・資料館・博物館などの施設と史跡を見学することとしている。その土地について知っておかねばならないこと、土地の人が大切にしているものが一目で分かるからである。今回のような観光バスによるツアーは、総花的にあちこちを見て回るだけにおわってしまうので、あわただしい日程の一日をさき、ハイヤーの案内で、本島南部の戦跡にある県立平和祈念資料館とひめゆり平和祈念資料館を訪れた。

県立資料館は一九七五（昭和五十）年の設立なので、前に来た時にはできておらず、かねがね話に聞いて、ぜひ見学したいと思っていた。館内に入ってまっさきに目についたのは、錆びついた日本軍のスクラップ兵器の山で、戦争直後の沖縄の山野がオブジェで再現されている。

全住民を戦火にまきこみ、当時の人口の四分の一にあたる十五万人が非業の死をとげた「沖縄戦」の全容が数々の遺品、写真、パネルと証言集によって展示されており、私はただ鎮魂を祈るのみであつた。

ひめゆり資料館の方は、ひめゆり学徒隊の母校である沖縄女子師範・県立第一高女同窓会が県内外の有志の協力を得て建設したもので、昨年六月にオープンしたばかり。観光コースにも入っている「ひめゆりの塔」のすぐうしろにある。校門と校舎を模した真新しい館内の展示は、「戦争と教育」をテーマに構成され、第二展示室には南風原陸軍病院壕、第四展示室には学徒隊の多くが散華した第三外科壕が実物大に復元されていた。

私はこの二つのジオラマの前でしばし釘づけとなり、質素な服装の婦人の説明に耳を傾けた。この人たちは一般のガイドではなく、九死に一生を得た学徒隊の生存者がひめゆりの心を語り継ぐために奉仕しているということで、切々たる訴えが強く胸を打った。これだけの立派な施設が民間の力で設立され、運営されているのも、素晴らしいの一語につきる。四月一日は、沖縄本島西海岸に米軍が怒濤のように上陸した日にあたる。

(一九九〇年四月)

ミィシヤの国

「世紀末のことだから何時、何所でどんな事件が突発するかも知れないが」と『編集後記』に書いたら、待っていたかのようにソビエトでクーデターに始まり、共産党の解散に至るめまぐるしい動きが起った。ここでソビエト情勢について論評するつもりはないが、毎日のように新聞・雑誌・テレビで各地の状況が報道されるので、今から十二年前と六年前の二回にわたって旅行した時の思い出を書きとめておきたい。

一回目は一九七九（昭和五十四）年で、シベリアを経由してモスクワ、レニングラードとキエフの三都市、二回目は中央アジアのタシケント、サマルカンド、ブラハとオデッサであった。つまりロシア連邦、ウクライナ、ウズベクの三つの共和国の首都とその周辺を訪れたわけだが、ハバロフスクとモスクワとは同じ国内で七時間の時差があり、また、モスクワからタシケントまでは空路七時間もかかる。経済面では流通一つをとっても、大変なことだろうと思った。

この広大な国土は、ロシア帝国の版図を革命後もほとんどそのまま継承したもので、ツンド

ラから砂漠まで目を見はるような広さであり、イスラム文化圏内のウズベクをはじめそれぞれの共和国が異なった民族・文化・伝統を持っている。何と言ってもこれだけの国土と民族を一元的に統治するのは、政治的には困難が大きく、住民の希望にもとづいて自治もしくは独立を認めるのがよいのではないかと感じたことを思い起こす。

旅行前、社会主義国だから何かにつけてギクシャクするのではないかと思つたが、これは全くの取り越し苦労であつた。ツアーで接した“ミイシャ”(ロシア人)たちはいずれも素朴で明るく、モスクワのクレムリン宮殿やレーニングラードのエルミタージュ美術館、サマルカンドの回教寺院などの見どころも多く、ヨーロッパとは一味違うくつろいだ楽しい旅であつた。

もとより一介のツーリストにはうかがい知ることのできない暗部もあり、それが今回のような激変を招いたものと思われるが、たらいの水とともに赤ん坊まで流してしまわないよう、私たちの愛すべき隣人たちが守るべきものは守つてこの激動の時代をくぐり抜け、平和で民主的な国として再生することを心から願わずにはおられない。

(一九九一年十月)

図書館礼賛

私がこれまでに図書館をいちばんよく利用したのは中学生のころであつた。現在の大阪府立中之島図書館が家から歩いて行ける距離にあつたので、試験勉強によく通つたものである。今の子どもとちがつて個室というようなものがなかったから、勉強室がわりに使つたわけである。試験の日の午後などには、同類の仲間が何人か来ており、勉強はそこそこにして公園へ出かけ、日が暮れるまでボート遊びに興じたのも楽しい思い出である。

それから何十年と図書館とは縁のないくらしがつづいたが、定年になって自宅にいる時間が長くなつた十年前から、また図書館へ通うことになった。しかもこんどは、本を借り出して読むという本格的な利用である。幸い徒歩で十分ばかりのところに、公民館に併設された市立図書館があるので、早速、登録して「利用者カード」をもらつた。最近の図書館は開架式だから、本をさがして手にとって見る事ができるし、貸出し期限は二週間で何冊でも借りることができる。

乱読の私は、昔から目につく本は何でも買いこむ習慣があり、書棚をいくつ買い足してもあ

ふれる始末である。三回の引越しでかなり処分したつもりでも、なかなか減らない。しかも、新刊案内を見ればいついつ手が出てしまう。年金生活者にとっては、本代もかなりの負担となる。このジレンマからのがれるために、今まで書店へ向いていた足を図書館へ向けてみたのである。

図書館では、さすがに話題のベストセラーは貸し出されていて、すぐ手にできないこともあるが、予約制度があつて順番を待てばいいし、所蔵されていない新刊書は申し込んで購入してもらい、優先的に借り出すことができる。最近では、書名、利用者名などをコード化してコンピュータに登録されており、バーコードをなぞるだけで、たちどころに貸出し、返本、予約、調査事務が処理される。

さらに一般図書のほかに新聞・雑誌は貸し出さないが、その場で閲覧できるし、百科事典はじめ各種の辞典、年鑑、地図などは閲覧室で読み、必要な箇所をコピーすることもできる。図書館を利用して気のついた利点は、何と言っても期限があることで、自分で買った本のような積ん読（つんどく）がなくなつて読書効率上がり、しかも蔵書が増えず、図書購入費が減るとあつては、正に一石三鳥と言ふべきだろう。図書館利用をすすめる所以である。

（一九九二年八月）

文学館と阿部知二

旧冬、「東山魁夷―青の世界展」が開かれている姫路市立美術館と「阿部知二展」開催中の姫路文学館を訪れた。前者は、旧陸軍の師団司令部庁舎の外観をそのままにして内装を改めた赤煉瓦造りのレトロな建物、また後者は、展示室を回遊できる近代建築。特に文学館は、全国的にもユニークな施設として注目されており、折りを見て見学したいと思っただけに、実り多い一日であった。

この文学館は、姫路市にゆかりのある三上参次・辻善之助・和辻哲郎・井上通泰・有本芳水・初井しづ枝・椎名麟三・阿部知二・岸上大作の著書や遺品・資料を個人別のコーナーに常設展示しており、別に特別展示室があつて、今回は「阿部知二展」が開かれていた。人口四十万人の都市にしては、よくもこれだけの文化施設をつくつたものだと思うが、大阪でも数年前から文学館を建設しようという計画があるので、文化団体の総力を結集して一日も早く実現したいものである。

さて、この姫路行きは、私にとっては旧知である阿部知二を回顧したいという目的もあった。戦後間もないころ、文化講座に講演を依頼するために、姫路城付近の旧居を訪れたのが縁で、知己を得ることになった。中学時代に彼の小説『幸福』などを読んだことがあり、私よりも二十歳年長の著名な文学者であったが、無名の編集者である私と対等に付き合ひ、文壇の裏話などを気軽に話してくれたことが、今も懐かしく思い出される。

それだけに彼については、たいがい分かっているつもりであったが、今回の展示を見てはじめて知った事実も少なくなかった。例えば、愛妻家の彼の美しい夫人が師団参謀長大浜少将の次女というのもその一つだが、高校時代に今中楓溪について短歌に励んだこと、大学時代にはブランデンに師事してイギリス浪漫主義の詩人に関心を持ち、自らも詩をつくったことなどで、こうした展示ないし文学館設置の必要性を改めて認識した。

さらに彼について特記すべきことは、戦時中、陸軍報道班員としてジャワに派遣されたが、その戦争体験が戦後の行動に大きな影を落したことである。メーデー事件・松川事件の裁判にかかわり、安保反対・ベトナム反戦行動に参加し、わだつみの会の会の理事長にもなり、平和と民主主義を守るヒューマニストとして一貫した。そして、三木清の生涯を描いた小説『捕囚』が絶筆となった。昨年は知二没後二十年、私は彼の享年七十を越えた。

(一九九四年二月)

映画・小説・川柳

映画『シンドラーのリスト』と『ピアノ・レッスン』を見た。スピルバーグ監督の前者は、アカデミー賞を総なめにした作品だけに文句なしに感動した。原作もベストセラーとなっており、新聞や雑誌でも取り上げられているので、ストーリーは紹介するまでもなからう。十数年前に私は、この映画の舞台となったポーランドの古都クラクフを訪れたことがある。そして、近郊にある当時の姿そのままに保存されて国立博物館となっているアウシュビッツ強制収容所を視察し、ユダヤ人大量虐殺を物語る遺跡・遺品の数々をこの目で見ているので、次々に展開されるシーンに身の震える思いであつた。

後者の映画について、こういう話がある。女性の友人から「見終つてからも、立ち上がれないほど感動した」と言われて見に行つた男性が、「一体、どこが面白いんや」と怒つたらしい。この映画の脚本・監督は女性で、アカデミー賞では脚本賞、主演女優賞、助演女優賞を受賞している。無学で野性的な男のピアノを弾く女への無器用な愛情表現への反応が、この映画に対

する男女の評価が分かれるところではないかと、映画評も書いていたが、観客のほとんどは若い、あまり若くない女性たちで占められていた。

小説『マディソン郡の橋』がロングセラーとなっている。はじめから買って読むほどの興味もなかったが、たまたま図書館に申し込んでおいたところ、順番が回ってきたのでその日うちに読んだ。アメリカはアイオワ州の片田舎にある屋根付きの橋を撮影しにきた初老のフリー・カメラマンと二人の子持ちの中年農婦の恋をドキュメント・タッチで描いた作品である。野暮な男性である私には、先の『ピアノ・レッスン』と同じように、この小説のどこが面白いのか、さっぱり分らない。ベストセラーのリストでは性別は明らかではないが、読者の大半はおそらく女性で占められているに違いないと思った。

川柳の世界でも、こういうことがあるのではなからうか。斎藤大雄が著書『情念句』に「女性川柳の手引き」というサブタイトルをつけているが、最近、女性川柳がブームを呼び、私たちの周辺でも女流作家の台頭がいちじるしい。「女性の句は、男性の感受し得ぬ句境がある」と石曾根民郎も言っているが、男性川柳と女性川柳とは明らかに違いがあるように思う。

(一九九四年六月)

映画一〇一年

一九九五年は映画誕生一〇〇年として、世界的に各種の行事が行われた。これは一八九五年十二月二十八日、フランスのパリで、リュミエール兄弟が開発したシネマトグラフが公開されて大評判となった時を「映画発明の日」とする説にもとづくものである。したがって今年は、映画誕生一〇一年ということになる。

ところで映画は、戦後の日本においては、数少ない娯楽の一つであった。映画人口は昭和二十七年ごろから急上昇し、昭和三十三年（一九五八）年、一一億二、〇〇〇万人を越えてピークに達した。日本人一人が一年間に映画を一〇本見ていた計算になる。映画は産業として自動車産業よりも潤い、映画館の数は全国で七、〇〇〇館、休日はどこの映画館も満員であった。

それから四十年経った今、映画人口は一〇分の一の約一億人に減り、映画館は二、〇〇〇館以下となっている。戦前の昭和初年から映画に親しみ、特に戦後はむさぼるようにして内外の映画を鑑賞した私にとっては、今昔の感がある。その原因については、他にさまざまな娯楽が

生れたことがあげられるが、特にテレビの普及が決定的な役割を果たしたことは確かである。

しかし、これをもって映画が衰退し、将来性を失ったとは私は思わない。日本や欧米諸国においては、映画は娯楽の王座から転落、かつて多くの名画を提供したフランス映画はふるわず、アメリカも以前のように超大作を制作しなくなった。このような映画状況の中で、アジア映画の台頭がいちじるしい。特に中国、台湾、香港のいわゆる中国語圏映画が質量ともにすぐれ、韓国、インド、タイ、ベトナム、モンゴルも無視できない。

さらに、映画の上映形式の多様化も見えておかねばならない。映画会社が制作した映画は系列の常設映画館で上映されるが、独立プロや自主制作の映画は、独自の観客動員組織によって文化ホールや市民会館等で上映される。また、豊中市の「シネメッセとよなか」のように各地に自治体が後援する映画愛好家団体があり、映画祭を開いて内外の名作を提供している。衛星放送、ハイビジョンを含む各テレビでは、年間かなりの本数の新旧の映画を放映しており、また、多くの映画がビデオテープとして販売またはリリースされている。

これらを総合すると、映画人口は量的に少なくはなく、質的に水準の高い作品も制作されており、映画一〇一年の未来は決して暗くないと思う。

(一九九六年九月)

世界遺産への旅

去る九月、カナダ七日間のツアーに参加した。これまでアジア、ヨーロッパ方面ばかりだったのが今回はアメリカ大陸。と言うことは、今まで西回りの空路であつたのが初めて東回りとなる。しかも太平洋上に日付変更線があるので、往きは一日が二日、帰りは二日が一日となつて元に戻るというややこしさ。東回りはしんどいとは聞いてはいたが、聞きしにまさるきつさで、往復とも機中泊というおまけまで付いた。

行程は第一日は空路、バンクーバーで乗り継いでモントリオールへ、第二日はローレンシャン高原を観光、メープル街道をドライブしてケベックに着いた。第三日は市内を見学して空路、トロントに飛び、第四日は今回のツアーの目玉であるナイアガラ観光、滝壺の間近まで行く「霧の乙女号」にも乗船し、心ゆくまで世界一有名な大瀑布を眺めた。第五日は終日、専用バスでカナディアン・ロッキーに遊び、第六・七日は往路と逆コースで、カナダ国内と太平洋を横断した。

これらの観光地のうち、ケベックはユネスコの世界文化遺産、カナディアン・ロッキーは世界自然遺産に登録されている。世界遺産は、「人類が責任をもつて保護し、次世代に残すべき普遍的な価値を有する文化・自然遺産」となっており、ケベックは一七五九年、英仏軍の決戦の舞台となった町で、当時の要塞であるシタデルがそのまま保存されている。

カナディアン・ロッキーはバンフからジャスパーまで、世界有数の山岳道路が通じており、キャッスル・マウンテンやレイク・ルイーズなど、数々の美しい山や湖を観光、北半球最大のコロンビア大氷原に遊び、雄大なスケールの大自然をたっぷり味わうことができた。ナイアガラは、なぜか世界遺産に指定されていない。

今まであちこちと海外ツアーを重ねながら世界遺産ということに気がとめていなかったが、去る五月、カンボジアのアンコール・ワットを訪れ、ここが名だたる世界文化遺産であることが分かった。そう言えば昨年、一周したスペインには古都トレド、アルハンブラ宮殿があり、フランスのベルサイユ宮殿、イタリアのフィレンツェ、バチカン・シティ、中国の万里の長城など、多くの世界遺産を見てきている。顧みると、海外ツアーは世界遺産への旅であったと言えるかも知れない。

(一九九八年十二月)

句文集刊行余話

去る八月、喜寿を記念して川柳句文集『ペンシル』を刊行し、十七年間の作品八百句とエッセイ七編を収録した。これまでに『なにわ川柳―私の百句』など、百句を編んだ小句集を三點出しているが、まとまった句文集の出版は、今回がはじめてである。

今となつてはどうと言うことはないが、刊行するにあたっては、ずいぶんためらつた。作品を世に問うという気はさらさらないが、このようなつたない句を誰が読んでくださるだろうかということが、何回となく脳裏をよぎつた。しかし、文学でも美術でも音楽でも、およそ創作的な活動にたずさわる者は、どのような形にせよ作品を発表すべきである、というのが私の持論である。そうであれば、私自身を例外としてはならないと思つた。

ここは一つ、私のすべてをさらけ出してみようと考えた。全作品に近いものを発表するといふことは、全身をストリップするようなものである。もともと私の作品は、私小説ならぬ「私川柳」的な傾向が強いが、これに加えて回想的な文章を主とする本誌の目次下エッセイ七編を

配した。戦前・戦中・戦後の激動期をくぐり抜けて、平成の現代に生きる一人の男の「自分史」ともなれば、この一冊は出版の意味がないことはないという気もした。

こうしてできた句文集を、あちこちの句会で知り合った人や賀状を交換している人たちに謹呈した。この中には川柳人だけでなく、一般の人もふくまれている。一段落すると、次々と電話がかかり、便りが来る。およそ七割以上の人から何らかの反応があった。川柳人では便箋数枚にわたって鑑賞や批評をしてくださる方が何人もあつてありがたかったが、特にうれしかったのは、全く川柳に縁のない人から率直な感想を寄せられたことで、「川柳についての認識をあらたにした」と言われる方もあつた。

おわりにふれておきたいのは、詩人の土井大助さんが新聞の読書欄に長文の書評を書いてくださったことである。書評は、

鶴彬にかわり一筆もの申す

など十九句を引用しつつ、さまざまな角度から作品を分析・評価し、「評者はこの一冊によって、現代川柳の訴求力にあらためて刮目した。この国独特のこの文芸を民主主義的活力の今日的表現と納得させられつつ、新鮮に楽しく心を洗われた」と結ばれている。やはりこの句文集は、出版してよかったと思う。

(一九九九年十一月)

七月二十八日

誰にも生涯にわたって忘れることができない日があると思う。私の経歴については、この欄でもふれたことがあるが、その日はレッドページが行われた七月二十八日、そして今年はずいぶん五十年目にあたる。この事実は今や知る人も少なくなつたが、それは私にとって記念すべき日と言うだけでなく、日本の戦後史にも特筆される日であると思う。

その事件は、昨年一月二十六日付『毎日新聞』の企画記事「21世紀への伝言」として大きく掲載されたので、その一節を引用する。

—'50年7月28日午後3時。大阪市北区堂島にあった毎日新聞大阪本社2階の社会部で、内勤記者だった田中さんは部長に呼ばれた。「何事か」といぶかりながらも、指示通り編集主幹室に入ると、主幹が立ち上がり、「本日、ここに重大なことを伝える」と前置きして文書を読み上げた。「マッカーサー書簡の趣旨に基づき、本日、君を解雇する。ただちに退去されたい」。問答無用だった—

毎日新聞でページされたのは、大阪本社十八人、東京本社三十一人、計四十九人。朝日新聞百四人、NHK百十九人など。これを皮切りに全国の民間企業と官公庁に波及、約一万二千人

が解雇された。この措置は、レッドパージ直前の六月二十五日に起きた朝鮮戦争遂行のための反共政策と言論弾圧の強行措置であったことは、歴史的に明らかである。

これによって私は、のつていた軌道からはずされ、天職と心に決めていたジャーナリストの道を断たれてしまった。かろうじてペンにかかわる仕事に就くことはできたが、それから三十年、妻子をかかえて生活のための悪戦苦闘がつづいた。かつて一枚の赤紙が多くの人々の運命をくるわせたように、一片の辞令が人間の一生をゆがめたのである。レッドパージという「負」の烙印はいつまでも付いて回り、思想・信条や人間としての生き方まで変えてしまった人も少なくはない。

そしてこの事件は、無残にも人と人との絆さえも断ち切った。その日まで同僚として友人として付き合っていた人たちが道を避け、会っても顔をそむけるようになった。今まで世間の荒波を知らなかった私は、人間がここまで非情になれるとは思わなかった。それどころか、私と同じく解雇された仲間もしばらくは行動をともしたが、いつしか一人去り二人去り、ほとんど音信不通となった。

図らずも垣間見た「人間模様」だが、私が人間不信におちいらなかったのは、ごく少数だが五十年前のことを語り合える仲間がいたこと、私が苦しかった時、手を差し伸べ、励ましてくれた友人がいたからである。やはり人間を救えるものは人間であると思う。

(二〇〇〇年八月)

西尾 栞先生と私

平成四年の暮れ、西尾栞先生から電話があった。「今、着きましたでえ。ええ本ができましたなあ。おおきにおおきに」。川柳塔八〇〇号記念特集号（平成五年一月号）の編集に対するねぎらいの言葉である。同号は、全国誌上川柳大会入選句や田辺聖子さんらの寄稿文などを掲載し、二〇〇ページの大冊となったが、これでいっぺんに疲れが吹っとんだ。先生はこういう気配りをする方である。

栞先生が主幹に就任された翌年の昭和五十八年、私は同人にしていたいたから、平成六年に退任されるまで十二年間にわたって御指導を受けた。それだけでなく、同五十九年九月に先生を団長として上海・蘇州・桂林を訪れた中国吟行の旅に伴い、全日本川柳大会をはじめ各地における川柳大会に誘われて参加し、寝食を共にして心安くしてくださいました。

そして今なお思い出に残るのは、六十年九月、新阪急ホテルで開かれた喜寿・金婚・句碑建立五周年記念川柳大会の花やかなシーンである。金屏風を背に和服姿で並んで座られた御夫妻

のにこやかなお顔がありありと臉に浮かぶ。さらに六十三年度の秋の叙勲で木杯授与の榮譽に輝かれ、翌年の平成元年三月に受章祝賀会、同七月に叙勲記念川柳大会がなにわ会館で盛大に開かれ、川柳塔社を挙げて沸きに沸いたのは、先生の人徳のしからしむるところだろう。

平成二年に私が編集を担当するようになってから毎月、月末近くなるとドサツと選句した用箋の束が届き、巻頭言やエッセイなどの原稿とそれについての連絡という主幹―編集長間のホツト・ラインが続いた。よろず大らかな人柄であったが、締切日をきちんと守られたのは、編集部としてありがたかったことを特記しておきたい。

このほか先生は、全国川柳界の重鎮として畏敬され、全日本川柳協会常務理事の任にあつて出版委員長をつとめ、大阪川柳人クラブの会長にも委嘱された。私は先生の御指名により日川協常任幹事として『全日本柳人写真名鑑』などの出版実務にたずさわり、また川柳人クラブも幹事の一員として『大阪文化芸術年鑑』の執筆陣に加わった。これもできるだけ先生をお助けしたい一念からであった。

そして逝去された翌年の平成八年、刊行委員の一人として『定本 西尾葉句集』を編集し、御霊前にお供えたことで、いささかの御恩返しができたと思っている。

(二〇〇一年六月)

鶴彬忌について

万歳とあげた手を大陸へおいて来た

本誌六月号に「座右の句」として、猪川由美子さんが鶴彬のこの句をあげている。彼の作品がこうした形で紹介されるのは、これが初めてではないかと思う。その評伝については、昭和五十九年十月号の「川柳の群像」に東野大八が執筆しており、田辺聖子監修『川柳の群像』にそのまま収録されている。これを受けて蘆溝橋事件五十周年にあたる昭和六十二年八月号の目次下に「日中戦争と鶴彬」と題するエッセイを、私が書いている。

この人について私が知ったのは、川柳を始めて間もない昭和五十六年ごろ、書店でふと手にした一叩人編著『反戦川柳人・鶴彬―作品と時代』で、これによって彼の作品・評論・経歴のほぼ全容を学ぶことができた。明治四十二年、石川県に生まれ、昭和十三年、二十九歳の若さで収監のまま非業の死を遂げているが、彼の軍服姿の写真を見ると、敗戦の年に三十歳で戦死した私の兄の面影が臉に浮かんでくる。

『昭和史』の著者で、作家の半藤一利は、「後世から見れば、満州事変前後に大きな昭和の

転回期があったとわかるが、当時の日本人は大いなる転回期を生きているとわかっていなかった。同様のことがいまの私たちにもあてはまる」と書いている。大義なきイラク戦争に派兵し、憲法を空洞化した現況を批判した言葉だが、このような情勢の中で反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かすことを訴えて、あかつき川柳会が行った「鶴彬顕彰全国誌上川柳大会」に、予想を上回る参加者があり、多くの優れた作品が集まった。

ところで俳句・川柳には忌日の句があり、奥田白虎編『川柳歳事記』に「忌日一覽」が掲げられ、全日本川柳協会編『川柳入門事典』にも「忌日と例句」の一章があつて、多くの作家・俳人と川柳人の忌日とそれにちなむ作品が示されている。そしてこの両書ともに、昭和八年二月二十日、警察の取調べ中に三十一歳で急死したとされる小林多喜二を収録しているが、鶴彬については触れていない。

早くから彼に注目して多くの評論を書き、『鶴彬全集』の復刻まで行った作家の澤地久枝さん、『川柳でんでん太鼓』などで彼を紹介した田辺聖子さんも、小林多喜二ほどに鶴彬が知られていないことを訴えている。没後六十六周年に当たる今年、九月十四日を「鶴彬忌」として設定し、彼の業績を偲んで反戦平和の誓いを新たにすることを提唱したい。

イラク派兵 血涙流す鶴彬 正 坊

(二〇〇四年九月)

山頭火と「銃後」

いわゆる食わず嫌いで、たまたま目に触れるもののほかは、読みたいとは思わなかった種田山頭火の全作品を通読した。数年前、彼の作品が中国語に訳して発表され、詩人や文学者の間で大きな反響を招いたという記事を読んだのが動機である。そして、その訳者である中国社会科学院外国文学研究所研究員の李芒氏が北京で開かれた大衆文学研究シンポジウムで発表した論文が、「二中国文士の山頭火観」として雑誌『波』に掲載された。

自由律俳句の旗手としての山頭火の作品を理解するために、その評伝も読んでみたが、普通の市民生活を送ってきた私にとっては、妻子も家も捨て、生涯を漂泊行乞の境涯に生きた彼の、自在とも放縦とも言える矛盾だらけの生き方に共感することはできない。しかし、ここで私は一知半解の山頭火観を述べるつもりはなく、ただ一代句集『草木塔』の中の連作「銃後」についてその作品を紹介し、彼の思想の一端に触れてみたい。

と言うのは、これまでに私が散見した山頭火を紹介する文章の中で、特にこの作品群を取り

上げたものではなく、私も前記の李芒論文を読んで初めて知ったからである。作品は全部で二十五句、日中戦争下の昭和十三年ごろに作句したものとみられる。

日ざかりの千人針の一秒づつ（街頭所見）

ふたたびは踏むまい土を踏みしめて征く

ひつそりとして八ツ手花咲く（戦死者の家）

いさましくもかなしくも白い函（遺骨を迎へて）

しぐれつつしづかにも六百五十柱

もくもくとしてしぐるる白い函のまへに

街はおまつりお骨となつて帰られたか

ぼろぼろしたたる汗がましろな函に

お骨声なく水のうへをゆく

その一片はふるさとの土となる秋

戦死者の遺骨を迎えて詠んだ句が多いが、出征兵士の歓送、軍馬の徴集から戦傷兵士にも目

を向けており、鶴彬の作品を思わせるような句もある。

みんな出て征く山の青さのいよいよ青く

これが最後の日本の御飯食べてゐる、汗

音は並んで日の丸はたたく（ほまれの家）

馬も召されておちいさんおばあさん

足は手は支那に残してふたたび日本に

戦争に反対することはできないが、せめて戦死者の霊を慰め、銃後の悲しい風景をあるがままに表現したものとして、これらの作品は貴重である。既成俳壇に安住しない漂泊者にして可能であつたのだろう。五十五年前の十月十日、山頭火はその生涯を閉じた。

（一九九五年十月）

川柳こぼれ話

辞典あれこれ

高名の某俳句作家は、ありつただけの辞典を机辺に並べて句を作るといふ話を何かで読んだ。また、ある川柳作家は、作句の妨げになるので、ほとんど辞典を使わないと言うのも聞いた。いささか両極端で、私は「辞典は使うべし。使われるべからず」をモットーとして辞典を活用している。

そもそも川柳は文芸―言葉で表現する芸術である。短詩形文芸においては、一つの言葉が決定的な役割を持っており、言葉はその意味を知って正しく使ってこそ生きる。そして辞典は、文字と言葉を五十音順に配列し、その意味や用法を明らかにした本、即ち言葉の宝庫である。およそ文芸に携わる者が、この宝庫の扉を開かないという手はない。

ところが川柳の作品には、短歌・俳句と比べて誤字・誤用が多いように思う。課題吟の場合、まず辞典でその言葉の意味・用例を確かめ、正しく書くように務めたい。まして選者になった場合、課題の言葉の意味を誤った句を抜くことは、選句力以前の問題であり、絶対にあつてはならない。

そこで辞典ということになるが、専門用語の辞典はおくとして、国語辞典に限ってみても実に多彩である。辞典はいずれも大出版社が一流の学者の編集で出版しており、それぞれに特色があつて

優劣をつけがたいが、次に私が使用する辞典を中心に述べてみたい。

まず大型では、新村出編『広辞苑』（岩波書店）があり、私も初版以来、愛用しているが、松村明編『大辞林』（三省堂）もこれに勝るとも劣らず、この二冊をメインとしている。なお、『逆引き広辞苑』もお忘れなく。このほか、最大の国語辞典である『日本国語大辞典』（二十巻）までは手が出せぬが、それを要約した『国語大辞典』（小学館）とカラー版の『日本語大辞典』（講談社）も折りにふれて使っている。

次に中型では、古くから『岩波国語辞典』があるが、近頃では知る人ぞ知る『新明解国語辞典』（三省堂）を愛用している。そして携帯用の小型としては、『必携用字用語辞典』（三省堂）がとても便利である。

これだけ辞典の名を並べると、読む方もうんざりされたと思うが、どうしても付け加えておきたいのは、外来語辞典である。これを頭から毛嫌いする向きもあるが、外来語は新聞をはじめ様々な文書で使われ、俳句・川柳でも多用されている。言わば新しい日本語であり、最近ではカタカナ語と呼ばれている。一般の辞書にもかなり採録されているが、専門辞典としては『デイリーコンサイス カタカナ語辞典』（三省堂）をお薦めしたい。

（一九九〇年三月）

外来語について

最近のカタカナ書き外来語の急増は、すさまじいものがある。「今、世の中を見ていると日本語で言えることをカタカナで言うことがずいぶん多い。なぜ日本語があるのに使わないのだろうか」(『川柳春秋』〃わたしの川柳作法〃)、「現代川柳を標榜するからには、現代の感覚にダイヤルを合わせた作品を志向するのは当然であるが、その現われの誤解からか無闇やたらに外来語を用いた句が多いのに目を見張る実情である」(『番傘』〃編集手帖〃)と、川柳界でも問題となっているようだ。

そもそも漢語も外来語ではないか—と言い始めると議論ははてしなくなるので、これはしばらくおくとして、外来語の大半が英語からのもので占められているのは明らかだが、フランス語起源もかなり多く、医学ではドイツ語、音楽ではイタリア語関係が多い。また最近では、ギリシャ語、ラテン語まで登場し始めており、古くはポルトガル語、スペイン語、オランダ語から入り、タバコ、メリヤスなど、すでに日本語化したものさえある。

つまり外来語とは、「外国語から日本語に取り入れられて、日本語としては日常で用いられている語」ということになるが、数量的にはどのくらいあるのだろうか。大型の『外来語辞典』では一万語以上を収録しているが、石綿敏雄はその著書で、『三省堂国語辞典』の見出し語総

数六五、〇〇〇語のうち、一〇・九パーセントにあたる七、一〇〇語が外来語で占められているとしている。また、国立国語研究所の一九五六年調査では、雑誌九〇種で語彙の九・八パーセント、新聞三紙で一・二パーセントが外来語という結果が出ているが、少し統計が古いので、現状はこれに数パーセント上積みしなければならないだろう。

そこで川柳では——ということになるが、手近なところで『川柳塔』四月号の川柳塔欄掲載の五〇〇句（九五入）について見ると、句中に外来語を使っている人は五五人で、使っていない人（四〇人）をかなり上回る。トータルすると八七句（一〇〇語）で、外来語の比率は一七・四パーセントとなる。句数と語数が異なるのは、一句中に二語または三語の外来語を含む句があるからだ。

さて目を俳句に転ずると、この分野ではかなり肯定的らしく、「外来語を詠みこなすために」という副題がついた大野維風子編『俳句外来語辞典』（博友社刊）まであり、人名・地名を含む外来語二、〇〇〇語と現代俳人による参考作品が示されている。

ここであえて結論めいたことで締めくくるつもりはないが、作句にあたつて立派な日本語の一つである外来語を頭から毛嫌いすることがあつてはならぬと思う。和語・漢語だけに頼らず、美しい外来語を発掘し、詠みこなす努力を怠つてはならない。ただし、まだ市民権を得ていない言葉を新奇をてらつて乱用すること、一知半解で誤用することだけは避けたいと思う。

（一九九〇年五月）

さまざまな表記法

先に日本語には和語と漢語と外来語とがあるとのべたが、和語はひらがな、または漢字まじりのひらがな、漢語は漢字、そして外来語はカタカナで書くことが現代では定着している。つまり日本語は一つの国語で三種の文字を混用するという世界にもあまり例のない言語だが、最近ではPTAとか、NHK、JRなど、英字（アルファベット）も使うから、これを入れると四種ということになる。

これをわずらわしいと思うか、すばらしいと見るかは意見の分かれるところだが、森中恵美子さんが何かに書かれていたのを孫引きさせていただくと、「漢字は硬い感じ、平仮名は天平美人のまゆ、片仮名はジャックナイフ、いろいろの特色を持つ日本語はすばらしい」と、詩人の草野心平が語っていたという。表記の道具が多いほど多彩な表現ができると思うので、私もこの考え方に賛成である。

そこで問題となるのは、英字はしばらくおくとして漢字・ひらがな・カタカナの三種の文字を一つの文や詩の中でどのように用いるか、それによってどういう効果を発揮するかということである。会津八一の歌がすべてひらがなで表記されていることは広く知られているが、あることばを漢字で書くか、かなで書くかについて小室善弘著『歌帳句帳』は、次のようにのべている。

「全体をかなで書く場合には、漢字かなまじりにくらべて、読みの速度は緩慢となり、意味の明瞭性もいくぶんはやけてくる。そのかわり、一字一音がほぼ同じ重さを持ち、ほぼ同じ速度で規則的にはこぶことになるから、漢字まじりより、語と語の間の緩急の差が少なくなり、したがってリズムは平明で、のびやかなものとなる。また、字画のこみ入った四角な漢字が目飛び込んでくることもないから、全体が濃淡のないあかるい顔をもつことになる」。そして俳句では、「をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏」を例示しているが、川柳では、酒井路也の作品に、ひらがなだけの句が多く、「おまつりがすんでわたしになるわたし」などがあり、それなりの効果をあげている。

これとは反対に全文漢字表記の俳句もあり、「四顧蒼翠南總里見八犬伝 富安風生」がよく知られているが、川柳でも、「脚線美汝元来日本産 川上三太郎」がある。

やや特殊な例を示しすぎたが、短い詩型で柳誌または句報に活字となったときの視覚的效果を考えると、どのことばをどの文字で表記するかについて、工夫の上にも工夫を重ねたものである。なお付け加えると「人間」を「にんげん」、「レモン」を「檸檬」、「鉛筆」を「エンピツ」、「えんぴつ」、「ビードロ」を「びいどろ」など、文字を転換することも一つの表記法であり、これは作者と鑑賞者のセンスに待つほかはない。

(一九九〇年七月)

川柳の用字用語

この問題は、複雑な日本語の性格を反映して「一刀両断」というわけにはいかない難しさを持っている。用字用語については、内閣告示「常用漢字表」「送り仮名の付け方」があり、公文書はすべてこれに準拠することとなっている。川柳もこれに右へ倣えするのであれば、とりたてて論議するまでもないが、告示そのものに「科学・技術・芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ばそうとするものではない」と逃げ道を設けているから困る。

したがって文学の世界では、これらをいっさい無視して旧字・歴史的仮名づかいで通している作家もいるし、詩・短歌・俳句でも新傾向の作家は別として、あまりこだわってはいないようである。特に俳句の場合、新聞の俳壇でさえ、歴史的仮名づかいを固守し、文語体が主流を占めている。その点、川柳はレトリックとして文語を使う以外は、古くから口語をたてまえとし、戦後は歴史的仮名づかいの作品は皆無と言っている。

そこで柳誌では、この問題をどのように取り扱っているかということだが、『川柳展望』（第60号）の「言語通信」（天根夢草）では、「本誌の送り仮名の付け方は、内閣告示による本則・例外・許容に統一していない。短詩文芸においては、作者の視覚（字面）も重要だと思われるからである」としている。

さて、いよいよ本論に入らねばならないが、作句にあたつてはいかなる漢字・送り仮名を使うのも、全く自由であるということを大前提としたい。これは文芸として、当然すぎるほど当然である。しかし、それを作品として仕上げ、句報・柳誌に発表するについては、やはり何らかの基準が必要ではないだろうかというのが私の問題提起である。

まず第一は、旧字体は固有名詞以外は絶対に使わない、俗字体も避けたいということ。旧字とは、獨（独）、俗字は斗（闘）のたぐいである。第二は、送り仮名は可能なかぎり、内閣告示「送り仮名の付け方」に準拠したいということで、ここでは本則のほかに例外・許容まで設けているから、かなり裁量の幅があり、これによって表現の自由が妨げられることはほとんどないと思う。歴史的仮名づかいを排することは、改めて言うまでもない。

そして第三は、やはり漢字の問題であり、何をおいても漢字を正しく使うことを心がけたい。実は案外、このことがなおざりにされている。第四は、接統詞（又・尚・併し）はできるだけ平仮名で書くこと。おわりに第五は、原則として常用漢字を使うようにしたい。

しかし、この第五が最も問題となるところで、最近、意識的に多彩な漢字を使う傾向が強まっております。「貌」（かお）、「炎える」（もえる）、「翔ぶ」（とぶ）などが多用されている。視覚（字面）もおろそかにはできないが、句の意味を伝えるのに、どうしてもその漢字を使わなくてはならないかどうかを、吟味してみることも大事だろう。

（一九九〇年九月）

漢字は適切に

「川柳の用字用語」について書いたところ、『川柳展望』の天根夢草氏からお便りを頂いた。「文章拝読、ごもつともです。一番みつもまないのは『送りすぎ』ではないでしょうか。多くの柳誌に『先き』『返える』『新らしい』などが見えます。はずかしいことです。第五の件、仕方のないことです。が、どうもコケオドシの句になってしまふような気がいたします」とあった。

この『第五の件』とは、「最近、意識的に多彩な漢字を使う傾向が強まっており……」を指し、拙文で、「貌」「炎」「翔ぶ」を例としてあげている。特に「翔ぶ」は、司馬遼太郎原作の『翔ぶが如く』が、茶の間の人気を集めたこともあって、ずいぶん川柳の世界でも使われたようだ。「飛翔」という熟語もあり、「とぶ」と読んで読めないことはないが、『角川漢和中辞典』によれば、本来の訓は「かける」であり、「とぶ」を漢字で書く場合は「飛ぶ」または「跳ぶ」が妥当だろう。もちろん、訓は同じでも、前者と後者とは意味が異なる。同様に「貌」は「かたち」が一般的な訓である。

ところで、私は若い頃、山本有三、松坂忠則のカナ文字論に共鳴し、できるだけ漢字を制限した文章を書くようにつとめたことがあった。表意文字である漢字よりも、表音文字である仮名（かな）の

方が言語として合理的であり、日本語の表記にも適していると考えたからである。そして理論的には、子音と母音を分離できるローマ字表記がいちばん優れているのではないか、と思うに至った。

しかし、理論と実際とは違う。そして、一般の国語教育とは別に中国語を専攻した私は、平均以上に多くの漢字を習得しているし、漢字の価値を認める点においては誰にも劣らない。特に最近、「記号」として表音文字よりもはるかに優れた漢字の特色が再評価されていることからしても、すでに日本語表記の要素となっている漢字を、もつともつとたいせつに扱うべきだと思う。

本論からすこしそれたようだが、漢字を大事にすることと、乱用することとは、似て非なるものである。散文においても、また川柳のような短詩型文芸においても、漢字の音訓と字義を正しく知って使うようにしたい。他の文芸は知らず川柳においては、あまりにも誤字が多すぎる。もともと川柳は、口承文芸としての性格が強いので、漢字を知らなくても作句はできるが、それを文字に書いて発表するにあたっては、正しく表記すべきである。

また、固有名詞以外でルビを振らなければ読めない、当て字に類する漢字はできるだけ使わないこと、披露を聞いて意味が分からない漢語は避けること、接続詞（又・尚）のほか、かな書きが広く行われている―「様」（よう）、「呉れる」（くれる）、出来る（できる）―は、かなを使いたい。

（一九九一年二月）

文章の書き方

寺尾俊平集『風の中』の解説を橘高薫風氏が書いている。句の鑑賞文はこういうふうを書くものかとうなずきながら読んだが、川柳に関心が深い木津川計氏が『番傘』誌に寄せた文章の中で、「実に滋味あふれる、温かくてこころ優しい一文、私の言う『短詩型に長けた人は文章がうまい』を裏つける名文であつた」と激賞している。

麻生路郎も文章が得手だったらしく、構造社出版の川柳全集にも、『川柳エッセイ』が多く収録されているが、中でも「南北逝く」はすぐれた追悼文だと思う。新聞記者を経て広告マンとなつた岸本水府の文才は定評があるが、「人間手帖」はどの章もおもしろい。芭蕉をはじめとして、俳人・歌人の名文家は多く、特に正岡子規は、「日本のコラムニストの草分けの一人」とされている。

私も木津川氏に和したいし、そうありたいものだと思うが、現実はそうとはかぎらない。私の実感としては、その相関関係はあまり高くないとさえ思われる。各柳誌には多かれ少なかれ川柳作品のほかに、さまざまな文章が掲載されているが、他の文芸誌と比べるとかなり見劣りがする。

川柳をふくむ短詩型文芸とエッセイなどの散文とは、もとより共通する面はあるが、やはり異なる性格もあり、川柳には川柳としての勉強があるように、文章を書くにはやはりそれなりの習練が必要

で、はじめから活字になる文がつづれるものではない。中国では、詩をつくる、文をつくる、書がかかる、絵がかかるのが文人の資格とされたが、せめて詩才と文才は兼備したいものである。

それではどうすれば文章が書けるようになるかということだが、簡単に言ってしまうと、できるだけ多くの名文を読み、文を多く書くということにつきる。それではあまりにも芸がないので、文をつくる上でヒントになるような事柄を二、三のべて責めをはたしたい。

何を書くにしてもまず、主題（テーマ）をしっかりと与えることである。「何を言いたいか」が書いている本人にはつきりしていなくて、読む人に分かるはずがない。それが決まれば、次は何から書きはじめるかである。リードとも言いが、書き出しの行数がその文章の「目玉」であり、それから本論にうつり、結論でしめくくる。オーソドックスな三段階法の構成である。

「京都三条 糸屋の娘／姉は十六 妹は十四／諸国大名は 弓矢で殺す／糸屋の娘は 目で殺す」。こんな文句を読まれたことがあるだろうか。頼山陽作とも梁川星巖作とも言われているが、漢詩の叙法である「起・承・転・結」をコンパクトに示した文句で、文章設計の基本と考えてよい。

さらに、レポート的な文章を書く場合は、「だれが・いつ（時）・どこで（所）・何を」したかを押さえること、「なぜ（理由）」どのように（状況）」を付け加えることもある。

（一九九一年九月）

定型と音字数

今回は、定型の問題にメスをあてることにした。「定型を守れ」「中8はだめだ」とやかましく言われながら、定型とは何かということが、それを論ずる人たちにとつても、あまり明確でないと思われるからである。

基本定型（正格定型）が5・7・5の十七音字であることについては、異論はない。しかし、十七音字であつて5・7・5ではない変格定型というものがある。手元にある俳句や川柳の解説書を参照して私なりにまとめてみると、次の九タイプになる。

- ① 7・5・5 ② 5・5・7 ③ 8・9 ④ 8・4・5 ⑤ 5・9・3 ⑥ 7・7・3
- ⑦ 6・6・5 ⑧ 9・3・5 ⑨ 9・8

それぞれの例句を示すが、古川柳も混じるので、すべて作者名は略させていただきます。

- ① 頷いてやる 信じては いない耳
- ② 一人去り 二人去り 仏と二人
- ③ 手を組んでみたら 疫病神だった
- ④ 無抵抗主義の 炎を 抱いている

- ⑤ 会えるとも とても会えないとも 思う
- ⑥ うばわれたのも 捨てられたのも 夜道
- ⑦ あの亭主に なるやつはと いらぬ世話
- ⑧ 黄色なすりこぎで 猫を ぶちのめし
- ⑨ 保護色をまとうて 朝の定期券

調べればもつとあるかも知れないが、変格定型も「定型」であることに変りはない。初心者
に基本定型の習得を強調するのはいいが、もし、5・7・5だけが定型だとかたくなに考えて
いる人があれば、その認識は改めていただきたい。また、作者や選者が正格定型だと思ってい
る句の中に、実は変格定型であるものが少なくない。披講の際、区切り方を誤ると、リズムが
壊れてしまうし、意味までが違ってしまう場合さえある。

ここで定型を十七字あるいは十七音と言わず、十七音字としていることに注目してほしい。
作品として書かれた字の数ではなく、それを声に出して読んだ時の音声の数を音字と言う。本
来の日本語、いわゆる「やまとことば」を仮名で書けば1字1音だが、漢字の場合は1音もあ
れば2音もあり、外来語はさらに厄介である。私たちは、これを習慣的に扱ってきたが、『川
柳春秋』に大木俊秀氏が「音字数の数え方」と題して定式化しているので紹介しておきたい。

① 促音（そくおん）≡「つまる」音で、表記上は小さい「っ」で表され、これが1音字とされる。例えば、「突っ張って」は5音字となる。

② 拗音（ようおん）≡「ねじれる」音で、き・ぎ・し・じ・ち・に・ひ・び・ぴ・み・りーのそれぞれに、小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」を付けて表記される。「ちゃ」（茶）・「しゅ」（朱）・「りょ」（旅）がそれで、文字では2字となっているが、1音字として数えられる。例えば、「勝者」は3音字となる。

③ 長音（ちょうおん）≡長く引き伸ばして発音するもので、通常、音節の母音を二倍に伸ばす。したがって、字数と同じ音字数となる。片仮名で表記する外来語の長音記号「ー」も同じで、例えば、「上京中」は6音字、「ハーモニー」は5音字となる。

④ 撥音（はつおん）≡末尾が「ん」で表される音で、これだけで1音字となる。例えば、「新幹線」は6音字、「ロンドン」は4音字となる。

さすが放送関係者だけに、きちんと整理されている。まず、論議の前提となることを押さえておく必要があるので、序論が長くなった。

（一九九二年九月）

いろいろな定型

結論から書くことにする。いわゆる定型には、①正格定型、②変格定型、③準格定型、④別格定型、の四種類がある。それ以外は、非定型、破調、あるいは自由律と言ってもよい。①と②については、「定型と音字数」で述べたとおりである。④は私の造語だが、武玉川調の7・7を指す。近ごろ、あまりお目にかからないが、伝統的な定型短詩として、もっと作られてもいいのではないかと思う。

③の準格定型というのも、耳慣れない用語だが、『川柳総合辞典』（雄山閣）から、その内容とともに引用させていただくこととしたい。要するに、「字余り」「字足らず」であって、定型に準ずるものとして認知してもよいというケースを指しているが、まず、前提として公表された資料にもとづいて、実態をあきらかにしてみたい。

亀山恭太が『番傘』に連載した「川柳作法」第九章によると、各柳誌について調査した全体の総平均で、中8が4%、下6が1%に対して上6・上7が12%あったという。また、大木俊秀の調査によれば、中8の1%に対して上6・上7・上8が計24%を示している。これは、上の字余りの字余りがいかに多いかを実証する数字であり、中8・下6を厳しく戒めながらも、上の字余

りは許されるとした「頭重脚輕」の俳句の伝統を継承している。それでは、全体としての字余りは、どの程度まで許されるのだろうか。

これについて橘高薫風は、「長句・短句ともに十七音字プラス・マイナス五音字が限界：いくら長くとも二十二音字、いくら短くても十二音字までだと思う」と述べており、俳句でもそれが定説となっているようだ。ともあれ、字余り・字足らずの句は千差万別であり、変格定型のようにいくつかのケースにまとめることは難しい。そこで前記の『川柳総合辞典』では、次の二句を準格定型として例示している。

①方程式で　ぶつかってくる　女が光る

②昭和という　靴下が　揺れている

読めば分かるように、①は7・7・7　②は6・5・5である。例句は略するが、③6・7・5　④7・7・5　⑤8・7・5　⑥5・5・5　⑦5・7・6　なども、そのカテゴリ1に入れていいと思う。ここでやはり、触れておかねばならないのは中8についてである。推敲が十分でないために生じたものは論外だが、尾藤三柳著『川柳作句教室』は、例句を示してこのことに論及している。

書き上げて　これから名文　綴れそう

昼下がり　花咲く予感の　バスに乗る

二句とも中8の音脚が4・4であり、全体としてのリズムを崩さないばかりか、独特の格調を持つている――のが許容の条件とされている。また、望月はるひこも『ふあうすと』のエッセイで、松尾芭蕉の「夢枕 犬も時雨るか よるのこゑ」などの句をあげて、中8否定論に疑問を呈している。

終りに書いておきたいのは、「5・7・5は川柳の土俵であり、これを守らないのはルール違反」というきめつけ方はやめてほしいことである。規定がやや厳密さを欠いたかも知れないが、定型にはいろいろなタイプがあり、定型の持つ格調とリズム感を保ちさえすれば、定型詩としての川柳は成り立つのではないかと思う。なお、楠本憲吉著『俳句入門』では、定型感覚を音数律によって分析している。

(一九九二年十一月)

定型こぼれ話

「いろいろな定型」の末尾に、楠本憲吉著『俳句入門』の論旨を紹介しながらその内容にふれなかったので、補足しておきたい。数ページにわたる論述を簡単にまとめるのは難しいが、その要旨は「定型感覚とは、五・七・五の音数ではなく、五・七・五を基調とする三分節の音量である」ということにある。また、日本語のリズムを構成する音の最小単位を“音歩”と呼

び、「四音歩三分節の十二音歩から成る律格」を定型音律としている。

ここでは、中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」を例示し、「フル・ユキ・ヤ・メイ・ジハ・トオ・ク・ナリ・ニ・ケリ」(2・2・1 2・2・2・1 2・1・2)と、第一分節は三音歩、第二分節は四音歩、第三分節は三音歩となるが、これを読む場合には、第一分節の終りに一拍の休止音符が入り、そして第三分節の終りにも休止音符が入るから、結果として(2・2・1・0 2・2・2・1 2・1・2・0)となり、各分節とも音数は違っても音量は同じで、四音歩三分節の十二音歩であると結論づけている。

この「定型論」、「むずかしいな、と思ったのが第一印象」という批評も頂いており、今回の要約も私なりにかみくだいたつもりだが、耳慣れない用語もあって、すんなり理解してもらえないかも知れない。もとより私は憲吉説にすべて賛同するものではないが、従来、「定型」の定義として示されてきた十七音字とは別に、十二音歩という考え方を導入していること、また、「休止音符」に着目している点は、評価すべきではないかと思う。

さて、ここで定型論にしめくくりを付けるつもりはないが、私が日ごろ考えていることについて二、三ふれておきたい。一つは、伝統俳句はもとより現代俳句の主流が、なぜ文語体と旧仮名づかいを固守しているのか、ということである。俳句のサイドからは、これは当然すぎる

こととして取り立てた発音はないようだが、その方が定型とリズムを維持しやすいからではないかと私は思う。大岡信も言うように、文語は定型律と不可分に結びついており、それには旧仮名づかいが不可欠となる。

二つは、漢字（漢語）についてである。現在の日本語は、それを抜きにしては成立しない。先に「定型と音字数」でふれた促音・拗音・長音・撥音は、いずれも漢語から導入されたものである。中国語は古代・現代を問わず、一字一音の言語である。したがって漢字が渡来した当初は、当然のことながら一字が一音であったと推定される。しかし、その発音が日本語の発音構造になじまないため、馬（マ）が「ウマ」、梅（メ）が「ウメ」となったように、徐々に変化し、促音と拗音の漢字は一音字、長音と撥音の漢字は二音字となったものと考えられる。

これまで書いてきたことで、もし私が定型を軽視しているように受け取られる方があれば、それは誤解である。大岡信の言葉を借りれば、川柳や俳句が「一行詩として成立するためには、定型詩であることがおそらく決定的に重要」であると私も思う。そのためには、定型という概念を狭い土俵に閉じ込めるのではなく、もっと広く解釈し、日本語の美しい格調とりズムを最大限に生かす表現をめざすことが大切ではないだろうか。

（一九九三年一月）

音韻を考える

いつか川柳と音韻について考察してみようと思っていたところ、北川春巢句集『聴診器』の中に、「川柳における「音韻」について」と題する一文があるのを見つけた。『川柳雑誌』に掲載したのを再録したもののだが、いま読んでみても価値ある論考であり、よくもこれだけ調べられてものだと思う。そこでこの先人の知恵も借りながら、私の考え方を述べてみたい。

「音韻」の定義的解釈はしばらくおくとして、古今東西の詩（ポエジー）は原則として韻を踏むものである、特にヨーロッパの古典的な詩は韻を重視しており、中国の古典詩である漢詩には「平仄」「押韻」という厳格な約束事がある。これは詩が本来、口承文芸であるということから来ており、短詩形文芸の俳句・川柳も音韻を無視することはできないと思う。

さて音韻には、「頭韻」と「脚韻」とがある。頭韻とは五・七・五のそれぞれの頭が同韻（ここでは同じ音を指す）であるもので、①上五・中七が同音 ②中七・下五が同音 ③その他が同音の三つに分類される。①の典型的なものに

俺・に似よ俺・に似るなと子を思い

麻生 路郎

があり、「オ」が韻を踏み、〃思い〃のオもこれを補強している。現代の作品に見ると

人・恋・し・人・煩・わ・し・波・の・音

西尾 栞

校・長・の・校・長・ら・し・い・松・の・内

橘高 薫風

など、挙げればきりが無い。②の例には

信・ず・れ・ば・弥・陀・の・光・の・水・の・色

麻生 葭乃

恋・人・の・坐・つ・た・と・こ・ろ・へ・坐・つ・て・見

須崎 豆秋

があるが、これはあまり多くはない。やはりいちばん多く、さまざまなケースがあるのは③

その他で、二章一句の八・九では

三・人・が・酔・え・ば・三・人・ら・し・く・な・り

麻生 路郎

があり、九・八では、

池・に・鶴・残・し・て・一・家・都・落・ち

麻生 葭乃

を挙げるにとどめるが、ここで春巢は、路郎の言う「重語法」と「畳み句」についても、同じ音を繰り返すから、韻を踏んでいると見られぬこともない——と述べている。

ほ・ほ・え・め・ば・ほ・ほ・え・む・恋・の・川・田・順

麻生 路郎

吾・は・海・の・子・泥・を・立・て・泥・を・立・て

麻生 葭乃

がその例句だが、現代の作品においても

雌・蕊・雄・蕊・雄・蕊・雌・蕊の夜となる

工藤 甲吉

美・しい・人と別れる美・しい・うちに

岩井 三窓

と多彩である。

もう一つ、触れておかねばならないものに「脚韻」がある。この場合、

大杉を殺し思想を取り逃し

麻生 路郎

のように同音もあるが、子音と母音で構成される日本語の性格上、同じ母音を「韻」と見なすという指摘は正しいと思う。例えば

女好し酒好し友の旅便り

黒川 紫香

は、イ列(i)の韻を踏んでおり、拗音(ようおん)や撥音(はつおん)も同韻としていいだろう。拗音には工藤甲吉の句

人生はよいしよこらしよにどっこいしよ

があり、撥音には寺尾俊平の次の句がある。

友とまた旅せんかまた泣かんかな

(一九九四年九月)

リズムを大切に

句会で入選作品の発表（披露）を聞いていつも感じることだが、その調べが耳に快い句とそうでない句とがある。「文学で最も大切なのはリズム感覚だ」と北杜夫が何かで述べていたが、散文においてもそうであれば、まして韻文ではということになるう。

日本語は子音と母音で構成されており、一句の中に同じ母音が含まれておれば韻を踏むことは先に述べたが、子音についても同じことが言える。例えば次の短歌――

新しきサ・ラドの皿の酢のかおり　ここに沁みてかなしき夕

には、子音（s）が六つも入っており、口誦すれば何ともすがすがしい。俳人の坪内稔典も俳句における「音楽性」を強調しており、

一月の川・一月の谷の中

飯田 竜太

を例句として示しているが、

パ・ラ・ソルをバ・ンと開けば夏・弾む

大堂 哲子

もなかなかリズムカルではないか。

音韻（音素）には、子音・母音の「分節音素」とアクセント（強弱）・イントネーション（抑揚）の「韻律音素」とがある。中国語には四声（平・上・去・入）があり、本格的に漢詩をつくるには、その習得が必要とされており、ヨーロッパ系の言語にも、独特のアクセントとイントネーションがあるのは周知のとおりである。

日本語にももちろん、韻律があるわけで、外人が話す未熟な日本語は奇異に聞こえるし、日本人の場合も方言（国訛り）によって韻律が異なる。しかし、学校教育やラジオ・テレビの普及によって、標準語とともにある程度の標準音韻も一般化しているので、入選句を発表する際、正しいアクセントとイントネーションを用いなければ、せっかくのリズム感が生かされないことになる。

ところで、日本語の音は五〇音と言われているが、これに濁音・半濁音、さらに促音・拗音・長音・撥音を加えるとざっと一〇〇音となる。そこまで触れると話がややこしくなるので略するが、基本的な五〇音について見ても、それぞれ違う音感を持っている。

荒海や佐渡によこたふ天の河

松尾 芭蕉

有名なこの句は、母音（a）を九つも含んでおり、音感上也雄大な印象を与えている。楠本憲吉『俳句入門』では、特に「音感」について一節を設けているので紹介したい。

まず、母音では、ア（a）は雄大、イ（i）は軽快・繊細、ウ（u）は沈うつ、エ（e）は温雅、オ（o）は莊重のニュアンスを持つとしている。さらに、五〇音の行の区別から見ると、ア行音はやわらかく、明るくて丸みを持ち、カ行音は堅く、鋭く、高くひびき、サ行音は清く、さわやかで細い感じ、タ行音は厚く、豊かであり、ナ行音は鈍く、おだやかに弱く、ハ行音は軽く、明るく、マ行音は高く沈み、ヤ行音はア行音より濁って幅があり、ラ行者は流動・旋回し、ワ行音はア行音よりも重みがあつて強くひびくとしている。

古来、名歌・名句と言われるものは、すべてリズム感がすぐれているが、音韻や音感を意識して作句することは実際には少ないと思う。やはり作品を自ら「舌頭千転」して検討し、推敲を重ねることがたいせつだろう。

（一九九四年十二月）

季節感への配慮

俳句には「季語」を欠くことができない。と言うよりも、「切れ字」とともにたいせつな要素となっている。川柳はもともと季語は関係がないとされているが、四季がめぐる国の短詩型文芸であるかぎり、季節にかかわりのあることばが使われるのは当然であろう。大ざっぱに数

えて約四分の一の句に、春夏秋冬あるいは季節を表すことばが入っている。

では季節をどのように区分するのかということになるが、一般的には立春・立夏・立秋・立冬をそれぞれの季節のスタートとしており、歳時記の多くは春（二・三・四月）、夏（五・六・七月）、秋（八・九・十月）、冬（十一・十二・一月）に分類している。しかし、本州の氣候を中心にして考えると、二月を春、八月を秋というのは、実感としてピンとこない。そこで、江國滋著『きまぐれ歳時記』では、春（三・四月）、夏（五・六・七・八月）、秋（九・十月）、冬（十一・十二・一・二月）としている。

また、奥田白虎編『川柳歳事記』は、一応、現行の歳時記の四季区分に従ってはいるが、メーデー（五月）を夏、朝顔（八月）を秋とするのは、生活実態とややズレがあるとし、編集にあたっては旧来の区分は参考程度にして、体感的な実態を基準とした、と述べている。なお、二至二分、すなわち春分・夏至・秋分・冬至で季節を区分することもでき、この方が実際の季節感覚にもマッチするようだ。

ついでに触れておくと、季節を現すことばとしては、春夏秋冬とそれを含んだ熟語（秋日和・冬銀河）、月の名とその異称（霜月・師走）、それにいわゆる季語とともに、祝日・記念日、行事（憲法記念日・大文字・運動会）と忌日（路郎忌・白秋忌）などがある。

私がここで提言したいのは、川柳にもっともっと季節にかかわることばを使い、季節感あふれるフレッシュな句を柳誌あるいは句会で発表してほしいということである。先輩の句に

曼珠沙華さきれいな死に方ではないか 中尾 藻介

四面楚歌 故郷は豆の花の頃 橘高 薫風

など、季節をおりこんだ佳句が少なくないことに注目してほしい。

しかし、季語やそれに類することばを使うからには、きちんと歳時記を繰って四季を確かめてほしい。句会においては、やはりその季節に合ったことばを使うべきだが、句報・柳誌に発表される場合は、作句の時点から一か月間ないし二か月間の間隔があるので、多少のズレはやむを得ないだろう。とは言っても、真冬の一月号に「春の川」、「コスモス」（秋）、七月号に「花ごろも」（春）、「若菜」（冬）が登場するのはちょっと困る。

あくまで季節にこだわるなら、あらかじめ発表の月にきちんとピントの合った句を作るのも一つの方法だが、そこまでしなくとも、秋には秋、冬には冬、少なくとも季節に異和感を与えないような作品を発表したいと思う。

（一九九〇年十一月）

数詞を使った句

鶏頭の十四五本もありぬべし

正岡 子規

短詩型文芸の中で、数詞がこれほど論議の対象となつた作品はない。発表当時は話題にのほることもなかったこの句の真価を最初に発見したのは歌人長塚節であり、虚子のかたくななまでにこれを拒否した。後には試みに「鶏頭の七八本……」と作りかえてみたらどうかという否定論も現われ、「動く」「動かぬ」と評価が大きく分かれた、と山本健吉は述べている。

現代俳句においても、数詞が取り上げられ、「俳句にはよく数字を使ったものがある……一つには数字を使うと句がひきしまるからで、よく使われるのは一であり、次いで二、三。上へ行くにつれて少なくなり、大きい数字では百、千、万がよく使われる」（高橋悦男著『現代俳句セミナー』）とし、例句として

牡丹百二百三百門一つ

阿波野青畝

を挙げている。

川柳では、『番傘』連載「川柳作法」の中で亀山恭太は、数詞使いの名人と言われた高橋散二の句をいくつか挙げ、

びわ湖からモロコ一匹釣り上げる

紙芝居花子に母が二人あり

の「一匹」「二人」の数詞は動かないが、

朝刊に市場が三つ折りこまれ

神様に頼んで五年子が出来ず

は「動く句」であるとしながら、数詞に限って言えば、この適当な数字は句を「まことしやかに」にし、「しゃれた味」をただよわせるのに役立っているとしている。

一方、『川柳春秋』の「川柳添削教室」で高杉鬼遊は、例句として

なぜこうも異質で無事で四十年

五十路坂迎えて深し夫婦仲

を示し、これらの数詞は真実にもとづいて入れられたものであろうが、句意を補強することばに変えた方が思いがより伝わるのではないか、と数詞の使用をやや否定的に見ている。もとよりいろいろな意見があつてよいと思うが、作品に数詞を多用するかしないかは、「好み」の問題でもある。

麻生路郎も数詞をよく使っており、

箸紙を書くに一本つけさせる

二階を降りてどこへ行く身ぞ

三人が酔えば三人らしくなる

などがある。

初めから数詞論議に決着をつけるつもりはなく、作品に即して研究する必要があると思います、もくせい川柳会では今年一月以来、兼題の一つに数詞を入れてきたので、次にその中から例句を紹介しておきたい。

一 馬頭観音 蟻一匹の雨やどり

二 二次会の女は欠伸ばかりする

三 三代ののれんを守る女紋

四 渡り鳥 四季を忘れず飛んでくる

五 五年目の浮気でしたと指を折る

六 堀の中で六法全書を暗記する

七 七人の敵の中には妻もいた

八 八角時計 明治の音がまだ残る

九 九字を切る如来の膝に空蟬が

(一九九一年十二月)

固有名詞のメリツト

大阪市都島区に鳴るギター

かなり以前のことと思うが、中尾藻介に会った時、この句をつぶやいたところ、「あんた、よう知ったはりまん」ということになった。『中尾藻介川柳自選句集』によると、昭和四十二年作となっているが、おそらく昭和二十年代を回想した句ではなかろうか。その頃の都島区には伝統を誇る都島工業学校と同工専、大阪大学工学部のキャンパスがあり、北大阪らしくない「文教地区」であった。私はそこに住んだことはないが、仕事の関係でしばしば訪れたことがあり、都島区という固有名詞からこの句が印象に残っていたのだと思う。

天王寺駅に待たせてある男

美しいひとに会うなら神戸線

自選句集をパラパラとめくっただけでも、固有名詞を使った句が多く、人名もある。

高村光太郎が凡々の日に死せり

宇野千代のように生きても同じこと

大山竹二とおんなじ咳をする男

古来、俳諧では与謝蕪村が数詞と固有名詞の名手として知られる。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

はその両方を含む秀句であり、数詞はさておき、地名・人名を詠んだ句が多い。

池田より炭くれし春の寒かな

絵団のそれも清十郎にお夏かな

ところで、川柳と固有名詞については、亀山恭太が『番傘』に連載した「初心の方のための川柳作法」に二回にわたって書いている。「(固有名詞)」と句の内容がマッチしたときは、複雑な内容を短い言葉で表すことができ、「メリットとして、①現実性を帯び、句が生き生きする②そのふんい気によってムードをかもしだす③作者の好みや心理状況が強調される」を挙げている。

この解説には、付け加えるなものもなく、人名としては作家、画家、音楽家、俳優と作中人物・劇中人物があるとしている。そして、気を付けねばならないこととして、①動く句にならぬよう②報告句・説明句におわらぬよう③ひとりよがりに陥らないよう、戒めている。

著作権 芥川家の子は育ち

これは、固有名詞の使い手として知られる磯野いさむの作品で、次の句もある。

坑夫だった人に職あり城東区

杉村春子の気ままが通る文学座

大阪の地名・人名ばかりを集めたものとしては、藤沢桓夫・橘高薫風共著のカラーブックス『川柳にみる大阪』がある。

道頓堀の雨に別れて以来なり

田辺聖子の『中央公論』連載のタイトルにもなった岸本水府の句だが、その中からいくつかを紹介しよう。

思い出の橋ばかりなり水都祭

麻生 路郎

大阪に花の里あり通り抜け

本田溪花坊

逢う場所は少しキザだが紀伊国屋

三句目は、谷垣史好である。実は私も、数詞とともに固有名詞を詠み込むのが好きで、『なにわ川柳―私の百句』のうち、二十二句もある。統計的に処理しやすいので、この句集を挙げたが、つまり二二パーセントである。例によって我田引水々の私の句。

ネオンの灯わがふるさとは中央区

ヒロシマの時計が指している数字

モナリザの微笑は何の返事だろう

(一九九四年三月)

「課題」の扱い方

ここで、〃川柳作法〃めいたことを書くのは本意ではないが、最近、課題で作句したり出題する上で疑問に思うことがあって、何冊かの文献にあたってみたので、私自身の課題についての考え方を整理するために、諸家の説を引用しながらまとめてみた。

まず、課題の種類だが、『川柳総合事典』（雄山閣）によれば、「課題には単語題（名詞、動詞、形容詞など）のほか、一字題、字結び、印象題、折句題などがある」としている。後の三者は言わば特殊な課題であり、ある特定の字を文字の意味にかかわりなく、一句の中に取り入れればいいというのが字結び（じむすび）で、近江砂人は『川柳の作り方』の中で「芸術的価値が小さく、遊戯に近い」として否定しているが、折句（おりく）は、句会の余興として行われている。最後に印象題は、図形や絵、写真などを示し、そのイメージによって作句するもので、特定の句会で出題されている。

したがって、定例会や大会などで圧倒的に多いのは単語題と一字題で、単語題では具象・抽象を含む名詞が最も多く、動詞、形容詞、副詞も出題されている。一般に名詞がいちばん作りやすいこともあって、すべての課題を名詞にしている句会もあるが、やはり発想を広げる上から、その他の品詞も取り上げることが望ましい。また、一字題については、誤って字結びと同じように取り扱う作者・

選者があるのは、心したいものである。

次に作句にあたつて、課題をどのように扱うかということ、課題そのものや類義語を作品の中に詠み込むのが一般的だが、関東では課題を詠み込まず、暗示だけにとどめる表現がよいとされている。これはもともと、川柳が前句付から独立して生まれたという成立ちが色濃く残されたためだが、東西の交流が活発になった今日では、ニュアンスの差はあるとしても、関西風と関東風を対立的に考えなくてもいいようになりつつあると思う。

この「詠み込み」とは、文字どおり題そのものを詠み込むことである。これは関東の作家である尾藤三柳の所説でも明らかで、『川柳の基礎知識』の中で題詠の実際について触れ、「一般に物名などの名詞は詠み込み、抽象的な形容詞や副詞は詠み込まない方が妙味があります」とアドバイスしている。しかし、ここで留意したいのは、作句に柔軟性を持つことは必要であるとしても、三柳も述べるように、「課題作品が課題を離れるのは一種のルール違反」であり、岸本水府も『川柳読本』の中で、「題に忠実な事は詩人としての物の解釈に深い関係がある」として、課題からの遊離を戒めている。

そこで私たちは、ある課題で作句したり、選句したりする場合は、必ず辞典を引いてその言葉の正しい意味と用法を把握することが大切で、例えば「沸く」と「湧く」、「忍ぶ」と「偲ぶ」などの同音異義語には注意を払いたい。課題吟はどこまでも課題と不即不離であるべきで、一人歩きしてはならないと思う。

(一九九二年三月)

メルヘンを詠む

田口麦彦著『川柳技法入門』の中で比喩の技法の一つに「諷喩」(アレゴリー)を挙げて次のように解説している。「寓喩ともいいます。現代の複雑にからみ合った社会事象を伝達するために、他の事物や歴史上の事件、物語などにたとえて表現する方法です」。

この中の「物語」ということに私は注目した。物語の中には当然、童話・寓話も含まれる訳で、次の句が例示されている。

ダム出来て桃が流れてこない川

椎江 清芳

人脈の端で黍団子を貰う

池下まごし

二句とも偶然、日本童話のヒーローである桃太郎をなぞらえている。麦彦自身の句にも、弱い鬼ばかりみつくて鬼退治

があり、何冊かの句集から拾っただけでも、

幻想や桃の実 河をさかのぼる

寺尾 俊平

五十九歳 これから川へ洗濯に

小出 智子

など、次々と出てくる。

さて、日本の古典的童話(昔話)と言うと、この桃太郎を筆頭に浦島太郎・猿蟹合戦・一寸法

師・舌切雀・花咲爺・竹取物語・羽衣天女・夕鶴・檜山（棄老伝説）あたりがベスト10に入るのではないだろうか。ついでに外国の童話では、イソップ、グリムが有名だが、児童文学者の脇明子が子どもたちから「印象に残っているもの」としてアンケートをとったところ、マツチ売りの少女・人魚姫・シンデレラ・小公女・幸福の王子・フランダースの犬が多かったという。

戦後生れの世代の童話についての意識は、子や孫たちの生活から推し量るしかないが、彼らは彼らなりに絵本やアニメをとおしてメルヘンの世界を愛しているようである。しかし、それは耳から目から童話漬けで育った私たちの世代の比ではない。だからその世代がつくる川柳はとりたてて「諷諭」を意識せずとも、内外の童話にからむ表現がボンボンと出てくるのだと思う。アトラダムに諸家の作品を紹介しよう。

雪おんな死ぬ約束に梅が咲き

斎藤 大雄

上ばかり見てつかまらぬ青い鳥

三条東洋樹

草臥れて浦島太郎の夢を見る

小出 智子

パンドラの箱一つずつ持つ師走

野谷 竹路

狸にも誤算があつた泥の舟

小林由多香

ラブホテル竜宮よりも美しく

岩井 三窓

猿蟹の仲まとめたいペンを探る

山本 翠公

羽衣を脱いであなたの虜です

門谷たず子

例によってまとまらぬ一編となつたが、童話の効用を適確に説いた一文を引用してワサビに代えたい。「童話とは、子どもが一人立ちしていくためにたどる困難に満ちた心の旅を描いたものであり、童話ほど人間の内的な問題について教え、社会の形態とは関係なしに困難な立場から抜け出る解決法を示してくれるものはない」。実は私も大の童話ファンで、メルヘン川柳をたくさん作っており、その中から十句を自選してみた。

略奪のルーツたどれば桃太郎

今年こそ亀に負けたくない兎

実直な猿が植えてる柿の種

乙姫の未練を秘めた玉手箱

主義のない雀で踊ってばかりいる

夏の夜の夢で天女とたわむれる

笑話だと思ふ竹取物語

アラジンの国からやってきた刺客

一日はいちにち蟻とキリギリス

苦勞した話はしないシンデレラ

(一九九五年二月)

ユーモア句のすすめ

岸本末彦大阪教育大学名誉教授に「川柳の笑い」という論文がある。心理学者で古川柳研究家ではないが、『柳多留』を材料にして「笑いの条件発生的研究」を行っている。ここでは笑いをもたらす条件をパターンに分類し、それぞれに例句を示しているので、いくつかを紹介する。

道問へば一度に動く田植笠

おしまひとことわつて子は箸をおき

男の子はだかにするとつかまらず

通りぬけ無用で通りぬけが知れ

憎い嫁可愛い孫をやたら生み

百両をほどこけば人をしざらせる

ちぐはぐの顔は貰った栈敷なり

土用干し隣の嫁は美しき

川柳に関する論考を多く発表した北川春巢の『聴診器』に「ユーモア特集」がある。主として現代川柳を素材にしてユーモア句に検討を加えている。この中で注目されるのは、ユーモア

の要素の一つとして「比喩」を挙げていることで、次に例句を紹介したい。

〈直喩の句〉

来客へギョウザのように子は並び

西出 一栄

〈隱喩の句〉

眼鏡屋は鯛雲ほど並べたり

橘高 薫風

〈提喩の句〉

飲む話あっち向いてる間に決まり

北川 春巢

〈擬声の句〉

踏切はジンカジンカと夕焼ける

正本 水客

〈擬人法の句〉

仁王さんあぐらをかいてみとうなり

若本多久志

ところで最近、ユーモア句がとみに少なくなつたと言われる。亀山恭太は、『類題別番傘川柳一万句集』（昭和三十八年刊）には、どのページを開いてもユーモア句が多い。それと比較して二十年後に出された『統類題別番傘一万句集』では、その少なさに驚かされる。川柳界全体の傾向が「笑いの句」を抹殺する方向に進んできた」と述べている。

それでも句会で選者が入選句を読み上げ、呼名が続くと、どつと笑いが起こることがある。作者の個性がよく表現されていたり、巧みなフィクションであつたり、女性と見られる句が男性であるなどの意外性が笑いを誘うのである。口承文芸としての川柳、そして座の文芸としての句会の醍醐味を味わうことができるひとときである。ところが句報や柳誌をひもとくと、何の変哲もない句の羅列となつてしまうのはなぜなのだろうか。

そこで数少ないユーモア作家として知られる須崎豆秋句集『ふるさと』から私なりに八句を

挙げて参考に供したい。

骨たてたまま二次会へついて行き
手ぶらでは鹿も相手にしてくれず
けなげにも家主の犬を噛んで来た
速よいかな消えてしまふと火事見舞
病人へみんなたかつて嘘を言い

電話口花千代さんは舌を出し

日本人やたらにソースかけたがり

院長があかん言うてる独逸語で

ついでに、かつて川柳塔欄で異彩を放っていた土居耕花の作品から五句をひく。

好きな物言わせて医者皆禁じ

銀行へ入る真似してまた歩く

急カーブ美人の方へみな倒れ

オッサンと言うなよ今日はモーニング

宝塚見て来て足を振ってみる

(一九九五年九月)

色についての考察

天明の俳人、与謝蕪村は画家でもあっただけに、その句は色彩感に溢れているが、まず、現代俳句の中から、色そのものを詠み込んだ句をいくつか紹介しよう。

夢殿の赤に世の冬永さかな

青々

万緑の中や吾子の菌生え初める

草田男

藍壺にきれを失ふ寒さかな

丈草

寒雷やいよいよ黒き火消壺

器

雷さまが来るきつと来る白牡丹

杏子

かがまると茶色の蜥蜴走り去る

一透

金の芒遥かなる母の袴りをり

波郷

きさらぎや鬼女の袴の銀鱗

蓼汀

白状すると、これは私が集めたものではなく、一昨年初、朝日新聞の「天声人語」に収録されていたものを借用した。

ところで、色は一体どれくらいあるかと言うと、私が愛用する『日本語大辞典―カラー版』

の色名辞典では三五〇色だが、世には五〇〇色えんぴつというものもあって、まず無限と云っている。『日本語をみがく小辞典』（講談社）によれば、古代日本語には色そのものを指すことばはなく、明暗濃淡をあらわす「明かし・暗し・顕（しる）し・漠（あお）し」が転訛した「赤・黒・白・青」の四語でスタートした。三原色の「黄」がないが、その語原は分からないとされている。

もともと色名がなかったから、色をあらわすのに、茶色・桃色・橙色・灰色などと物の名を借りた。つまり色の名は、自然の中から生れたわけで、草木染の微妙な色合いにそれぞれ名をつければ、たちどころに数百種の色名ができた。薔薇色の頬、小麦色の肌、狐色に焼く……など、素晴らしいではないか。前述の五〇〇色えんぴつも、「天女の羽衣」「ニッポニア・ニッポン」「せせらぎのカワセミ」など、ユニークな色名を創造している。

中国では古来、四季・方角も色分けしており、四季は青春・朱夏・白秋・玄冬、方角は青龍（東）・朱雀（南）・白虎（西）・玄武（北）としているが、何となくイメージがぴたりしている。そこで色彩が持つイメージについてみると、白⇨平和・純潔、赤⇨勇氣・情熱、青⇨自由・誠実、緑⇨繁栄・希望、黄⇨充実・肥沃となり、それぞれ雪・太陽・海・森・土をあらわし、一般に赤は慶事、黒は弔事に用いられるというのは、『色の博物誌』（朝日新聞社）から学んだ。

ついでに世界の色彩感覚について言えば、国民の好きな色の順位は、日本は白・青・緑・赤・黄、アメリカは赤・青・白・緑・黄、フランスは青・緑・白・赤・黄、イタリアは緑・白・青・黄・赤、トルコは白・緑・青・赤・黄と、微妙な違いがみられる。なお、国連旗は御承知のように青地に白である。

どうやら色談義で紙数が尽きたが、川柳では、青い鳥・赤い爪・白い杖など、結構、色が多用される。私が所属するもくせい川柳会では、昨年の課題の一つに色名を入れたので、その中の秀句と思われるものを紹介して結びとしたい。例によって作者名は省略する。

朱 唇に朱の色残る伎芸天

白 寒行の僧一列に白い息

青 自画像のバックは青く青く塗る

黄 人はみな孤独を抱いてゴッホの黄

紺 指先を染めそう茄子の漬かり頃

赤 紀行文 赤い夕陽でしめくくる

黒 還暦へこころ貧しく黒人霊歌

緑 白秋忌 銀杏の実は緑なり

映画・演劇と川柳

「俳句は絵画、川柳は音楽」と言った人がいる。俳句は絵画——は納得できる。それも、油彩画ではなく、水彩画である。しかし、音楽はむしろ短歌こそが似つかわしい。川柳はやはりドラマ——映画・演劇ではないかと思う。

頬かむりの中に日本一の顔

虫売のうしろ姿は菊五郎

歌舞伎座の余熱を抱いて通る町

こよなく道頓堀を愛したご存知、岸本水府の句である。彼の盟友であつた劇作家の食満南北にも、芝居を詠んだ句が多い。

写楽にも一度見せたい鴈治郎

紙屋うち おさんの寝言聞きとがめ

腰元のどれがどれやら塗っている

戦前にはこのほか、演劇にちなむ川柳が多く、集めれば一巻を編めるだろう。しかし、現在

は非常に少ない。世の移りというものだろう。そして、これに代わるものが映画である。今から九年前に行われた西尾葉喜寿金婚記念川柳大会における磯野いさむ選「太陽」で、「太陽がいつばい男同士のだるい午後」が天の句に選ばれた。正に映画の一シーンを切り取ったような佳句である。この句に逢うて以来、映画にかかわる句に注目してきた。

しかし正直なところ、その数はかつての歌舞伎ほど多くはないし、詠む人も限られているように思う。何よりも映画を愛する私としては残念である。まず、中尾藻介には多く、特にマリリン・モンローに御執心のようなのである。

モンロー忌聖なるものは遠くなる

ゲーブルの顔が汚い原始林

夏まつり一人の無法松がはず

橘高薫風にも、すこしある。

モンロー忌黒子の位置の恐るべし

映画ほど静かではない恋終る

岩井三窓は、それに比べると多い。

チャップリンの墓を暴いた奴がいる

キートンもロイドも逃げたひたすらに

アナベラという女優あり青春記

芦田伸介アリバイが崩れたぞ

何と言っても圧倒的に多いのは関水華で、句集『終りなき旅』に“映画抄”という一章を設けている。その中から十句――

飴いかが子育てごっこ鞭いかが

喀血や野麦峠のホトトギス

天国と地獄の四季の八甲田

影武者の髭つけかえて反主流

苔の墓 輪廻音なし 野菊咲く

少年の盃浮かべ泥の河

さだめとはばらに刺あるベルサイユ

不可解はみな神とするブッシュマン

E・Tと握手をしたい道祖神

鳥葬が日本にもある 檜山さ

さてどんじりに、例によって例のごとく、私の『映画集』十句。

公園に志村喬はもう居ない

笠智衆うなずくだけで芸になり

モノクロの映画に若き原節子

寅さんの港にいつもいるさくら

糸紡ぐ娘の悲話がある峠

しみじみと小津安二郎見る文化

ボワイエが夜霧に消えて行くシーン

帽子から雫したたるジャン・ギャバン

女神逝くああ青春のヘップバーン

ヒーローになった気が出る映画館

(一九九四年四月)

レクイエム——忌日の句

エッセイストで「俳人」でもある江國滋（滋酔郎）は『慶弔俳句目録』という著作の中で「慶事凶事に贈る挨拶の俳句、一句独立、不即不離をもつてよしとする」と慶弔俳句を定義づけ、例句として一昨年十一月、七十歳で死去したイブ・モンタンを追悼する自作――

おほいなる枯葉は土にかへりけり
を挙げている。

この追悼句に隣接するものに「忌日の句」があり、どの歳時記にも古今の俳人・文人の忌日と例句が掲載されている。まず、その中から私の目に触れたものを紹介しよう。

ばら色のままに富士凍て草城忌

西東 三鬼

山椿さはに見たりき利休の忌

森 澄雄

支那街に揺るる焼肉 西東忌

秋元不死男

啄木忌いくたび職を替へてもや

安住 敦

禁客寺 鯉蒼々と百閒忌

村山 古郷

季吟忌や六十巻の湖月鈔

青木 月斗

藤村忌 鳴立庵も見て来たれ

石田 波郷

硝子戸の中の句会や漱石忌

滝井 孝作

それなら川柳ではどうか。尾藤三柳は『川柳作句教室』の中で、〃慶弔吟の考え方〃に一章を割き、弔意吟は、その詠時によって、哀悼句・追悼句・献句の三つがあるとしている。この「献句」が滋醉郎の言う「忌日の句」にあたり、ここに俳句と川柳との〃接点〃を見ることが出来る。次に著名な川柳人の「忌日の句」を例示する。

久良伎忌の吉原は斯くほろびけり

大山 竹二

青い葉は花よりすがし晶子の忌

橘高 薫風

桜桃忌ころにも水溢れくる

寺尾 俊平

路郎忌や美濃の大八 備後の亜鈍

西尾 栞

泣き虫は直らぬ病氣 啄木忌

中尾 藻介

蟬しぐれ水府忌の人みなしずか

磯野いさむ

鏡花忌へ一句供えた女形

岸本 水府

先に「接点」と言ったが、「相違点」もかいま見ることが出来るかも知れない。さて、冒頭に紹介した滋こと滋酔郎は、俳人にしておくのは惜しいほど、川柳的な俳句をつくる御仁だが、何しろ時事吟的な慶弔吟とそのコメントだけで一冊を編んだ人だけに、「得意不得意」ということでいわせていただくなら私は忌日の句が得意なのである」とシャーシャーとのたもうている。何をかくそう、この私もここ数年以来、レクイエムをつくり続けている。私の場合は、得意と言うよりも好きなのである。歳時記をパラパラと繰ってその月に忌日がある俳人・柳人・歌人・文士や知名人の作品や業績を思い浮かべると、スツと一句ができる。

いずれにしても、忌日の句は俳句・川柳の「本流」になることはできないが、もう少しその存在が認められてもいいのではなからうか。かつて挽歌が日本の詩歌において、その位置を占めたように。あえて我田引水とはことわらずに、拙作を各月一句ずつ示してお目を汚すこととしたい（下の数字は忌日）。

歩兵われ黙々と行く葦平忌	1・24
一寸の虫たらんとす多喜二の忌	2・20

淀川の水ぬるみたり月斗の忌	3	・	17
石をもてわれも追われき啄木忌	4	・	13
問答は無用にあらず木堂忌	5	・	15
なつかしや少年倶楽部 紅緑忌	6	・	3
一門の末座にわれも不死鳥忌	7	・	7
絵草紙の恋みな悲し西鶴忌	8	・	10
反戦の誓いあらたに彬の忌	9	・	14
ルビつきの全集があり直哉の忌	10	・	21
花一つえらばば椿 波郷の忌	11	・	21
文豪という語がありき漱石忌	12	・	9

フルネームもしくは本名でないと分からぬ人もあると思うので、念のために書き添えておく。
 葦平は「火野葦平」、月斗は「青木月斗」、木堂は「犬養毅」、紅緑は「佐藤紅緑」、不死鳥忌
 は「麻生路郎の忌」、彬は「鶴彬」、直哉は「志賀直哉」、波郷は「石田波郷」である。

(一九九三年七月)

続

ペンシル

長い不況タクシーの長い列

善人と思うが力ない男

しんどいと時々まびく予定表

あの頃はピカピカ光っていたごはん

続編は誰も読まない私小説

隣にはミサイルがあり米がない

喜寿の父 余命余命と言いつぎる

俗物の凶鑑にボクの顔がある

一生に二度は変えない旗の色

人生にシナリオはなし万華鏡

脇役でおわった父のベレー帽

今日もまた鏡に姿勢正される

紅灯にもう用はなし古帽子

同病がうなずいている立ち話

みどりの日昭和は遠くなりけり

走ったらあかんと妻に叱られる

還暦を若いと思う歳となり

美人だが注射はうまくないナース

おおよそは知っているから黙つとく

星占い　おとめ座というおじいちゃん

見たいとこ素通りをするバスツアー

図書館で借りた本ならすぐ読める

朝の月 蟬三千が鳴くいのち

迷ったら私を捨てることにする

地球には人が住めなくなる　やがて

亡き父がしきりに恋し桐の花

碧い瞳の美女に座席を譲られる

君が代を戦後歌ったことがない

軍服のはらから集う白昼夢

爪立ってみてもたかだか二三寸

懐かしや路面電車が走る街

見せ場ない父のドラマの幕下りる

僕になら電気のことは聞かないで

出会いからいの友だちになる予感

丘の上幸せそうな窓がある

蜜柑むき姉妹の話まだ続く

二〇〇〇年「十年日記」十年目

ボクよりも悪筆がある年賀状

ずるい子は一人もない夜学の灯

寝る前に無事の日ありがとう

義理チョコの第一号はおじいちゃん

自分史のところどころに火の匂い

パレードの足が短い日本人

新聞に包み焼き芋サマになり

新兵の涙を知っている毛布

忙と閑その中ほどがむずかしい

若葉マークが送って行つてやると言う

おとなしい動物だから角がある

国も府も市も老人に冷たいぞ

三分は長いと思う砂時計

パン粉練る幸せそうな妻の顔

ボランティア真っ先に来た茶髪の子

パスポート五年にしとく喜寿の坂

旅行社のパンフが僕をそそのかす

人間の都合で害虫決めている

肝心なところから腐る僕の国

何代も無能の總理持っている

無事の日が続いて少し身構える

浜辺なぜコンクリートにしてしまう

子どもとの約束破ったらあかん

人生のボーナス僕の余命表

差し引きをすれば妻には借りがある

加害者と思っていないスモーカー

低金利誰か得する奴がいる

願うことないが泉にコイン投げ
(欧州の旅)

見る人も首をかしげている斜塔

八勝でいいさ相撲も人生も

ハーモニカ口笛吹けぬ義齒哀し

鶴彬の直筆に逢う戦争展

火をつけた男を知っているポンプ

まだ誇りあるから靴を光らせる

じいちゃんがフリースを着る世の流れ

「十年日記」二冊目を書く新世紀

もう十年生きるつもりの日記帳

今年限り断わり書きがある賀状

老い二人寄り添うように福寿草

天女なら炊事洗濯してくれぬ

後輩に文化勲章 菜の花忌

私のいる場所が地球の真ん中や

パソコンに挑もう 痩せた腕撫でる

冷や飯になつたら分かる米の味

辞典にもミスがあるぞと負けてない

鉢植えになどしてほしくない野草

同行二人 人生の長い午後

影法師お前も泣いていたんだね

無理しているな自分でもそう思う

雨のパレード戦場へ続いていた

ぶらぶらとしてても爪がよく伸びる

父に似た羅漢にそつとワンカップ

隙狙うように仕事が埋めにくる

今生きているのが不思議 戦中派

からつぽの白木の箱で兄還る
(兄戦死)

靖国にいないと思う兄の霊

戦没の兄の遺族は僕一人

戦死した兄の分まで生きている

善人が多くて事が運ばない

タイミングずれて笑えぬ父のギャグ

熟慮とは時期をずらしただけのこと

生きるため私も踏んだ聖母像

日の丸を見せよと迫る星条旗

テロを見て高層ビルが怖くなる

辛口の批評エンピツ尖らせる

来客もうどんをすする社長室

薬よりよく効く父の卵酒

戦争を知らぬ男が勇ましい

空爆のニュースを消して虫を聞く

赤紙が来た日を今も夢に見る

情報の名で目隠しをされている

百年の歴史の中に僕もいる（大毎社会部百周年）

梅日和　我が晩節を汚すまじ

墓前での約束だから破れない

エプロンが似合うエプロンの妻が好き

味噌汁の熱さは妻の愛だろう

妻なりの一年の計　味噌仕込む

わたくしが私に出す努力賞

一隅を照らして生きた父のペン

タンポポの綿毛も僕も旅が好き

一合半規則正しく飲んでいる

人間以上人間以下でなく生きる

諦めと達観老いの守り札

傘寿から老いをはじめることにする

補助線をひくと難問すぐ解ける

苦しかった仕事を今も夢に見る

英雄も凡夫も焼けば灰になる

約束はきっちり守る古時計

イヤリングした男には驚かぬ

伸びすぎて思案している豆の蔓

湯の中でいたわってやる土ふまず

錯覚はお互いさまよ夫婦箸

名案を骨抜きにする会議室

年寄りとは年寄りなりの役どころ

善人が啖呵を切れば恐ろしい

バランスを崩さぬように生きている

おいしいと黙って食べるお父さん

雑兵で終る一生それもよし

省略したら私が消えていた

ひつじ年羊の国を訪れる
(羊の国紀行)

ニュージールランド人より羊多い国

ラムのよう みんな優しい人ばかり

何事もアバウトでよし老いの坂

正論を通すと軋む音がする

急がずに雨だれでよしキーボード

五寸釘女を騙したら恐い

真実を言っではならぬ時がある

美しい花真つ先に手折られる

旧友が次々と逝く去年今年

一筋の道つらぬいて逝った人

禁煙五年みんな忘れた煙草の名

夫婦相和して老人医療証

二人とも惚けてしまえばどうしよう

古時計できない事と出来ること

自慢ではないが普通の子に育ち

迎春花　故宮の空は晴れわたり
(北京再訪)

侵略の古傷うずく記念館

輪タクで胡同めぐり春うらら

私を捨てると見えるものがある

直線で裁ちふくらみが出る和服

ながながと世話になつてゐる広辞苑

二列目に私の指定席がある

四番がきつと打つとは限らない

不景気で株価が上がる　なんでやねん

ピンピンと生きてコロリと死ぬ命

空港ができて故郷遠くなり

あれがテストと済んでから気づく

何事も等身大と決めている

懐かしや田中絹代と逢うテレビ

予定表やりたい事が多すぎる

この歳になっても仕事頼まれる

鶴彬慕いて集う碑前祭

句碑眺め先祖の墓に会う思い

敗者には雨も激しく降りそそぐ

句読点きつちりと打つ遺言書

新年や今年は何をしようかな

この歳になって分からぬ事ばかり

未来より過去が重たくのしかかる

光らない子だけみんな私の子

赤紙のように病院から通知
(病床断章)

命令だと思ふ看護師の指図

復員の日をふと思ふ退院日

大義なき戦に民の血が流れ

日の丸を血に染めた過去忘れたか

イラク派兵血涙流す鶴彬

神様のような顔したホームレス

DNA兄弟みんな酒が好き

老いたればそつと戦列から抜ける

見つめると少しも進まない時計

分からぬという結論もあつてよし

ありがとうみなありがとうありがとう

短くてよいと祝辞をほめられる

生きているからやってくる誕生日

忘れたらあかんあかんとまた忘れ

蝉だけが夏の終わりを知っていた

お月さま綺麗と妻が呼びに来る

守る武器いつかは攻める武器となる

ユニークな役者つぎつぎ消えて行く

お互いに満点でない凡夫婦

えらい人と言われ棚上げされている

父老いて優しくなってきた娘

人の顔みんな違ってみんなよし

焦ったらあかんぼちぼちやるとする

蠟梅が咲きめぐりくる震災忌

爽やかな医師の笑顔に救われる

今にして思う老いとは病いとは

何事もない日幸せかも知れぬ

閑人閑話

新しい中国詩——漢俳

「漢詩の漢に俳句の俳、二つあわせて『漢俳』。いま、中国でさかんにこの漢俳がつくられている」と、『毎日新聞』が中国の雑誌『人民中国』に掲載された趙華氏の文章を引用して「漢俳」を紹介している。また、『朝日新聞』でも昨年十一月、中国人民対外友好協会上海市分会理事の朱実（瞿麦）氏が「中日友好と俳句交流」と題して寄稿、「漢俳」についてふれている。

ここ数年来、俳句と漢俳との交流がさかとなり、日本俳人協会訪中団、俳文学会訪中団などが中国を訪れ、俳人協会の招きで漢俳作家の林林氏らが来日している。中国における俳句の研究はかなりすすんでおり、昨年七月、彭恩華著『日本俳句史』が出版され、芭蕉・蕪村・一茶から子規・碧梧桐・虚子にいたる作品を紹介し、付録に「古今俳句佳作一千首」を原文対照で掲げている。

短歌・俳句の中国語訳の歴史はさらに古く、魯迅は厨川白村の「苦悶の象徴」を翻訳しているが、その中で引用された与謝野晶子の短歌と芭蕉・子規の俳句を訳している。

単音節語である中国語は、一字一音が一つの意味を持つが、多音節語の日本語では、一字一音がかならずしも意味を持たず、二音以上で一語となっている。したがって一字の意味の内包

量はずいぶん異なり、芭蕉の「びいと啼く尻声悲し夜の鹿」は「鹿鳴夜裏尾声悲」、「閑かさや岩にしみいる蟬の声」も「静寂蟬声入岩石」と七字でおさまってしまふ。

これでおよその詩意はつたえることはできるが、俳句の持つ味わいは表現できない。そこで戦前、早稲田大学に留学し、俳句を勉強した林林氏が始めたのが、俳句の芸術性と精神構造に目を向けるだけでなく、五・七・五の定形で、しかも漢詩としての脚韻をふむ中国式俳句、つまり漢俳である。その習作が中国の『詩刊』誌や『人民日報』紙上に発表されるや、「中国の文学界に新しく生まれた一輪の美花」として大きな反響をまねいた。『詩刊』には、林林氏の「京都平安神宮」と題する「花色満天春 但願剪得一片雲 裁作錦衣裙」など五句が掲載されている。この句、しいて意識すれば、「春の雲採りて衣をつくらんか」とでもなろうか。

漢詩は、古くは『詩経』から唐の李白・杜甫に代表される中国文学の女王として、知識人に親しまれてきた。五言絶句・七言絶句のように、二十字・二十八字の短詩型もあり、日本でも七世紀の中ごろから明治時代まで、多くの人によって盛んにつくられてきた。今日では、中国でも日本でも、鑑賞されても創作する人は少なくなつたが、貴重な伝統文芸であることには変わりはない。それがたまたま日本の伝統的な短詩型文芸の一つである俳句に刺激され、「漢俳」という新しいジャンルの詩となつてよみがえつたと言ふことができるだろう。

もともと漢詩には、自然の風景を詠んだものもあるが、その多くは人間の心や人生・社会を

うたったものがよく知られており、ある意味では“人間詩”と見ることができるところが、現状では俳句と同じく俳諧をその源流とする川柳には、中国文学界の目は向けられていない。もしこれが中国に紹介されることとなれば、自由な発想を持ち、しかも庶民的な川柳は、漢俳を愛好する人たちによって、正しい理解と認識を得られるに違いないと思うのである。

(一九八四年四月)

古い中国詩—漢詩

新しい中国詩—漢俳を先に紹介したので、今回は古い中国詩—漢詩についてふれてみたいと思う。と言うのは、漢詩は古今の日本文学に大きな影響をおよぼしただけでなく、わが国固有の定形詩とされる短歌・俳句・川柳も、文化史的には漢詩を源流としていると考えられるからである。

また、漢詩そのものも古くから日本人に親しまれ、奈良時代にはわが国最初の漢詩集である『懐風藻』が編まれている。それから平安・鎌倉・江戸時代を経て明治・大正にうけつがれ、鷗外・漱石・子規もすぐれた漢詩をつくり、大正天皇も多くの作品を残している。

最近では、田中角栄が首相在職中、国交回復のために訪中した時、“漢詩”をつくって話題

になった。

国交途絶幾星霜 修交再開秋將到

隣人眼温吾人迎 北京空晴秋氣深

しかし、これは漢詩ふうには漢字を並べただけのもので、彼自身の無教養をさらけだしたばかりでなく、現代の日本人に漢詩についての知識が失われてしまったことをも示している。

漢詩とは、中国語の発音にもとづいて、きまった規則にしたがって漢字をつづつたもので、五言とか七言とか字数だけを合わせればいいと言うものではない。押韻（おういん）、平仄（ひようそく）をふまえることが絶対条件で、この小文ではとても書きつくせないので、興味のある方は新田大作著『漢詩の作り方』（明治書院）などの解説書を読むことをおすすめする。

したがって厳密に言えば、その規則をマスターしなければ、漢詩を作ることはもとより、漢詩を正しく理解し、鑑賞することもできないわけだが、日中文化交流二千年の歴史から、漢字・漢語が日本語の中にとけこんでいるし、古代中国語である漢文を読解するために、私たちの先人は「返り点」「送り仮名」という便利なものを発明している。

これらをフルに活用し、漢和辞典を座右におけば、たいていの漢詩を読みこなすことができるし、多くのすぐれた訳詩もあり、李白・杜甫をはじめすばらしい詩人を輩出した漢詩の黄金時代に編まれた『唐詩選』など、世界的にも貴重で豊富な詩の宝庫の扉を開くことができるだ

ろう。

すぐれた訳詩と言うと、佐藤春夫の支那歷朝名媛詩鈔『車塵集』がある。

勸君莫惜金縷衣 勸君須少年時

花開堪折直須折 莫待無花折枝

これは、その巻頭に掲げられた詩だが、彼はそれを次のように訳している。

綾にしき何をか惜しむ

惜しめただ君若き日を

いざや折れ花よかりせば

ためらはば折りて花なし

全くうなりたくなるような名訳ではないか。ついでに九月、川柳塔社の有志が訪れることになった。蘇州の風光を詠んだ張継の「楓橋夜泊」を紹介しておこう。

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

有名な詩だからあえて訳出するまでもないと思う。手ごろな漢詩の本としては、岩波新書に吉川幸次郎・三好達治編『新唐詩選』『新唐詩選続編』がある。

(一九八四年十月)

季語と句語

俳句は、一般的には「季語」を欠かせないが、川柳にもよく使われる特定の言葉があることに気づいたのは、川柳を作りはじめて間もないころであった。それから句集などを読む時、目についた言葉を書きとめ、私なりにこれを「句語」と名づけた。

ところが、この句語という言葉は、どの辞書にも載っていない。つまり、言葉としての市民権を得ていないのである。さすがに尾藤三柳編『川柳総合辞典』には、「作句用語、一句を構成する語句。また、川柳独特の用語化された語句、もしくは常語に対する詩語の意味にも用いられる」と解説されている。一方、さまざまな川柳入門書には、全くとっていいほど、句語については書かれておらず、たまたま触れられていても、否定的に取り扱われている。

たとえば、塩満敏編『川柳資料室』には、「人真似でなく、自分の言葉で！素材や用語やスタイルの流行に目をうばわれていませんか」として、
鬼・一匹・不発弾・罪・喜劇・仮面・砂漠・矢・白旗・負け犬・雑魚・余白・鎖・演技・切符・積木・地図・独楽・切り札の十九語を例示している。

谷垣史好によると、さらに手きびしい。『川柳塔』の編集後記に、一時、句会でよく使われ

た「父の墓」に関連して、「手垢に汚れた言葉、使い古された言葉」として「鬼・善人・やじるべえ・ライバル」をあげ、「フリカケというのがあるやろ。あれと一緒に思うねん。めしにフリカケをかけるように、課題にこういう言葉、パラッとかけると、あんまり苦勞もいらん。味も結構イケる。まア使いたくなる、いうこっちゃ」と、まさにコテンパンである。

では実際に、どのような言葉が多用されているだろうか。試しに同人句集『川柳塔』の昭和四十九年版と同五十九年版の二冊に収められた約一万句にあたってみた。ベスト3は、十句以上の「平和・日記・ドラマ」、つづいて「鬼・ひとり言・ひとり旅・ライバル・四面楚歌・自画像・野仏」が多い。三句以上は「積木・謀反・薄化粧・石仏・五百羅漢・ロマン・ロボット・サン格拉斯・ペダル・シャボン玉・水中花・砂時計・三面鏡・流れ星・影法師・掟・曼珠沙華・やじるべえ・四捨五入」と並んでいる。

いちいち例句はあげないが、これらの言葉が一句の中で決定的な役割をはたしているケースが多い。これだけ多く使われ、しかも存在感を持った言葉を、頭から常套語・慣用語として白眼視していいのだろうか。そこで次に、俳句における「季語」について考えてみたい。

季語とは『広辞苑』によれば「連歌・俳諧・俳句によみこまれて、その句の季節を示すための、特に規定された語」とある。芭蕉のころの季語は限られた数であったが、江戸時代末期に急速にふえて約五千語になり、現代ではその二倍とも三倍とも言われている。これらの季語を

編んだのが俳句の歳時記で、『山本健吉 基本季語五〇〇選』は、季語を精選しているが、類語も示しているので、やはり数千語になるとみられる。

この季語については、古くから論議されてきており、楠本憲吉著『俳句入門』では、とくに「俳句と季語」の一節を設け、有季・無季双方の説を引用しながら季語についての考え方を示している。すなわち、正岡子規は、季語の持つ聯感（連想力）を強調し、これによって短い詩の世界が広い外界を獲得するのだと説き、日野草城は、季語以外にも象徴性・連想性に富み、季語同様の重さと質量を備えた言葉は無数にあるとしている。

要するに、「季語」本来の役割は季節感ではなく、その言葉がかもしれない質量感であり、長い俳句の歴史の中で季語の持つ普遍性・日常性・具象性・定着性が重んじられ、他の言葉以上の質量感がそこから引き出されたものとも言えよう、というのである。

しかも、季語は固定的なものではなく、量的・質的にうつりかわってきており、芭蕉も「新しき季の詞の一つも見出すは後世へのよき冥加」と言っており、山本健吉は近代の好例として、
「春一番・万緑・夜の秋」をあげている。このほか、近代の俳人は、漢語・和語・雅語・俗語や外来語・流行語を、季語またはそれに変わるものとして、それぞれの語感を生かして使ってきており、山口誓子は万葉語、日野草城は漢語、川端茅舎は仏典語を導入している。

俳句が有季・無季を問わず、質・量ともに豊かで多彩な言葉に支えられたことが無限の表現

力を生み、今日の隆盛につながったと見る事ができよう。

さて、こゝらで「我が田に水を引く」ことになるが、今までいろいろと述べてきた季語の定義ないし役割を、私の言うところの「句語」にあてはめることはできないだろうか。川柳は、俳句から多くのことを学んできたわけだが、俳句における季語の位置に着目するならば、句語を敬遠するのではなく、季語と同様の象徴性・連想性・普遍性・伝達性にすすんで光をあてるとともに、新しい句語の創造と導入につとめるべきだと思うのである。

もとより、そういう試みが今までに全くなかったわけではない。『類題別番傘川柳一万句集』『統類題別番傘川柳一万句集』、あるいは奥田白虎編『川柳歳事記』、北原晴夫著『川柳博物誌』などは、貴重な労作として評価できよう。

おわりに、句語についてのべてきた以上、私が「句語」としての性格を持つと思う言葉を例示する責任があるので、あえて一〇〇語を選んでみた。

『句語』の例

〔自分〕 自分史 自画像 自叙伝 ひとり言 ひとり旅 私語 私小説
〔男〕 男坂 ベレー帽 ループタイ 善人 雑兵 紳士録 コップ酒 縄のれん 回り椅子

無位無官

〔女〕 女紋 女文字 マリア コンパクト イヤリング ペンダント ネックレス レオタ

ード 水鏡 三面鏡 市場箆 フライパン 薄化粧 厚化粧 悪女

〔父母〕 父の靴 父の墓 母の海 母の背

〔夫婦〕 夫婦箸 夫婦坂 夫婦橋 夫婦茶碗 夫婦独楽 共白髪 真珠婚 不倫

〔対人〕 ライバル 棒グラフ 糸電話 無口 無言劇 黙秘権 失語症 縄電車 ありがとう

〔擬人〕 鬼 ピエロ ロボット シルエット 影法師 指人形 仮面 やじろべえ

〔人生〕 ドラマ コント 喜劇 アルバム 古日記 旅日記 ロマン パレット 走馬灯

万華鏡 楮山

〔仏〕 野仏 地藏 羅漢 修羅 菩薩

〔花〕 花時計 花言葉 花あかり 水中花 かすみ草 曼珠沙華 沈丁花 落椿

〔気象〕 うろこ雲 茜雲 流れ雲 昼の月

〔童話〕 柿の種 玉手箱 黍団子 握りめし シンデレラ

〔成語〕 一期一会 四面楚歌 ペダル踏む 四捨五入 会者定離 ことば選る

(一九八七年九月)

私の川柳修行

朝日新聞の大阪版に川柳塔社理事長橋高薫風、番傘川柳本社副幹事長片岡つとむ両氏の交互選による「朝日なにわ柳壇」欄がある。週一回掲載の課題吟で、他の全国紙地方版や地方紙にも同種の欄があるが、さすが二大柳社のベテランが選者をつとめているだけに、その水準は群を抜いて高いとされている。

この柳壇が設けられたのは昭和五十五年六月で、間もなく十二年目を迎えるが、私が投句を始めたのは同五十七年からで、初期のころの感想を、同柳壇のPRを兼ねて「川柳塔」誌の同六十年八月号に「私の川柳道場」としてまとめたことがある。

川柳作家の多くは、新聞川柳への投句からスタートしたと言われているが、私の場合もなにわ柳壇への投句が川柳に首をつっこみ端緒となったわけで、その最初の句――

笑つても目は笑わないガードマン

が昭和五十七年十一月一日号掲載の片岡つとむ選「警戒」の一席に選ばれた。

まぐれあたりもいいところだが、これが病みつきとなつて、それ以来せっせと投句を続け、毎週の発表を見ては一喜一憂する羽目となつた。その中でいつしか私は百句入選を目ざすよう

になったが、今年の二月二十二日号でようやく目標を達成することができた。すでに百句を突破した方は、数人いや十数人はおられるであろうし、九年余もかかったのは決して誇るに足ることではないと思う。

さて私にとつての川柳は、文字どおり六十の手習いで、多くは望めないとしても、やはり始めたからには少しでも上達したいと願うのは人情の常であり、それには何か物指しになるものがほしいと思った。そこで思いついたのが、なにわ柳壇における年間入選句数で、ひそかに記録をとってみた。

最初の年は十一月から始めたので二句、年間フルに投句した二年目は七句、それから八・九と毎年一句ずつ増えて五年目には十句となった。他の人と比較する相対評価は採らないので、絶対評価の観点からすれば遅々たりと言えども進歩は進歩であり、六年目には十二句、七年目は十四句とテンポが速くなり、八年目は十八句と自己最高を記録した。

この間、選者のコメント（評）がつく天・地・人にあたる上位句も次第に増え、

夢のない年金で買うジャンボくじ

告白のできぬ戦記を抱いて老い

モナリザの微笑は何の返事だろう

虚飾には遠く神父の黒い服

イヤリング微かに揺れる無言劇

が一席となり、「告白のできぬ戦記を抱いて老い」は、橋高薫風選の昭和六十一年度最優秀句に選ばれた。

しかし、この辺りで気がゆるんだのかスランプの谷間に落ち込み、九年目はガタンと七句に急落し、十年目はようやく十二句に復調したものの九十九句でストップ、二か月のブランクを経て百句目――

定年後 自分で決めているノルマ

が片岡つとむ選「ノルマ」でようやく陽の目を見た。ちなみに、入選百句の内訳はつとむ選五十一句、薫風選四十九句であった。

この文章のタイトルを「私の川柳修行」としたが、進歩と上達のと諦は一にも二にも継続であり、自ら目標を決めて努力する以外にないことを肝に銘じた体験であった。そして今回の百句達成は、その修行過程における一つの記念碑でもあると思うので、両選者の序文を得て『なにわ川柳―私の百句』を刊行することとした。

(一九九二年五月)

神風特攻隊の絶唱

金子兜太の『わが戦後俳句史』の中に、

朝はじまる海へ突込む鷗の死

という句がある。俳句専念を決意した朝の眼前の風景に、珊瑚海で死んだ零戦搭乗員のイメージを重ねたものと自解している。

ところで、私は最近、第二次大戦の末期、爆弾を積んだ飛行機もろともアメリカ軍の艦艇に体あたりするために編制された神風特別攻撃隊員が出撃直前、多くの川柳を詠んでいたことを知った。

これは、戦歿海軍飛行予備学生の手記『雲ながるる果てに』に収められたもので、四名が百句を残しており、若くして散華した青年の心情が「川柳」という形で赤裸々に表現されている。彼らは昭和十八年九月、学業半ばにして海軍予備学生として航空隊に入隊して訓練を受けた後、同二十年三月、神風特攻隊に編入され、鹿児島県の国分基地に集結している。

川柳は予備士官宿舎で、あるいは待機中の指揮所で、さらに出撃命令が下ってから作ったもので、

生きるのは良いものと気が付く三日前

まだ生きているかと友が訪れる

後三日酔うて泣く者笑ふ者

と、拙いながらも真情を吐露しているが、中でも「生きるのは良いもの」という言葉が切々として胸を打つ。

特攻機は雨が降ると飛び立てず、出撃が日延べになる。生死に直接つながるだけに、天候への関心が強い。

雨降って今日一日を生きのびる

宿の窓今日は静かに雨がふり

明日の空案じて夜の窓を閉め

四名ともに二十三歳。平和な時代であれば春秋に富むわかものたちが、雨が降ればホッと一息つき、酒を酌みかわす春がせつない。

戦時下といっても、学園生活にはわずかな自由が残っていた。それをなげうって予備学生を志願したのだが、やはり青春への思いは絶ちがたいものがあつたに違いない。

アメリカと戦ふ奴がジャズが好き

ジャズ恋し早く平和がくればよい

出撃待機中の宿舎では、まだ学生気分が抜け切れない彼らだけに、いろいろと議論に花か咲く。

痛からういや痛くないと議論なり

幽霊はあるぞないぞと議論なり

明日の晩化けて出るぞと友脅し

まことにたわいない議論もあるが、敗色日に濃い戦局に思いをさせ、期せずして本音ももれる。

勝敗はわれらの知ったこととなし

必勝論必敗論と手を握り

当時のマスコミが鉦や太鼓で特攻隊をおだて上げることに、彼らの目はクールだ。

特攻へ新聞記者の美辞麗句

神様が野糞たれたり手鼻かみ

特攻のまずい辞世を記者はほめ

そうしているうちにも、友は次々と飛び立って行く。

還らぬと知りつつも待つ夕べかな

友を待つ空にまばらな星のかず

今日もまた全機還らず月が冴え

そして、出撃の日は訪れた。

死ぬ間際同じ願いを一つ持ち

父母恋し彼女恋しと雲に告げ

黙送の中を静かに特攻機

四名の名は、及川肇・遠山善雄・福知貴・伊能二郎。彼らの搭乗した零戦は、鷗のように南の海に突っ込んでいったのである。

(一九八六年六月)

戦争と短詩型文芸

もっともらしいタイトルを掲げたが、こんな大きなテーマを一頁にまとめられるはずはない。実は先日、『川柳にみる戦時下の世相』（新日本新書）、『戦時下俳句の証言』（梨の木舎刊）の著者で『戦時詩歌集事典』などの著作もある高崎隆治の講演会が豊中市の図書館で催され、直接、話をする機会もあったので、そのことに関連して書くように思ったものである。

講演は、平和月間の行事の一つとして行われたもので、「川柳にみる戦争とくらしー戦時か

ら現代まで」という演題で行われた。このため、例句として示された三十句は、ほとんど「くらし」にかかわるものであったが、その中でも、次の句が注目された。

雨の降る日はよい靴を履いて出る

信ずべき新聞がない暗い国

子は母のものなり乳房二つあり

母ちゃんの分は母ちゃん食べなさい

特に感銘が深いのは三句目で、国民はすべて天皇の赤子であり、子は国のもの……と強調された時代に「子は母のもの」と言い切っているのは、見事と言うほかない。このような母にして、四句目の子どものあり方が生まれる。乏しい食物を子に譲ろうとする母親に対し、キツとして「母ちゃんの……」と命ずるように言う子。

前記の本には、日中全面戦争が開始された昭和十二年から敗戦までの八年間に発行された川柳の雑誌八百冊の中から二一五句を選んで収録しており、いちばん多かったのは『川柳雑誌』、次は『番傘』で、関西の作家が目立つ。例えば、次のような句がある。

ゲートルが売切れということになり

正本 水客

空腹で歩く心斎橋寒し

北川 春巢

征った子の姿が残る曲り角

上田 翠光

御先祖へ切符制度のマツチする

永田 曉風

この著者は冒頭、「私は文学を専攻しているが、短詩文芸は専門家ではない」とことわっていたが、中学生時代から俳句・短歌に傾倒しながら、戦時下の息苦しい現実には耐えきれず、人に対するいたわりとやさしさを詠む川柳をひそかにつくり、新聞や雑誌にも投句していたという。そのような自らの体験が、「あの苛酷な時代に、精神的な豊かさや人間的な希望を失わなかった人びと」の作品を発掘する仕事に立ち向かわせたのだろう。

戦時下の俳句についてふれる紙数がないので、著書の中から三句だけ紹介する。

心貧しく物に乏しく冬に入る

老人に用なし死ねといふかこの冬

梅咲きぬ年経るごとにきびし世に

また、同じ時代に堀口大学が「歴史」と題して、次の詩をつくっていたという。

国はだんだん／大きくなった

薔薇はだんだん／咲かなくなった

火事がなければ／地震があった

病気がなければ／いくさがあった

合間合間にくらしがあった

(一九九三年十一月)

カタカナ語と川柳

今回、橋高薫風監修・田中正坊編『川柳カタカナ語辞典』を葉文館出版から刊行したので、その紹介も兼ねて「カタカナ語と川柳」について書きたいが、実はこのテーマは平成二年三月号の「外来語について」（川柳こぼれ話）でふれている。カタカナ語には以前から関心を持っていたが、たまたま全日本川柳協会が川柳入門書の刊行を企画、その一項目であるカタカナ語川柳の執筆を依頼された。

そこで、『川柳塔註寿古希記念句集』をはじめ番傘・ふあうすとの同人句集や各種の合同句集、個人の句集、各柳誌にあたった。当初は、百語ぐらいを例示するつもりであつたが、調べるほどに語数が増えて六百四十二語となり、例句も約千六百句となつたので、これを一冊にまとめることとした。

川柳におけるカタカナ語の増加は、新聞・雑誌の文章をはじめとして、一般的な日本語の中に増えたことが原因で、このような傾向を一部には日本語を乱すものとして嘆く論者もいるが、これは良い・悪い、あるいは好ましい・好ましくない、ということを超えた必然的な流れであり、それが文芸の世界にも浸透してきたのは当然であろう。

川柳と同じく短詩型文芸である俳句では、かなり古くから注目されており、すでに大野維草子編『俳句外来語辞典』があるが、カタカナ語の中には、季語に採用されているものさえある。よく知られている句に、

摩天楼より新緑がバセリほど

鷹羽 狩行

がある。また、短歌でも佐々木幸綱が「短歌の中のカタカナ語」と題して朝日新聞に執筆しているが、最近、短歌の中にカタカナ語を使うことが多くなり、今夏、長崎で開かれる『心の花』全国大会は、カタカナ語短歌をテーマとすることに決まったとしている。

話はカタカナ語と川柳に戻るが、それが多用されはじめたのは、戦後の昭和三十年以降で先人の句に、見渡すとユダの心をみんな持ち

麻生 路郎

コスモスも遂に日本のものとなり

岸本 水府

スナップにあかの他人の女居る

梶元 紋太

がある。同時代の柳人にもカタカナ語をよく使う人とそうでない人があるが、中尾藻介・橘高薫風・岩井三窓の句を紹介する。

セレモニー終わり小使室にいる

中尾 藻介

手榴弾かつて握りし手にレモン

橘高 薫風

焼酎でシャンソンうたう悪いかね

岩井 三窓

その他の例句については、この本を参照してほしいが、最近では自由吟の中で詠まれるとともに、句会における兼題としてカタカナ語が出題されることが多くなってきた。この際、カタカナ語の知識と用法を身につけ、ボキャブラリーを豊かにして、いい句を詠みこなすようにしてほしい。

(一九九九年五月)

薬あれこれ

今から三十年ほど前だったと思うが、はじめて人間ドックに入った。大阪府成人病センターであったが、いろいろな検査をした後、検査結果の申し渡しがあった。ほとんどの項目についてシロで、一つだけ過酸症（胃酸過多症）がチェックされた。これは、病気とは言えない体質的なもので、対策を聞いた時、ドクターから勧められたのが、「新・三共胃腸薬」であった。私の常備薬第一号で、ずっと愛用している。

もともと消化器系統が弱いことから、これと姉妹品の消化酵素剤「新タカチア錠」（三共）を随時、服用しており、整腸剤「ミヤリサン錠」も欠かせない。前二者の三共製品はこの店でも売っているが、ミヤリサンは宮入博士が開発した特殊な酪酸菌製剤で、大きな薬局でしか扱っておらず、その薬効は抜群である。この三者でほとんどの症状はカバーできるが、昔ながらの和漢胃腸薬である大峯山の「陀羅尼助丸」も捨てがたい。

次にこれも漢方薬だが、昔から知られている「八味丸」。カネボーやツムラからも発売され、健保適用となっているが、私は昔から第一薬品製造のものを使っている。ある高名な薬学博士がこれを強く推奨したと聞いたからである。成分は地黄、山茱萸、山藥、澤瀉、茯苓、牡丹皮、桂皮末、加工附子末の「八味」で調剤されている。薬効は老人性疾患一般と言うことになって

いるが、私自身の体験によると、前立腺肥大と白内障の進行を緩和することに尽きる。これも一般薬局にはなく、発売元の壮快薬局から購入している。

続いて「メラトニン」。「奇跡のホルモン」としてアメリカで注目を浴び、我が国でも講談社から翻訳本が出版されている。要するに脳の中心にある松果体から分泌されるホルモンⅡメラトニンを人工合成したもので、免疫機能を高める抗酸化物質といわれる。その有効作用についての研究がさかんに進められているが、確実に立証されているのは睡眠促進効果で、ここ半年間の人体実験でも、最良の睡眠薬と認められている。入手の方法は、日本の代理店を通じてアメリカから個人輸入する以外ないが、驚くほど安価である。

飲み薬だけでなく、外用薬についても触れておきたい。傷には「クロマイP軟膏」（三共）が効く。戦後、一部で万能薬としてもはやされたクロロマイセチンに類する成分を含んでいる。もう一つは、口腔用「ケナログ」。これは輸入薬だが大きな薬局では扱っている。私はよく口内炎を起こすが、この薬を塗布して眠れば、たいてい一夜で治る。

私は薬品について専門的知識はないが、薬種問屋の息子で、幼い時から薬のことについて見たり、聞いたりして育った門前の小僧である。父がよく言っていた言葉を紹介して結びに代えたい。「万病に効く薬がないように、万人に効く薬もない。自分で試してみても自分に合う薬を探し出し、それを根気よく服用することが薬と付き合うコツである」。

私の読書ノート

昨年来、仕事を整理して余暇ができたので折りにふれて川柳塔誌にエッセイを書こうと思ひ立ち、「閑人閑話」というタイトルまで決めて、二編書いたが、後がつづかない。かつて『売文業』だった悪い癖で、締切りがないとつい怠けてしまうが、今回、編集部から依頼があったのを機に、筆を執ることにした。

いたってルーズな一面、記録癖もあつて一九七四年以来、欠かさず一冊の手帳に読書ノートを書きとめている。ノートと言っても、月ごとに読んだ本の書名と著者・出版社名を書くだけの簡単なことだから長続きしたのかも知れないが、記録した冊数はこの二十五年間で二千冊を少し上回る。これは完読した単行本にかぎり、雑誌や資料は含まない。

ほつぽつ物忘れをするようになり、同じ本を買ったり借りたりすることが重なつて、それを防ぐことが目的だったが、こうして記録してみると、本来の目的以外に私自身の読書量や読書傾向などが分かつてくる。ある意味では、一つの『自分史』とも言えるだろう。

量的な面では、一九七〇年代は月に五冊程度、年間六〇〜七〇冊ぐらいだったのが漸増して、一九八〇年代は八〇〜九〇冊となり、一九九〇年代には年間一〇〇冊を越すようになった。こ

れは年金生活に入って時間的にゆとりが生れたこと、そして川柳を始めてから短詩型文芸に関する本を読むようになったことによる。

質的な面では、〃現役〃だった一九七〇年代は、教育関係の新聞・出版に従事していたことから教育問題、また、日中友好協会の役員をしていたので中国問題が多い。仕事で教育についてのコラムやエッセイを書いていたが、執筆と読書はアウトプット（出力）とインプット（入力）の関係にあり、たえず見たたり聞いたり読んだりしていないと、いわゆるネタが切れてしまう。シリーズの『日本の教育』や『教育の森』などをじっくり読んだことを記憶している。

縁あって川柳を学びはじめた一九八〇年代後半の一時期は、短詩型文芸に集中している。構造社の『川柳全集』（十冊）、朝日文芸文庫の『現代俳句の世界』（十六冊）や岩波文庫の『柳多留』『武玉川』などを読みあさった。川柳に関する文献については、いずれまとめて紹介したいと思っている。

これは私の持論だが、読書はすべて何かに役立てるためにするのがいいとは思わない。学習・研究や実利・実用で読むのはもとより必要だが、趣味としての読書もあっていいと思う。私はいわゆる〃雑学〃で、手あたり次第に何でも読むが、〃兵役〃で言えば後備役に入った昨今では、もっぱら楽しむための読書にウエイトをおくようにしている。

読みごたえのあったのは、塩野七生の『ローマ人の物語』、司馬遼太郎の『街道をゆく』（四

十三冊）で、『滄海よ眠れ』（六冊）以来、とりつかれている澤地久枝の著作は、ほとんど読みつくしている。どちらかと言えば私は、新聞記者の根性が抜けないからか、ルポルタージュやノンフィクションが好みらしい。

しかし小説もやはり捨てがたい。古典的な名作は若い時に一とおり読んだので、現代の作家と言うことになるが、時代物では山本周五郎・藤沢周平・白石一郎、その他では新田次郎・井上ひさし・高橋治・清岡卓行・宮城谷昌光・浅田次郎を挙げると、古いと笑われるだろうか。

（二〇〇〇年五月）

私の映画ノート

私は、定年後の趣味（道楽）を読書・映画と旅行の三つにしている。読書については、先にこの欄に書いたので、今回は映画を取り上げることにする。見たがり知りたがりの私は、読書と映画鑑賞をほぼ同じレベルの知的作業だと信じている。これは私だけの考え方だと思っていたら、はからずも有力な同志がいた。『ローマ人の物語』など、イタリアの歴史に関する著作で知られる塩野七生である。

この人の著書『人びとのかたち』は、扉に「映画鑑賞を読書と同列において私を育ててくれ

た今は亡き父と母に捧げる」という言葉を掲げ、全編を映画に関するエッセイで埋めている。映画と言っても、アメリカとフランス、イタリア、ロシアなどの洋画ばかりだが、解説や鑑賞にとどまらず、映画の表現や内容から人生論をみちびき出している。文庫版でも出版されているので、一読をおすすめする。

彼女と違って私の場合は、両親からそのような高尚な教育を受けた記憶はないが、縁あって子どもの頃から内外の映画を観る機会が多く、今も映画には目が無い。したがって、映画鑑賞に関しては、質的にはともかく、量的にはこの人とあまり変わりはなく、同書に登場する映画のほとんどを観ている。

そこで前回の「読書ノート」に準じて、数年前から書きとめている「映画ノート」を繰ってみよう。ここでは邦画と洋画に分けて、その題名と製作国名、監督または主演俳優名を記録しているが、試みに一九九九年について見ると、邦画三十二本、洋画七十八本、計百十本となっている。後で分かったことだが、これはたまたま、この年の読書冊数とほぼ一致する。ただしこのうち、映画館へ足を運んで観たのは十四本に過ぎず、その他はテレビとビデオである。

新作の映画を観るときには、できるだけ事前に新聞や雑誌の映画評を読み、価値のある作品かどうかを確かめるが、テレビやビデオでは、前年度にベスト・テンになったものや定評のある往年の名作を中心に選んでいる。テレビはやはりNHKは、新旧を問わず精選した秀作を放

映しており、特に教育放送のアジア映画祭では、あまり観る機会がない中国や韓国、インド、イランなどの話題作を取り上げている。また、民間放送は駄作が少なくないが、気を付けていると思わぬ佳作にめぐり逢うこともあり、衛星放送やハイビジョン放送では、主として特集的にすぐれた洋画を放映している。

ビデオのレンタルは、日数が限られるのでごくたまにしか利用しないが、最近の大作は映画館における観客数にビデオの販売数をプラスした数字を基礎に製作費を計上すると言われている。したがって、新刊書が日をおかずに文庫版となるように、映画も上映がヤマを越した時点でビデオ化されているようだ。蔵書と同じように、ビデオを数百本も持っている映画ファンを知っている。

終わりに、私が昨年从今年にかけて観た映画の中で、特に見ごたえのあった作品をいくつか紹介してこのノートを閉じたい。邦画では、「鉄道員（ぽっぽや）」と「カンゾー先生」が傑作で、地味な作品だが、時代物の「雨あがる」がさわやかだった。洋画では、「宋家の三姉妹」「ダロウエイ夫人」「グリーンマイル」が好かったが、ごく最近に観た中国映画「あの子を探して」には、ひさしぶりに心を洗われた。

(二〇〇〇年十月)

私の旅行ノート

旅行（ツアー）と一口に言っても、行先・目的・形態によってさまざまである。まず、行先については、大きく分けて国内と海外がある。目的はビジネスと観光、そして観光にはグルメ・ショッピングと多様である。形態と言うかスタイルに関しては、個人と団体があり、団体には会社や特定の集団によるものと旅行社が行うパックツアーがある。

国内旅行について私の「旅行ノート」を繙いてみると、その行先は北は北海道から南は沖縄まで、ほとんど全国に及んでいる。これまでに一度も足を踏み入れていないのは、群馬県だけである。二十代から今日まで五十年以上のキャリアだから、決して多すぎることはない。海外旅行は五十代後半から始めたので、これまでに遠近とりまぜて十七回、アジア・ヨーロッパ・アメリカの約二十か国を訪れたにすぎない。いわゆる五大陸のうち、アフリカ・オーストラリアには全く足が伸びていない。

旅行の目的は、まず商用・調査などを含むビジネスがあるが、私の場合はあまり関係がない。ただ全日本川柳協会などの全国組織の団体が年次大会（総会）を開くときは、会場を各県持ち回りにすることが多く、私とその団体の役員であったり、取材の対象とするため出掛けること

が少なくなかった。私の旅行の行先が多くの府県にまたがっているのは、こういうことにもよる。ただしこうした大会では、開催地付近の観光が日程に組み込まれていたり、自由行動で名所・旧跡に足を伸ばすことが多く、その意味では観光を兼ねているとも言えよう。そして純然たる観光旅行の場合、日本ではグルメやショッピングに重点をおくことが多いが、欧米では五〇パーセント以上が歴史や文化に関心を示し、カルチャー・ツーリズムという言葉さえある。私も旅先では時間の許すかぎり、その土地の博物館や美術館を訪れることにしている。

旅行は現在、国内・海外ともバックツアーが全盛で、各旅行社がしのぎを削っている。自分で行先・日程を決めて参加者を募り、乗物・宿舎の予約を代行させる「手配旅行」もあるが、電話一本で申し込み、敷かれたレールに乗るだけのツアーが圧倒的に多い。その中味も安価な位置のものから、航空機・ホテルをグレードアップし、行先・日程にも工夫をこらした高級なツアーもある。私の場合も、これまで海外はほとんどバックツアーに頼ってきたが、利用にあたっては必ず複数の旅行社の案内を取り寄せて検討することになっている。

いずれにしても旅行するについては、事前にガイドブックを読んでその土地の情報を収集することが大事だが、司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズには、作家が実地に歩いて見聞したことがまとめられており、海外では韓国・中国・モンゴル・スペイン・オランダとアイルランドがあつて、重宝している。また、イタリアについては、塩野七生の『海の都の物語』『ロー

マ人の物語」などがある。

どうやらまとまりが付かぬうちに終わりそうだが、やはり旅行というものは、地図と時刻表と資料を準備して計画し、個人あるいは同好の士と出掛けるのが本来の姿ではないかと思う。たとえばJRの「青春18切符」などを利用して、ゆっくりじっくりと各地を回るのが最も望ましいと思うながらも、まだ実行できないでいる。

(二〇〇一年一月)

川柳の本―句集

川柳の本をたくさん持っている

正坊

柳歴二十年に満たぬ私だが、川柳関係の蔵書が多い。句集はほとんど自費出版なので、何かの縁故で贈られたものがほとんどだが、本誌の編集にかかわっていたこともあって、未知の方からも頂いた。今は亡き西森花村にも、貴重な本を讀ってもらった。

句集には、①個人の句集 ②選集(全集) ③合同句集の三種がある。個人の句集は入手しても、一度、目を通してだけで、書棚に並べてしまうことが多い。しかし、資料的な価値のあるもの、著者と波長が合って作風に魅せられ、折にふれて読むものがある。それを何点かにしば

るのは難しいが、私の蔵書から思いつくままに紹介してみたい。

古いものでは、麻生路郎の『旅人』、『定本岸本水府句集』、これに次いで『中尾藻介自選句集』『定本西尾葉句集』、さらに須崎豆秋の『ふるさと』、『谷垣史好句集』がある。著者はすべて故人だが、私を川柳にみちびいてくれた白岩文衛の『出会い』と土居耕花の『やつこ風』を加えてもいいだろう。

現役の著者では、橘高薫風の『愛染』、『古稀薫風』、森中恵美子の『水たまり』、岩井三窓の『川柳読本』『川柳燦燦』、時実新子の『有夫恋』が見落とせない。このほかと言うと取捨選択に迷うが、長老では、黒川紫香の『むらさき』、中堅では、新家完司の『平成……』シリーズを例示しておこう。

次に選集（全集）だが、いちばんまとまっているのは構造社版の『川柳全集』全十三巻で、井上剣花坊・川上三太郎といわゆる六大家、出版当時に柳社を主宰していた三条東洋樹・藤島茶六・渡邊蓮夫らが含まれており、今となつては貴重な文献となっている。

これと少し趣きが違うが、平成元年に芸風書院が出版した『現代川柳選集』がある。①北海道・東北・東京②関東・北陸③中部・近畿・四国④関西⑤中国・九州の五巻に分れ、各巻二十名ずつ、百名の川柳人の作品が収録されている。詩歌文学刊行会『日本現代川柳叢書』、近代文芸社『日本全国川柳叢書』もあるが、どちらも途中で休刊してしまった。

終りに合同句集だが、川柳塔社では昭和四十九年、同五十九年、平成六年と十年ごとに同人を中心とした合同句集『川柳塔』を発行している。また、番傘川柳本社は昭和六十年と平成十年に『番傘同人句集』を刊行、ふあうすと川柳社も平成六年、六十五周年を記念して合同句集『ふあうすと』を出している。柳樽寺川柳会・鶴かご川柳社など、各地の柳社でも、この種の合同句集を出版していると思うが、私はその一部しか入手していない。

このほか、京都塔の会・城北川柳会・もくせい川柳会・翠洋会・三幸川柳教室などの小句会でも、定期的に合同句集を刊行しているが、そのすべては紹介できない。

ここで一つ触れておきたいのは、復刻版として出版された句集『現代の川柳』で、昭和三十年から同三十三年にかけて川柳新書刊行会から刊行された当時の新鋭・中堅作家の小句集四十冊を一本にまとめており、大山竹二・河野春三・山村祐らを収録している。

また、たいまつ社の『新興川柳選集』（全一卷）には、鶴彬・田中五呂八・森田一二・木村半文銭の作品・評論が収められ、新日本出版社『日本プロレタリア文学集』第40巻には、さらに広い範囲にわたる川柳作家の作品を収録している。

（二〇〇一年十月）

川柳の本―図書

新しく川柳を始められた方から、手ごろな入門書はないかと聞かれることがある。せっかく紹介しても、入手できなければ仕方がないので、次の三冊をおすすめている。『川柳入門事典』（全日本川柳協会編・同協会取扱い）、『川柳とは何か―川柳の作り方と味い方』（麻生路郎著・川柳塔社取扱い）、『川柳―その作り方と味い方』（番傘川柳本社編・創元社発行）で、購入方法は編者に問い合わせるとよい。

しかし、もっと多くの本について知りたいという方のために、私の蔵書の中から著者・書名・発行所の順に、十点ほど紹介しよう。書店にはなくても、図書館に収蔵されていたり、古書店で入手できる場合もある。

川上三太郎『川柳入門』（大文館書店）、岸本水府『川柳読本』（創元社）、近江砂人『川柳の作り方』（明治書院）、関水華『川柳レベルアップ』（近代文芸社）、神田忙人『川柳の作り方・味い方』（社会保険出版社）、尾藤三柳『川柳作句教室』（雄山閣）、時実新子『川柳を始める人のために』（池田書店）、野谷竹路『川柳の作り方』（成美堂出版）、林富士馬『川柳のたのしみ』（平凡社）、三浦三朗『川柳入門』（家の光協会）、斎藤大雄『川柳の世界』（近

代文芸社）、吉岡龍城『川柳みちしるべ』（本阿弥書店）。

このほか、田口麦彦は『川柳と遊ぶ』（実業の日本社）はじめ川柳に関する著作が多いが、飯塚書店発行の『現代川柳入門』『川柳技法入門』『時事川柳入門』の三冊は力作であり、その延長線上で編集した『川柳表現辞典』は異彩をはなっている。

課題の解説と例句を示したこの種の図書としては、『類題別番傘一万句集』、『統類題別番傘一万句集』（創元社）があり、かつて川柳作家の“バイブル”とも言われたが、両書とも課題のほとんどすべてが名詞であり、動詞・形容詞・副詞が多用される今日では、いささか物足りないくらいがある。また、奥田白虎編『川柳歳事記』は出色の著作ではあるが、俳句の“歳時記”にこだわり、季語の時候・行事や動物・植物名に偏っている。その点では、田口麦彦編『三省堂—現代川柳必携』は、多様な品詞の課題を分野別・五〇音順に配列し、それぞれの例句を挙げており、出色の川柳語辞典となっている。辞典のついでに、橘高薫風監修・田中正坊編『川柳カタカナ語辞典』も紹介しておきたい。

ここで特筆したいのは、尾藤三柳編『川柳総合辞典』（雄山閣）という一九八四年発行の大作。近代川柳史年表とともに、川柳関係の人名・出版物名・用語その他の事項が約一千項目にわたって五〇音順に配列されており、およそ川柳について調べたり、書いたりするにあたっては必読の文献である。

このほか、新潮社が一九九三年に発行した『短歌俳句川柳101年』のアンソロジーは大西泰世が川柳の部をまとめた労作であり、田辺聖子著『道頓堀の雨に別れて以来なり―川柳作家岸本水府とその時代』（中央公論社）は、小説の体裁をとった近代川柳史として注目される。また、異色の書としては、高崎隆治著『川柳にみる戦時下の世相』（梨の木舎）が面白い。

川柳をたしなむものとしては、やはり古川柳に関心を持つことが大切で『誹風柳多留』『誹風武玉川』が岩波文庫として収められており、山路閑古『古川柳』（岩波新書）、柴田宵曲『古句を観る』（岩波文庫）も手軽に入手できるので、一読をおすすめしたい。

誌上川柳大会考

（二〇〇二年六月）

川柳塔社では今から十年前、八〇〇号記念行事として全国誌上川柳大会を行った。その頃は今と違って、このような催しが少なかったためか、たいしてPRしなかったにもかかわらず、九百九十一名の参加者があって成功を納めた。私はこれに続いて、全日本川柳協会が主催する全日本川柳誌上大会にタッチし、選者もつとめた。この大会は毎年実施され、多い時には二千七百名を上回る参加者があり、恒例行事として定着している。

これらが火をつけたのか、現在は誌上大会ブームと言っていいほど、全国各地で数え切れない

いくらい実施されている。柳社をはじめ川柳関係団体の主催もあれば、地方自治体あるいは業界団体や特定業者が行うものもあり、中には数万名の参加を集めるケースもある。川柳の普及という面では、少なからぬ効果があることは確かだが、その作品内容については玉石混淆で、質的向上の点では手放しで喜べないものもある。

このような状況の中で、私も世話人の一人である「あかつき川柳会」では、今回、鶴彬顕彰全国誌上川柳大会を実施した。各地の柳社・川柳人を中心に一般にも呼びかけたところ、四十都道府県から五百四十六名という予想を上回る参加者があり、五名の選者によって大賞・準賞・佳作と入選百句を決定した。すべて自由吟だが、鶴彬はじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かすことを趣旨として掲げ、これに賛同する作品が集まった。

あかつき大賞に輝いた句は、「あばら骨見せてドームは訴える」（栃木清一）でケロイドを見せて、訥々と体験を物語る老いた被爆者の姿を示し、準賞「日の丸をつけた真つ赤な霊柩車」（吉田利秋）は、イラク派兵の自衛隊を思わせる意表をついた作品、そして同じく準賞の「九条を丸ごと渡す子や孫へ」（山川ゆう子）は、平和憲法を体を張って守ってきた戦中・戦後派が、子々孫々に至るまで無傷で引き継ぎたい願いをこめている。

受賞句に代表されるように、原爆被害と核廃絶から戦争・空襲体験を詠んだものの、第九条を核心とする憲法をたたえ、改憲の動きを批判する句、自衛隊の派兵を含むイラク戦争の問題、

日の丸・君が代・靖国神社参拝から有事法制・年金問題に至るまで、いちいち挙げられないほど、現在の日本・世界をめぐる状況が対象とされており、画期的な時事吟のアンソロジーとなっている。

入賞・入選の枠にもれた作品の中にも、それらと比べて遜色ないものが多いことから、巻末に全参加者の一人一句抄を収録し、鶴彬への認識を深めるため、彼の経歴・作品なども掲載した鶴彬顕彰全国誌上川柳大会入選句集『あおぞら』（B6判・56ページ）を刊行し、参加者に送付するとともに希望者への実費頒布にも応じている。

いささか同句集のPRめいてしまったが、誌上川柳大会は、このような明確な趣旨や目的を掲げて行えば必ず成功するし、また、参加者が思ったほどでない場合も、優れた作品が集まれば川柳の質的向上につながることになる。しかし、日時や会場を設定し、大がかりな準備をしなければならぬ川柳大会と比べて、誌上大会は選者さえそろえれば何とか格好がつくということから、イーजीに実施することは慎むべきではないかと思う。また、川柳作家が業界・業者のPRを目的とする誌上大会に選者として参加する場合は、厳として作品本位の選句を貫くことを訴えておきたい。

（二〇〇四年十月）

老人文芸 ええじゃないか

まず私と川柳とのかかわり合いだが、今から二十年前、大原川柳社を主宰していた亡き学友の白岩文衛が教職を退くにあたって、句集『出会い』を刊行することとなり、川柳に門外漢の私に制作を頼んできた。収録句はすでに自選しており、整理と校正だけの仕事であったが、約一か月、彼の作品とにらめっこして過ごした。これが私と川柳との出会いである。

それから彼との川柳を通じてのひんばんな交流が始まり、翌年、定年退職したこともあつて『川柳塔』誌をはじめ、あちこちに投句したり、ぼつぼつ句会にも参加するようになったが、なにしろ六十の手習いだからスイスイと上達するはずがない。周囲を見渡すと柳歴十年、二十年という人が多く、これではとても太刀打ちできないと思つたが、そうこうしているうちに、私も年齢とともに柳歴を重ねて今日に至つた。

そこで年齢と柳歴、一般的にはキャリアということだが、川柳を始める年齢は低ければ低いに越したことはない。若い人のあのみずみずしい感性は、老人の私たちには望んでも得られない。年の功という言葉もあるように確かに高齢者の豊かな人生体験にもとづく英知は貴重だが、一方では能力の低下も無視できない。

さてキャリアということになれば、古ければ古いほどよいとは思われない。余人はいざ知らず、私自身を振り返ってみると、およそ十年から十五年あたりで、私なりのあまり高くない水準でのピークに達し、それからはダラダラと下り坂に向かつているように思う。

早い話が題詠（課題吟）で出された課題を見ると、以前に自分が作った句や句集などで読んだ句が脳裏をよぎって、発想の範囲が狭くなる。締切り時間に迫られると、そのような句をちよつと捻ったり、用語を変えたりしたコピー作品になりかねない。雑詠（自由吟）においても自由な句想が涸れ、つい老いの句や孫の句などでごまかしてしまう。もとより老いてますます佳句をつくる作家もいるが、その数は少なく、權威だけに頼る川柳人がはびこっている。

やや自嘲に過ぎたかも知れないが、だからと言ってキャリアが古い高齢者は、川柳界に無用と言うのではない。たとえ自らの作句力は衰えたとしても、為すべきことは多い。今までに蓄積した川柳についての知識や体験にもとづく技法（レトリック）を初心者に伝え、大小の句会で選句したり、求められれば作品を添削するのでもいいだろう。それも指導というのではなく、あくまでも作者の個性を伸ばすためのアドバイスに徹したい。

さらに付け加えたいのは、句集を刊行することである。私は三年前に喜寿を記念して、句文集『ペンシル』を出した。柳誌の掲載句と句会などの入選句から自選・他選で八百句を収録したもので、ゆかりのある人たちに差し上げた。こんな拙い句集をどなたが読んで下さるだろう

かと思つたが、予想外に反響があり、ていねいな感想や批評を寄せられた人もあつた。

句集刊行は、春秋に富む人たちにとつては作品を世に問う意味が大きいが、私などの場合は、これまでの創作活動を総括し、人目にさらすことにあり、ふと生前葬という言葉が脳裏をよぎつた。それはともかくとして、ある程度の年月にわたつて創作に携わつた者はそれをまとまつた形で発表すべきで、後に続く人たちへの義務ではないかと思う。

終わりに一般論として川柳人の高齢化、一部に川柳は「老人の文芸」とも言われていることについて触れておきたい。正確な統計はないが、これは俳句や短歌においても、事情はあまり変わらないのではないかと思う。現在では、女性ほぼ子育てが終わつた五十歳代、男性は定年退職の六十歳ごろから始める人が多いのではないだろうか。そこでふと気がつくと、相当な年齢になつており、平均寿命が伸びたこともあつて、高齢の川柳人が目立つこととなる。それはそれなりに結構なことで、決して否定的に考えるべきことではない。句会に参加する元気があれば、出かけて行つて多くの柳友たちと交流、それぞれの柳誌や新聞・雑誌などの柳壇に投稿し、大いにシルバー・パワーを発揮すべきだと思う。

「川柳はボケ防止によい」という言い方は私は好きではないが、創作活動によつて脳が活性化することは確かである。いつまでも現役作家として、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」（井上ひさし）を胸に刻んで作句を楽しみ、アドバイスにもつとめたいと思う。

レ
モ
ネ
ー
ド

文章について

たしか中学校三年の時だったと思う。若い国語の先生が着任された。当時は「国漢科」と言つて、国語の教師は中国語古典である漢文も担当したが、なぜかそのO先生に漢文を習った記憶はない。当時の中学校（旧制）のことだから、教師も生徒もすべて男子である。

フチなし眼鏡をかけた白哲の青年で、体罰を常習とする教師が少なくなかった当時では、稀に見る穏やかな人であった。私はどちらかと言うと、国語は得意な教科の一つであったが、O先生がときどき課される自由作文は苦手で、文字どおり四苦八苦した。

ところがである。授業時間に作文についての心得を一席、述べた後、私の文章が模範文として朗読された。その内容は今も記憶しているが、七人兄弟の末から二番目である私が、二歳下の弟と些細な事から喧嘩したてんまつについて、少しフィクションをまじえながらまとめたものであった。

それから何度か、私の文章が教室で読み上げられ、クラスで注目されるようになったが、次の年には担任がかわり、O先生は兵庫県の女学校へ転任して行かれた。さらに数年経ったあの日の新聞に、教師と教え子との心中事件が報道された。それはまぎれもなく、あのO先生で

あつた。社会的には不祥事だったかも知れないが、私はこのカップルは、死を以て愛を貫かれたと思つたし、今もそう信じている。

今は昔、六十年前のことである。このことだけで私が将来、文章を書くことを主なりわいとするに至つたのではないが、一つの契機となつたことはたしかである。とにかく文章を書き、文章を扱う仕事に四十年以上たずさわつてきた。つまり売文業——文章のプロである。

ここで断わつておきたいが、プロだから文章が上手であるとか、優れた文が書けるといふことにはならない。アマであつて文章がうまい人はゴマンという。しかし、プロにはプロとしての条件があり、プライドもある。それをいくつかあげて結びとしたい。

一つは、人に分かる文章を書くということである。それも一人や数人ではなく、不特定多数の人が対象で、分からない文章を書く者はプロではない。

二つは、原則として、何らかの対価を期待できない文章は書かない。文章を書くことを生活の糧とする以上、これは当然すぎるほど当然のことだろう。

三つは、文章を書くことを依頼され、自ら決めたからには、定められたテーマについて、締切日までに規定の分量でまとめねばならない。それができなければ、プロの名に値しない。

(一九九四年六月)

忘れられぬ日

国に祝日、さまざまな社会に記念の日があるように、誰にもその人にとって忘れられぬ日がある。六月一日は、「善良」な市民として社会生活を送っていた私が一枚の紙切れによって拉致され、ボロボロの軍服を着せられた日である。一九四四（昭和十九）年のことだから今からちょうど五十年前にあたる。それから言うに言えないさまざまなことがあったが、この日は、敗戦によつて「帝国陸軍」から解放された八月十五日とともに、私にとつて忘れられない日である。

私と同年輩の者には、陸軍士官学校や海軍兵学校などの軍関係の学校に進学し、はじめから職業軍人を志した者、普通の大学・高専から海軍予備学生や陸軍特別幹部候補生を志願した者が多かった。私はたまたま徴兵検査で第二乙種の第二補充兵役となったため、卒業即現役入隊とならず、戦時下の新聞記者生活を送っていたところ、召集令状が舞い込み、否応なしに営門をくぐらされた訳である。もつとも戦争激化にともない、周りの者に次々と呼びが掛かっていたから、「来るべきものがとうとう来たか」という思いがあったのも事実である。

時に友人や知人と戦争や軍隊生活の話になると、さも懐かしそうにとくどくど思い出話をする者がいる。長い年月は苦しかった事も美化される場合があるが、概して士官（将校）として

軍隊生活を過ごした者、あるいは特別に志願して兵役に就いた者にそういう人が多いように思う。文字どおり星一つで入隊し、野間宏の小説『真空地帯』そのままの体験をしてむりやり志願させられ、やっと下士官の端くれになった私にとっては、軍隊ほど嫌いな組織はなく、戦時中くらいいい時代はない。

いや、よい思い出が一つだけある。その日は忘れたが、信太山の兵舎で演習に明け暮れていた時、公用外出で同年兵と連れ立って炎天下の道を歩いていた。汗はダクダクで、のどはカラカラ、とある農家に井戸があるのを見つけ、家人にことわって水を汲み上げて飲み、水筒に詰めた上、顔や手足を洗った。あいさつをして立ち去ろうとしたところ、「まあ、お休み」と年配の婦人に招じられた縁側には、何と盆に盛られたトマトに、ビールまであるではないか。思わぬ御馳走に驚喜したことは言うまでもない。

見ず知らずの、しかも行きずりの一兵士に過ぎない私たちに、貴重な配給のビールを恵んでくれた人は、もしかすると連合いか、兄弟が軍隊で不自由な生活を送っていたのかも知れないが、この時ほど人の心の温かさが身にしみたことはない。それまで食わず嫌いだったトマトが大の好物となり、戦中・戦後のすさみきった時代に、ともすれば失われそうになった人間への信頼を、この日の情景を思い出すことによって、かろうじてつなぎ止めることができた。

(一九九四年六月)

関東の農村

私は生っ粋の大阪人である。昭和初年、船場にあった生家から通学する小学校への道路はすべて舗装され、狭い校庭には木（もく）レンガが敷き詰められていた。家には猫の額ほどの前栽があるばかりで、よくよく「土」とは縁のない暮しであった。しかも、中学校以上の学校も勤務先もすべて大阪市内で、召集によつて軍隊に入るまで大阪を離れることはなかった。

と言っても、農村の生活を全く知らなかったわけではない。母が能勢は高山の生れで、実家はすでに無くなつてはいたが、血の濃い親戚が残っており、中学生時代の夏休みに母や兄弟とともに泊りがけで訪れ、何日間かを過したことがある。当時から典型的な近郊農村で、しかも山林地主を兼ねる富裕農家が多く、さすがに衣食は都会とは異なるが、決して貧しいというような暮しではないと思つた。

さて軍隊では、現在の和泉市にあつた信太山演習場に駐屯していたが、昭和二十年、私の所属する師団をあげて茨城県へ移駐した。村の小学校舎が仮兵舎となり、そこから「陣地構築」と称する壕掘りに出かけた。そして夜は、それぞれ割り当てられた農家で入浴させてもらい、囲炉裏端で一服して帰つた。

後には部隊が管轄する陣地の移転によって、間取りに余裕のある農家に数人ずつ分宿することとなった。私は指揮班付の下士官として「兵要地誌」という地図作製のため、村内を歩き回り、公用で農家と接触する機会が多かった。関東のしかも農村ともなれば、言葉も風習も生活も全く異なる。私にとっては、正に異文化との接触で、おどろくことばかりであった。

この辺りは、火山灰が堆積した関東ローム地帯で、田植えは、タスキにモンペ姿の婦人が胸まで水につかるという大変な労働。しかも水田はごくわずかで、農家の常食は馬鈴薯・甘藷・玉蜀黍という実情であった。街道筋の家には電気がひかれていたが、少し離れると電灯はなく、私が分宿していた家ではランプを使っていた。貧富の差が激しく、隊長宿舎にあてられた富裕な農家は銅（あかがね）で屋根を葺いていたが、ほとんどの家は藁葺きの粗末な家並みで、地味豊かな近畿と生産性の低い関東との格差はかなり大きいという実感を持った。

あれから五十年、茨城県も首都圏に組み込まれて大きく変貌したと思うが、今も薄暗いランブの下で、お茶うけの漬物をてのひらに盛ってもてなされた農家の一夜が、懐かしく思い出される。

（一九九四年十月）

戦死やあわれ

戦死やあわれ　兵隊の死ぬるやあわれ
遠い他国でひよんと死ぬるや

だまってだれもないところで

ひよんと死ぬるや

ふるさとの風や　こいびとの眼や

ひよんと消ゆるや

国のため　大君のため

死んでしまうや

その心や

一兵士として戦地へ行き、フィリピンのパギオで戦死したと伝えられる竹内浩三という詩人の遺作で、私はこの詩を読むと作者の死にニューギニアで人知れずに死んだ私の兄の死がさなり、いたたまれぬ思いにかられる。八月は、戦争についての思い出が次々と浮かぶ月である。もう一つ詩（詞）を紹介しよう。

ボクは軍人大きらい

いまに小さくなったなら

お母ちゃんに抱かれて乳のんで

お膝でスヤスヤねんねする

『弟よ、安らかに眠るな』と題する中島秋男の著書から引いた。この本歌は「僕は軍人大好きよ。今に大きくなったなら、勲章つけて剣さげてお馬に乗ってハイドードー」で、戦前に子ども時代を送ったものなら、誰でも記憶しているだろう。

「たえがたきをたえ、忍びがたきを忍んで、朕の命令に服してくれという。すると国民は泣いて、ほかならぬ陛下の命令だから、忍びがたいけれども忍んで負けよう」は、敗戦当時を描写した坂口安吾の文章である。

「ぞうさん」等で知られる童謡詩人、まど・みちおの『まど・みちお全詩集』には、千二百編を収録しているが、その中には戦争協力詩二編も含まれている。そのあとがきで「まったく記憶になく、自分の作品とわかったときは大ショック」と言い、「本気で考えればなにが真実でなにがインチキかわかるはずだが、勇気のない臆病者だったからです」と述懐している。戦争中の作品について何らの反省もなく、口をぬぐっている詩人や歌人・俳人・柳人の多い中で、この真摯な態度は、詩人としての良心の証と言える。

(一九九六年八月)

大衆文学論

ワンマンで知られた吉田茂首相が記者会見後の雑談で愛読書を問われ、「銭形平次なんか面白いね」と答えた。それが早速、新聞のコラムか何かで取り上げられ、「一国の宰相たるものが」と、教養の程度を疑う話までもてはやされた。銭形平次とは言うまでもなく野村胡堂の『銭形平次捕物控』で、大衆文学に新生面を切り開いたという作品である。

私はこの小説を読んだことはないが、テレビドラマのシリーズとして放映され、今もその人気を保っている。胡堂は「あらえびす」のペンネームで音楽評論にも健筆をふるった教養人で、その著作は首相の愛読書として決して恥ずかしいものではない。

昔、教育新聞の編集をしていた時、しばしば大阪市の教育研究所を訪れ、所長と対談した。教育学博士の学位を持ち、後に広島大学教授に招かれた彼は、愛読書の一つとして山本周五郎の『さぶ』を挙げた。周五郎については、『樅の木は残った』というテレビドラマで知ってはいたが、小説を読んだことはなかった。

「あの小説は、ビルドゥングスロマンですよ」という言葉に早速、文庫本を買って読んでみた。それが病みつきとなって、片っぱしから周五郎を読みまくった。いくら読んでも飽きず、

一作ごとに心が洗われる思いであった。およそ著名な作品は、すべて読んだと思う。周五郎は生涯にわたって賞と名のつくものを辞し、人間の哀歓を汲む作風で大衆文学の地位を高めた作家である。

これによつて大衆文学に目を開かれた私は、あれこれと読みあさつた。そして目下、取りつかれているのは、藤沢周平と白石一郎である。奇しくも周平は『清左衛門残日録』、一郎は『十時半睡事件帳』が、かつてNHKテレビのドラマシリーズとして放映されている。

周平については、娘が『蟬しぐれ』『時雨みち』『花のあと』を持っていたのを借り、その魅力にひかれて次々と読みふけた。文庫版で五十冊ほどは読んだだろう。一郎はたしか『包丁さむらい』がはじめだったと思うが、小説づくりの技量においては周平と甲乙つけがたい。面白いだけが小説ではないが、とにかく面白い。そして読んだ後で生き方について考えさせるものがある。それが小説というものではないかと思う。

(一九九七年五月)

花と私と川柳

私は、柄にもなく花が好きである。それも花屋に飾られているけんらんなる花ではなく、木の花、野の花が好きである。それで花にちなむ句をよくつくる。

桃の花 孫が十五になりました

いつか「檸檬」の定例会で発表し、ゆかりさんに激賞された句である。家内の方の孫が幼い時から「おじいちゃん、おじいちゃん」と血のつながらない私をしたってくれているが、いつしか高校受験の年齢となった。その時、ふと浮かんだ句である。

梅の花 浪人という女の子

受験シーズンのころ、大学のキャンパスでアナウンサーが受験生にマイクを向け、現役か浪人かを問うのがテレビ画面に映し出されていた。私の孫のような女の子が「浪人です」と答えていたのが何ともおかしく、句に仕立てた。

新聞に桐の花が満開という記事が載った。私は桐の花を見たことがないので、早速、自転車で出かけた。天竺川のはとりの小公園にその花は咲いていた。何人かが見に来ていたが、白いボツタリとした花はもう咲き切り、散りかかっていたのにはがっかりし、無常を感じた。

桐の花 遍路の旅を誘われる

小集句会でやっと平抜きとなったが、どこか「くさい」と思っている。

私の住む団地の庭に何本かのハナミズキの木がある。ピンク色もあるが、やはり花は白が好ましい。淡いみどり色の若葉の間に咲いている純白の花は、いつまで見ていても見飽きることはない。

清純は死語にはあらず花水木

花水木はアメリカ原産らしく、木の表示に「アメリカハナミズキ」とあった。

もくれんを仰ぎ亡き父おもうなり

七人きょうだいの下から二人目の私は、いたって父親との縁はうすい。私が十八歳の年に死んでいるから、父とどうこうしたという思い出はほとんどない。しかし、モクレンの花を見ると、なぜか父のことが思われる。花は白も紫もあるが、私には白木蓮である。漱石もこの花が好きだったようで、「木蓮の花許りなる空を瞻る」という句がある。

小糠雨まためぐりくる連翹忌

奥田白虎編『新版川柳歳事記』にただ一つ掲載された私の句である。高村光太郎忌の異称だが、私は妻の忌のつもりで作句した。実は妻の葬儀に高杉鬼遊さんが「連翹のいろあざやかに小糠雨」という弔吟を捧げてくださったのにちなんだ。そう言えば近所の家の庭に、黄色い連翹の花が咲き乱れていた。

(一九九七年九月)

『街道をゆく』

司馬遼太郎と私は戦争中、同じ学校に学び、短期間の軍隊生活を経て新聞記者となった。本人とは同窓会で一度会っただけだが、学友もしくは戦友と言ってもいいだろう。しかし私は、彼の小説をあまり読んだことがなく、また、好きでもない。明治維新を肯定的に評価し、それに続く明治時代を担った指導者たちを美化する、「司馬史観」に共感できないからである。

ある日、彼の『街道をゆく』を書店で見かけた。初めに読んだのは「南蛮のみちⅠ・Ⅱ」で、たまたまスペインのツアーから帰って間もない時であった。フランシスコ・ザヴィエルの出身地であるバスク地方へは行かなかったが、マドリードとその周辺、とくにトレドについての記述には共鳴し、私の紀行文にその一節を引用したほどである。

次に読んだのは、「韓のくに紀行」と「耽羅紀行」。かねて私も韓国・朝鮮には関心を持っており、数年前に駆け足で旅したことがあるので、彼のこの国に対する思い入れに打たれ、学ぶところが多かった。

こういう紀行文は、かつて訪れた土地のことを読むのも興味があるが、いつか行きたいと思いがながらもまだ見ぬ国については、紙上旅行の醍醐味を味わうことができる。その一つが「オ

「ランダ紀行」で、かつてスペイン、ポルトガルの「南蛮」に対して「紅毛」と呼ばれ、鎖国時代の日本にとって世界への唯一の窓口であったこの国の風土や歴史、知られざる日蘭交渉史が描かれており、この小さな国への認識を新たにすることができた。

「モンゴル紀行」は、司馬がかつて蒙古語を学んだだけに力が入っており、牧祥三元大阪外国語大学学長が解説を書いている。このツアーは、ロシアのハバロフスク——イルクーツクを経てモンゴル人民共和国の首都、ウランバートルへ飛び、憧れのゴビ草原を訪れている。一部では近代化を遂げつつも、大部分は古代以来の牧畜によって二百万の国民が自らを養っているこの国へは、恩師の精松源一^{あべつ}大阪外国語大学名誉教授が同行したこともあって、司馬にとって心のかなごむ旅だったようだ。

シリーズの「白眉」は「愛蘭土紀行Ⅰ・Ⅱ」。イギリスと海を隔てて隣り合うアイルランドとは、宗教・民族の相違もあって仲が良くないという程度の知識しかなかったが、何と八百年にもわたってイギリスに支配され、搾取されつづけ、足掛け三年の紛争を経て第二次大戦後、アイルランド共和国が独立したことをこの紀行文によって学んだ。アイルランド島の人口三百万人に対し、アメリカ合衆国内のアイルランド系住民は四千万人で、ケネディ、レーガンの二人の大統領を出し、小泉八雲もアイルランド人であったという。

(一九九八年三月)

友人との対話から

中学校（旧制）の同期会で、隣に座っていた友人がつぶやくように話した。「今春、おそまきながらリタイアしたが、今まで仕事一筋できたので、これから何をしたらいいのか分からず、困っている」というのである。何人かからアドバイスがあつたが、各人各様。そこで「さて、私の場合はどうだろうか」と考えてみた。

“生涯現役”という生き方もあるが、現役を退いた高齢者としては、それらしい生活のスタイルがあるはずだと思う。私も暇をもてあまして、“二度の職”についたこともあるが、思い直して二年ほどでやめた。それでも何やかやと仕事らしいものが途切れなかったが、意識して断ち切るように努めた。

「それなら何をするのか」ということになるが、いろいろと考えた末、“遊び”に徹することと思ひ至つた。新しいものに挑戦するのもいいが、やはりこれまで何がしか手がけたことの方がいいだろう。映画・演劇・音楽・美術・文芸・読書・ツアーと挙げてみた上、いちばん手近で手軽なものということで、一応、映画・読書・ツアーの三つにしばつた。

まず映画。淀川長治には及びもつかぬが、私の映画鑑賞も年期が入っている。映画産業の不振が言われてから久しいが、なかなかどうして映画を見る機会が多い。映画館で封切を見るのは月一度ぐらいだが、テレビでは毎日、何かを放映しており、衛星とハイビジョンを入れると、かなりの本数になり、夜の時間はほとんどこれに充てている。

次は読書。現役時代は仕事に直接間接に必要な本とか、トピックス的な新刊書が主流を占めていたが、今では腰を落ち着けて長編やシリーズ物に取り組むことができる。昨年は塩野七生の『ローマ人の物語』、今年は司馬遼太郎の『街道をゆく』を読了した。新刊書はできるだけセーブし、むかし読んだ蔵書を再読したり、全集を読み返すのも楽しい。

第三はツアー。海外への旅はあと何回かでやめて国内に重点を移し、これまでに訪れたことのない土地をリスト・アップして一つ一つ埋めていこうと考えている。

これらを通じて言えることは、ただ漫然とやっていたのでは無為に時間をつぶすだけに終わってしまう。やはり「遊び」には、仕事と同じくらいの調査と準備、スケジュールの管理が必要だということである。豊かな余生をすごすためには、それなりの努力が大切だ。

(一九九八年十一月)

春城への旅

旧冬、中国の昆明・大理・麗江・石林を訪れた。寒い時期だからどこか暖かい所へと、旅行社のパンフレットを繰っていたら、年平均気温十九度で「春城」と呼ばれる雲南省へのツアーが見つかった。一昨年、昆明市の郊外で国際園芸博が開かれたので、ホテルや道路などが整備されており、同行二十人というバックツアーとしては少人数のゆつたりとした旅であった。

昆明は雲南省の省都だが、日中戦争中、日本軍の侵攻に追われた国民党政府が南京・重慶を逃れて最後の首都とした地である。また、少数民族の多いことでも知られるが、この人たちも中国各地から漢民族に追われ追われてこの辺境に安住の地を見出した。彼らにとってのシャングリラだったのである。

ツアーの第一の目玉は玉竜雪山。標高五千六百米、半ば雪におおわれた美しい姿が省内至る所から眺められ、どこから見ても絵になる山である。リフトで三千八百米の積雪の山腹に登り、酸素の袋をかかえながらトレッキングを楽しんだが、すがすがしい山の空気が忘れられない。

第二の目玉は、一九九八年に世界文化遺産に登録された麗江古城。納西(ナシ)族が宗末から

元初にかけて創建した八百年の歴史を持つ古都で、町中を縦横に流れる小川は、玉竜雪山の雪解け水に源を発している。古い中国民家の街並みもさることながら、山頂にある万古楼から展望した全景が見事であった。

さて、第三の目玉は石林というところだが、やはり石よりも花と女性。春城―花の王国と言われるだけに至るところ花盛りであったが、大理の街路で見た山桜に似た海棠の花には思わず見とれた。そして女性だが、少数民族はいずれも漢族とは異なる文化、風俗を持ち、カラフルな民族衣装をまとうていた。大理で同行した白(バイ)族のガイド嬢は歩きながら教えた「さくらさくら」をすぐ覚え、バスの中で披露して拍手を浴びていた。彼女は婚約中で、春には挙式すると言うだけに、鄙には稀な輝くばかりの美しさであった。行く先々で異なった民族の女性とツーショットでカメラに納まったが、カラー写真で紹介できないのが残念。

(二〇〇〇年十二月)

三人の女性

三越百貨店の八階に小さな劇場があった。＼あった＼と言うのは、阪神大震災後の改築で姿を消したからである。昔の松竹座のようなシックなホールだったが、施設もさることながらそこで上映される映画が素晴らしく、よく通ったものだ。そこには東京の岩波ホールで上映したフィルムが回ってくるようになっており、粒よりの名画ぞろいであった。

その岩波ホールの総支配人が高野悦子さんである。最近、『シネマ人間紀行』を読み、この人の経歴や業績を知ったのだが、東宝映画を経てパリ高等映画学院に学び、ホール創立と同時に現任に就き、次々と陽の目を見ない日本を含む世界の名作を取り上げ、二三二席の小ホールが国際的な評価を受けるようになったと言う。一九二九年生まれだから今年七十一歳になる。

澤地久枝さんの著書―わたしが生きた『昭和』―が岩波現代文庫として刊行された。金融恐慌の暗い幕開きから敗戦で著者自身が日本人“難民”となった同時代を綴った記録である。彼女は中央公論社に勤めながら早稲田大学で学び、『人間の条件』で知られる五味川純平の資料秘書をしたことからドキュメントに開眼、ノンフィクション作家として多くの著作があること

で知られる。

私はそのほとんどを読んでいるが、ミッドウエー海戦を日米両方の資料から描いた『滄海よ眠れ』全六巻は渾身の大作であり、『火はわが胸中にあり』をはじめ近代史の暗部を追究した著述は、見事と言うほかはない。高野さんより一つ下の七十歳である。

三人目は塩野七生さんだが、一年一冊のペースで書き続けている『ローマ人の物語』はこのほど第九巻が刊行された。『ルネッサンスの女たち』で登場して以来、『海の都の物語』をはじめローマ、ヴェネチヤなど地中海世界の歴史を独自の視点で描写しており、私は今、この人にはまりこんでいる。

その筆力もさることながら、戦争に明け暮れた古代、中世の歴史を描くにあたって避けて通れない軍隊の編制や戦術、戦略について、およそ軍事とは無縁な女性作家が適確に記述しているのには感心させられる。一九三七年生まれだから、まだまだ前途有望な人である。

たまたま三人の女性を取り上げたが、この人たちに共通して言えることは、いずれも性別を超越して男性も及ばぬ立派な業績をあげられており、学ぶべきものが非常に多い。

(二〇〇一年四月)

大毎社会部一〇〇年

昨春秋、大毎社会部創立一〇〇年記念のパーティーが大阪の帝国ホテルで開かれ、私も案内を受けて出席した。Y BとO B百余名が一堂に会し、コンパニオンが花を添えた盛大な宴であった。現役の記者諸君は、私の息子より若い人たちで、元記者も私より入社年次の古い者は数名に過ぎなかった。

そして今春、刊行がされていた『記者たちの森—大毎社会部一〇〇年史』が完成し、送られてきた。A五判・三百余ページの大冊で、一九〇一（明治三十四）年に始まる社会部の歩みがつづられており、私も何か所かに登場している。

戦争中の昭和十七年に入社した私は、兵役をはさんで八年間、社会部に在籍した。戦中・戦後のこの期間は正に激動の時代で、私は警察はじめ府庁・市役所・教育・郵政などを担当し、さまざまな事件にも遭遇した。

名刺一枚で誰とでも会い、何所へでも行く取材もさることながら、見たり聞いたり考えたことを記事にする、いわゆる原稿を書くことについて実践的な訓練を積んだ。先輩が手を取って

教えてくれるわけではなかったが、知らぬ間に何かが身についたように思う。

その後、教育新聞や図書を発行する小さな出版社に入り、編集長兼記者兼編集者として三十年間を過ごした。この間に書いた記事や論説、コラムは数え切れない。そして退職後、川柳塔社の同人になったことから柳誌の編集にタッチし、せっせとエッセイも書きつづった。

他から執筆を依頼されることもあり、おそらく終生、ペンとの縁は切れないだろう。こうして長年、ペンで生計を立て、今も続いているのは、大毎社会部での体験や修練の遺産ではないかと思う。

私の社会部記者としての生活はわずか八年間で、これまで生きてきた八十年のわずか一割に過ぎない。私の入社時の社会部長で、後に社長になった本田親男が勲一等を受章した時、「勲章よりも大毎社会部記者であったことを誇りに思う」と語ったという。彼と違って功成らなかつた私ではあるが、この言葉には全く同感である。

(二〇〇二年六月)

羊の国を訪れて

世界三十五か国を訪れた金田一春彦は、もう一度、行きたい国はと問われてニュージーランドとオーストリアと答え、ニュージーランドに関しては、その国の美しい自然と優しい人情について触れていたのを、何かの本で読んだことがある。それ以来、いつか訪れたいと思っていたが、旧冬、その機会に恵まれた。

私が訪問したのは、二大島の中の南島だけであったが、「ガーデン・シティ」と呼ばれ、町中が庭園のようなクライストチャーチ、十九世紀の面影を残すアロータウン、その名もゆかしいクインズタウン、湖畔の美しい町ーテ・アナウ、デカボ、ミルフォードサウンドなどを観光した。山岳と溪谷が美しかったマウントクック・ピレツジのハイキングも忘れられない。

この国は、大英連邦に加盟、イギリス女王を元首とする立憲君主国で、人口三八〇万の小さい国だが、羊の頭数は五、五〇〇万とも六、〇〇〇万とも言われ、その実数は分からない。一直線に走る道路の両側はほとんど牧場で、牛や馬もいるが、羊が圧倒的に多く、悠々と草を食んでおり、まるで羊の国に来たようであった。

昨年春に訪れたオランダでは、キューケンオフ公園などでチューリップ、フリージア、アマリリスなど、数々の園芸植物を觀賞したが、この国では、全山を黄に染めるエニシダ、草原に咲き乱れる色とりどりのルピナスなど、野生の花に圧倒された。原生林でも、コケ、シダのほか、ガイドが教えてくれたバターカップ、グリーンフード、ペッパーツリーなど、はじめて見る花々に目を見張った。

住民の七割はイギリス人、次いで多いのは原住民のマオリ族で台湾系の中国人、韓国人、日本人と続き、空港では英・中・韓・日の四か国語で掲示されており、観光で訪れる人も少なくないようだ。私たちのバスの運転手は、一〇〇キロを越すマオリ族の巨漢で、橋の修理でバスが止められた時、網棚からやおらギターを取り出し、ハワイアンに似たメロディーで民謡を数曲、歌ってくれた。ホテルやレストラン、たまたま街で会った人々もみな親切で、この国では時間までもゆつくりと流れているように思われた。

(二〇〇三年一月)

中国再訪記

三月二十一日から五日間にわたって北京と天津を訪れた。四月から中国でSARS発生と報ぜられているので、正に間一髪というところだった。タイトルを「再訪記」としたが、北京は十七年前の一九八六年とその翌々年（一九八八年）の二回、訪問している。定番の名所である故宮や万里の長城については、改めて書くこともないが、やはり新たに見聞したこともあるので、記録にとどめておきたい。

まず、街の印象だが、二〇〇八年のオリンピック開催を控えて急ピッチで建設が進められている。あちこちに高層ビルが建てられ、大阪・東京ほどではないが、地下鉄が縦横に通じ、道路も整備している。かつては自転車の洪水だったのが、自動車が目立ち、人民服姿は影をひそめ、婦人はカラフルな衣装で闊歩している。ただ木々が芽吹く季節なのに、街路樹が少なくなつたのが寂しい。

北京特有の胡同（横丁）が区画整理によって次々と姿を消しているが、今回、人力三輪車に乗って胡同めぐりを行った。かつて大家族の民家であった四合院は、今では数世帯の共同住宅

となっており、その一軒を訪れて昼食を頂きながら家族と交流した。たまたま七十五歳の老婦人がおり、少女時代に満州（東北部）に住んでいたということで、日本語で「春がきた」を歌ってくれた。

今度の旅は、旅行社のツアーではなく、私がかつて理事長をしていた日中友好協会大阪府連合会の第一回訪中団なので、公式行事として中日友好協会を訪問・会談するとともに、中国人民抗日戦争記念館を見学した。同館は日中戦争の発端となった盧溝橋の東側にあり、日本軍の中国侵略と中国人民の戦いの歴史を資料・絵画・写真・映像によって展示した施設で、玄関の壁画に花束を捧げた。

天津でも中国人強制連行犠牲者の遺品と遺骨を安置した抗日烈士記念館と周恩来・鄧穎超記念館を見学したが、これらは観光ツアーでは素通りする施設だろう。もう紙数が尽きたが、湖広会館という専門劇場で市民と共に京劇を楽しんだ帰途、ライトアップされた様々な建物が美しかったこと、北京・天津間を軟座車で往復した時の車窓からの風光が珍しかったことを付け加えておこう。

（二〇〇三年五月）

日本の軍隊考

今でも私は時々、軍隊時代のことを夢に見る。わずか一年三か月の生活であつたが、よほど強烈な体験だつたのだろう。一九四四年六月、私は一片の召集令状で軍隊の営門をくぐり、一つ星の陸軍歩兵二等兵となつた。

日本の軍隊というのは、私たちが普通に生活している社会とは全く異なる次元の世界である。私の家では四人の兄が順番に兵隊となっており、よく軍隊の話を聞かされ、また、小説や映画で読んだり見たりすることが多かった。しかし、それと私自身がその世界に身をおくとは、全く別のことである。理不尽で野蛮な軍隊の実態については、よく知られていると思うので、ここでは繰り返さない。脱走兵となるほどの勇氣はないが、一日でも早くこのような生活から解放されたいと思い続けていた時、中隊長の馬当番をしていた一等兵がつぶやいた言葉に耳を疑つた。

「軍隊というとこは結構なところや。楽をして三度のめしを食わせてくれるんやからな」。当番兵だから一般の兵士よりも束縛は少ないにしても、こういう感想には驚かされた。農村の貧しい小作人で、身を粉にして働いても、衣食に困るような暮らしをしてきた彼にとつては、これは偽りのない実感だつたのであろう。

『日本の軍隊』（岩波新書）にも、同じような話が紹介されている。「軍隊ず所アいいもんでがんし

た。明るくなるまで寝せておいてくれで、暗くなれば寝せてくれた。米のメシを食せでけるつけ、洋服着せて皮の靴はがせて呉れだっだス」(原文のまま)。同じ岩波新書の大牟羅良『ものいわぬ農民』からの引用である。

この本は、吉田裕一一橋大学教授の著書で、生活・社会・地域の角度から近代日本の軍隊に光を当てており、下層民衆にとつて軍隊が教育や生活向上の場となった側面をとらえ、民衆は軍隊を嫌悪するとともに、憧憬も持っていたという二重性を明らかにしている。

研究者とは言え、一九五四年生れで軍隊経験のない人が、よくここまで実態を描けたものと感心させられる。いたずらに軍隊を美化したり、あるいは嫌悪するのではなく、多くの資料や証言にもとづいてその実態に迫った出色の著作だと思ふ。

これと関連して、藤原彰著『中国戦線従軍記』(大月書店)も紹介しておきたい。同氏は私と同年の一九二三年生れで、惜しくも今年二月に死去されたが、吉田氏と同じ一橋大学の名誉教授で、日本軍史の研究に五十年の実績を持つ権威として知られた人である。

同氏は陸軍士官学校を卒業した職業軍人で、小・中隊長として日中戦争に従軍し、本土決戦部隊の大隊長(大尉)として敗戦を迎えて復員、東京大学に学んだという経歴の持ち主。そしてこの本は研究書ではなく、文字どおり「従軍記」で、中堅将校としての実体験に基づいて侵略戦争の事実と問題点を解明した稀有の著作である。

(二〇〇三年十二月)

私の健康白書

八十路の坂を越えた昨年春の市民検診で異常が見つかり、生まれてはじめて胃カメラと腸の内視鏡検査を受けた。結果は軽度の胃かいようと痔疾という診断で、応急処置を受けるにとどまった。これで一応、安心したが、夏から秋にかけて咳と痰を伴う、しつこい風邪の症状に見舞われ、階段などで息切れするようなことも起った。後から考えると、それが注意信号であったが、日常の雑事に追われるままに突っ走ってしまった。

年が明けて新年の祝賀行事や月例会も終わって主治医の診察を受けたところ、胸部レントゲンを撮られ、刀根山病院へ行くように紹介状を渡された。翌日、同病院の呼吸器内科で診察と検査を受け、結核性胸膜炎の疑いで入院することになった。内科病棟で検査に明け暮れる毎日が続き、結核の疑いは消えたが、胸膜の内視鏡検査を受けても病因が分からぬまま、二月下旬に一月ぶりで退院した。

ところが、十日目に訪れた再診では呼吸器外科に回され、開胸胸膜生検手術を勧められた。八十歳を越えて全身麻酔下で外科手術を受けることは、私自身や家族がためらったし、医師も

熟慮したようだ。しかし、手術に耐えられるという判断で、病因不明では治療の方針も立てられないということから外科病棟に再入院し、三日後に手術を受けた。傷跡の疼痛や術後の処置にはまいったが、経過は良好で病理検査の結果も異常がなく、二十日間でやっと退院することができた。

これで一件落着きというところだが、長期にわたる不自由な病院生活と全身麻酔・外科手術は、高齢者にとっては大きな身体的負担で体重が六キロ減って五〇キロを割り、何をしても疲れやすくなった。抵抗力も衰えてすぐ風邪にかかったり、胃腸をこわす始末で、当分は病気前のような日常生活は難しいとあきらめている。これがまあ、年齢相応ということかも知れない。

ここで私の教訓として書きとめておきたいのは、どれだけ健康に自信があっても、決して過信することなく、古希・喜寿といった節目には、必要な検査を受けることを勧めたい。それに自己管理も大切で、健康のバロメーターとも言うべき体温・体重・血圧を絶えずチェックし、異常があれば主治医に診察してもらうよう心掛けたい。もう何時、何があっても不思議ではない年齢であっても、健やかに生きてこそ長寿の価値があり、絶えず体調に気を配って天寿を全うしたいと思う。

(二〇〇四年九月)

私の粗食メニュー

生来の虚弱體質の私は、小学校では栄養丙、徴兵検査では第二乙種という弱兵であった。それが生き延びて八十歳を越えたのだから、「健康法」らしきものがあると思われるのも当然かも知れない。

もともと健康に最も大切なものは、清い空気と良い水だと思う。だが私の住む土地では望めないで、せめて性能のいい空気清浄機と浄水器を活用している。

だとすると、食物ということとなるが、メニューとして海草と小魚と豆類が欠かせないだろう。海草はまず昆布だが、とろろ・おぼろ・塩昆布など、海苔は板のり・佃煮、そして若布とひじきも是非加えたい。小魚は目刺・ちりめんじゃこ・いかなご等があり、豆類は大豆・えんどう豆・そらまめのほか、豆腐・納豆・厚揚げ・湯葉などの大豆製品が控えている。これらをバランスよく常用することを心掛けている。

もう一つの決め手は、生ジュースである。まずリンゴをベースにし、季節に応じてパセリ・人参・キャベツ・トマトなどの野菜、オレンジ・蜜柑・グレープフルーツ・梨などの果物を二、三種類、ミキサーではなく、ジューサーで絞ってレモンの汁を加え、コップに一杯飲む。これをここ二十年近く、毎朝、続けている。今のところ、何にも勝る健康法だと思っている。

(二〇〇二年七月)

ペンシル
(再録)

茜 雲（一九八三―一九八六）

明日もまた無事の日つづけ茜雲

黄昏でなく夕映えの日を希う

手が四本ほしい男の台所

カルテ書くペンの動きをじつと見る

陰膳のように病食置かれてる

おむつした娘におむつされる妻（妻淑子逝く）

病床で誕生日迎える妻あわれ

妻重態 日が経ってほしほしくなし

妻危篤 十日目の朝白みゆく

時きざむ時計 妻の生命刻む

旅路から待つ人のなき家路つく

ペンだこが支えた妻と二人の子

一人生きる一合の米を研ぐ

灯を消してから本当の僕になる

眠れない眠らなければ明日は来ない

笑っても目は笑わないガードマン

受付でノーネクタイは待たされる

ボス選び金は使わぬ猿の国

寒中もコートはいらぬおえら方

軍拡論 君が鉄砲かつぐのか

二坪の書庫あり僕はリッチマン

ビーナスはビーナス僕の妻は妻

兵の墓ありし日のごと整列す

英霊も階級のある墓地哀し

夕刊のトップつまらぬ日の平和

定年を待ってたように痛む膝

進退は男の美学辞表書く

裏話書いて乱れた世を稼ぎ

戦後はるか小さくなつたキリン草

吊り革に干し魚のごと満員車

赤ランプ明滅してゐる世界地図

歩行者天国やっぱり歩道あるく人

定年になつても埋まるカレンダー

万国旗 嫌いな国と好きな国

胸張ろうわれら年金生活者

網膜に残る私のマリア像

てれくさい今さら妻に努力賞

先頭が狙われている落とし穴

エリートが逆さに落ちる乱気流

また一人 大正琴の弦が切れ

起承転転という人生もあつて良し

鯉口を切つたが僕に妥協癖

雑草という名の草はないんだよ

憲法にひととき光る愛の文字

信じよう出発する子の肩の幅

八月になると一億平和主義

労働歌 軍歌と同じ曲だった

新兵器ある日使つてみたくなる

悪玉がきつと撃たれる西部劇

無事息災まだその上に何の欲

鳳仙花 待ちかねていたプロポーズ

煩惱が去つたら虹も消えていた

純白のマフラー散りし雲の果て

年金で何とか食えている不思議

正論が人情論に押し切られ

妻の死という十字架を負う余生

父は父 子は子の道を行く別離（長男渡米・長女結婚）

巣立ち行くために育てた二人の子

式場で泣かんといてやお父ちゃん

僕の娘奪った男と酒を酌む

もともとは一人だったとひとり言

ネクタイはストックで足る定年後

寅さんの港にいつも居るさくら

起承転結 七言絶句 唐詩選

起死回生 点滴の露キラキラと

その時にキラリ光った耳飾り

切符から静かに流れ出すボレロ

雨やんで一電車待つ迎え傘

どのペンにかえてもやっぱり僕の文字

ヒーローになった気が出る映画館

五万発の核抱いている平和

悪筆にまた泣かされる編集者

天皇の髭黒かった日の神話

清貧もよし良心に生きた過去

たつぷりと遊んだ孫のいい寝顔

自画像のバックはセピア色にする

一本の藁からサクセスストーリー

略奪のルーツたどれば桃太郎

戦没の仲間を祀る菊日和

夢のない年金で買うジャンボくじ

足るを知る暮らしか包の老夫婦 (亜欧の旅)

砂塵舞うキャラバンの夢の跡

ギリシャ語の蝉しぐれ降る丘の道

ワイン眠る倉で静かに飲むワイン

円ドル リラ フランで狂う計算機

伴奏は気にしていない黒田節

秘仏より僕にやさしい野の仏

草の芽が出ると亡き妻よみがえる

人それぞれ仏さまさま古都の秋

カルダンのハンカチ一点豪華主義

ゴールまで走るほかなき競走馬

書き上げて部屋いっぱい
の年賀状

はからずも妻の命日啄木忌

小糠雨まためぐりくる連翹忌

一寸の虫たらんとす多喜二の忌

千羽鶴雨にしおれて原爆忌

太平洋越えて父子の初電話

主役への夢は捨ててるかすみ草

ドラマならここで軽く肩を抱く

フリージア岩波新書読む少女

無職にはやはり無職のスケジュール

パレットに彩を残して君は逝き
(白岩文衛君死去)

一人でも一日三度めしを食う

もともとは誰のものでもない地球

小さ目の椅子を選んだ二度の職

召集の老兵思う二度の職

独学で亡き碩学を恩師とし

鉄棒が重たくなった鬼の老い

モナリザの微笑は何の返事だろう

影武者の方が立派な髭生やし

エリート不幸 下積み知らず生き

跳箱をとび越せなかった少年期

ループタイむかし参謀だった人

キラキラと光る瞳はあざむけぬ

店員が美人で派手目の柄を買う

古くとも僕にはやはり巴里 羅馬

言い訳はやめよう傷が深くなる

雑草も野草と呼べば優雅なり

カタカナの職種でおんな縁遠く

星の名を教えてもらう山の宿

絢爛の故宮 庭には朱の柘榴(北京点景)

紫電一闪 天安門を龍駆ける

天壇いま龍三郎の画帳から

天皇はどうあれ金貨の列にいる

愛錆びる花に終わりがあるごとく

風雪の過去生きている人情味

トップには届かなかった石礫

告白のできぬ戦記を抱いて老い

万年青(一九八七～一九八九)

万年青の実 日中友好二千年

蓑虫よ君は孤独の哲学者

野心もうとつくに捨てたベレー帽

映像がモノクロとなる雪景色

自分史の序曲軍歌と労働歌

負け戦 黙ってコーヒー飲んでいる

主義のない雀踊ってばかりいる

事故の日と変わらず信号点滅し

耳鳴りは私だけのシンフォニー

春愁にエンゼルの矢が届かない

年金のかける気合は知れている

大正の貧しい恋のテクニク

おろおろと立っても開く自動ドア

小企業 五分咲きの下花の宴

岩波文庫 青い目が読む神戸線

人脈も金脈もない父の靴

小さきは小さく泳ぐ鯉のぼり

栄光の過去はなかった父の旗

内の子が先頭を行く鼓笛隊

水草のいのちがほしい水中花

ぜいたくな居眠りバツハ聞きながら
平服というから困る披露宴

フルートとピアノ二人のハーモニー（長男結婚）

糸切れた子はアメリカに行つたまま

アメリカに車を売つて米を買う

美しき横顔コインの女王様

ワープロの手紙で無心言うてくる

新米に秋茄子はくは日本人

農政を叱る新米賞でながら

判を押すだけの机が大きすぎ

ライバルの力を知らぬ主戦論

ひとりものひとりめしやでめしをくう

職ひいて見えた会社の裏表

告白は今だ今だと滝の音

思案するロダンの首に冬が来る

乙姫の未練を秘めた玉手箱
握り飯あの日 of 業火忘れない

南蛮絵 滅びるものは美しき

日本の灯台を見た帰還船

自分史を以下余白にはせぬ余生

子孫には残してならぬ金と核

連翹がほころび妻の忌がめぐる

妻の忌に妻と詣でる京の寺

わが胸に咲く連翹忌 白百合忌

流水の北海思う多喜二の忌

問答は無用にあらず木堂忌

一門の末座にわれも不死鳥忌

一本のすすきが折れて蛇笏の忌

波郷忌や薔薇 白椿 沙羅の花

白秋忌 銀杏の実は緑なり

来年も生きるつもりの花の種
パレットに三原色のある未来
ユーモアも少しはわかる仁王様
笠智衆うなずくだけで芸になり
会者定離 大正琴はもう鳴らず
検定の朱筆が歴史ねじ曲げる
敗走の日を覚えてる土ふまず
ほどほどに燃える余生の篝火花
一番はすぐに決まったコンテスト
肩パッド女のいくさまだ続く
大物になるつもりない紙バツグ
立志伝溺れたこともある河童
十人十色にんげんにくずはない
母の背が温かかったおおい紐
駅長が貼る沿線の花だより

百姓と名刺に書いている自信
蜜蜂の目に人間はずるすぎる
進退は自分で決める硯箱
敗戦忌カンナひまわり夾竹桃
墓穴にも似た蛸壺を掘った日々
蝸牛ひとすじの道遠くとも
権力が常に恐れている事実
王様は噴水が好き夏の雲
王様の部屋には鍵がかからない
玉碎の島を囲んで碧い海
どこからか子供が湧いた夏休み
惚けかけた兄とひととき血の絆
戦前の物価 老母の記憶力
虚飾には遠い神父の黒い服
制服が押さえつけてる腹の虫

美しすぎて花輪にはならぬ花

遠き良き時代に酔うている寮歌

曼珠沙華けんらんとして秋の章

枯れ姿見られたくない曼珠沙華

いずれまた相談するとそれつきり

泥絵の具はげて南蛮寺は秋

女郎花やわい男が多すぎる

美術展三つを梯子する文化

スベアキー性善説は信じない

軌道敷き淡々と去る創業者

核のない地球を孫に贈りたい

川柳の本をたくさん持っている

銀鞍にあらねど白馬の人となる(洛陽・西安の旅)

兵馬俑 男はみんな戦好き

胡姫が注ぐ白酒に酔う古都の夜

長安や王維 岑参 李白 杜甫

スタートの時には見えたピラミッド

裸木がオブジェにも似て冬の天

大器にはならなくてよし孫を抱く

敵だからいちばん高い花贈る

定年後もう翻す旗がない

人間はすぐ分けたがる敵味方

イヤリング微かに揺れる無言劇

冬の句に風花が舞う草城碑

正論もよいが傷つく人がいる

勝つことは勝った槍傷 刀疵

二人目は花子 神様ありがとう

藁一本持つてスタートしてみよう

公園に志村喬はもう居ない

丸腰が不安で鞆提げている

紫の雲たなびきて昭和逝く

昭和史の真ん中辺にある亀裂

モノリザに似つかぬ妻の薄笑い

身内だけ頼り孤独の老社長

口止めにもらった鮎が歯にしみる

時々神が宴をする火山

笑ってる男はいない兵馬俑

満ち足りた日はゆつくりと日が沈む

政治家を斬る鉛筆を尖らせる

実直な猿が蒔いてる柿の種

自画像の瑕は妻にも教えない

人文字の一人一人に顔がない

花束に教えておこう花言葉

せめて花いっぱい 妻の七回忌

一日に法事が二つ花吹雪

我が生涯ペンひとすじに啄木忌

もぎたてのトマトのような女の子

パイアも私も高所恐怖症

いたずらに触れてはならぬサ克蘭ボ

紙バッグ今日も善人演じきる

杭打ってつないでおこう風の馬

原爆を三たび許さじ青い空

王様が歌えばみんな手を叩く

王様の隣の席があいている

王様の声聞いた日の百日紅

コーヒーはブラックがよしペンネーム

過去はもう光らぬ父の銀時計

都市砂漠 独居老人今日も死す

大柄の美女立っている肥後菖蒲

光るもの何もない手が美しい

諦めた顔でライオン輪をくぐる

裏声で歌ってならぬ反戦歌

達者かと一声父の電話口

スピーチを聞いてはいない箸枕

茄子トマトきゅうりピーマン夏の雲

ギャルソンの髭りっぱなり巴里祭

敗戦は覚悟していた赤トンボ

さりげなくビール注いでる仲直り

風ぐるま無心に回る水子塚

身を立ててまだ名は上げず太郎冠者

わが娘ながらも母はたくましく

秋風が吹けば詩人になるつもり

朝顔の花が小さくなって秋

そして秋 老いは静かに忍び寄る

ここだけの話はしないのが紳士

過ちはあやまちとして米を研ぐ

男なら耐えねばならぬ冬木立

ヒロシマの時計を止めたのは誰か

ライバルのアキレス腱を知っている

銀杏散る頼まれ事を思い出す

十年日記（一九九〇～一九九二）

メルヘンの砂漠二つの影法師

見たような景色見てきた美術展

言うなれば高倉健のような人

高すぎる望みは持たぬ土生姜

恥ずかしい国だがやはり僕の国

お互いに顔見合わせる電話ベル

潤色をしても自分史貧しすぎ

モンローと同じ口紅つけたとて

落ち椿失うものは何もなし

未知の国こころは躍るパスポート

赤トンボ少年の日は暮れやすし

無印が怖くてバッジつけている

植木屋は無口で植木よく売れる

保育所に入った孫のよい返事

寄せ書きに存在感のある癖字

鯨追う男のロマン消えた海

遠泳の海 少年の日のロマン

沖へ沖へ沖へと泳ぐ少年の海

鉄棒を忘れた鬼もいる平和

裸婦よりも肌あらわなり夏衣

信念は曲げない父のモンブラン

前列に笑わぬ客がいて困る

時流には乗るつもりない蝸牛

しみじみと話したいのが敵にいる

定食のよう可も不可もない夫

胸を打つ美談はみんな嘘だった

生きるとはこんな日もある風の中

ひとことは言っておきたい蔵書印

ベテランもやはり不安な赤いペン

ベビーブルー娘が懷妊という矢文

太郎でも花子でもよし三人目

航路もう変えることない父の船

爽やかにサラダ記念日 風光る

診断が白と出た日の吟醸酒

戦場に行かぬ男が吹くラッパ

地図にない道を歩いた父の靴

宇宙から見れば地球は問題児

山寺で逢う円空の微笑仏

一城の主がすする駅の蕎麦

定年後 自分で決めているノルマ

新世紀生きる「十年日記」買う

敵半分 味方はんぶん砂の城

一旦緩急 夫婦の絆たしかなり

折々に神が鳴らしてくれる鈴

神様に無理を言うてる鈴の音

幸せはじつくりがよし豆を煮る

忙しい日はゆつくりと飯を食う

デスマスク七十年の皺も消え（兄死去）

年金の枠でどうにか生きている

偶然というには役者そろいすぎ

憎しみも少しは混じる愛の鞭

さかずきで打つ一日の句読点

時時刻刻 破局が迫る砂あらし（湾岸戦争）

シナリオのとおりにはボタン押す戦

ミサイルは正確なれば血が流れ

いくさせぬ国にも軍事評論家

ハイテクの火遊びやめよ砂嵐

苦勞した話はしないシンデレラ

走ってるうちは倒れぬ小企業

近道はせぬ父さんのちびた靴

淀川の水ぬるみたり月斗の忌

なつかしや少年倶楽部 紅緑忌

びいどろの金魚が紅し沖縄忌

美しきものとしえにモンロー忌

あやかってみても蛙の子は蛙

大輪が咲く大輪の花の種

エメラルドすすく育つ孫二人

古希の希は稀にはあらず希望の希

旗の色もう変えられぬ古希の坂

ホステスは三歳の孫 古希の宴

春霖や ひめゆりの塔ひそと立つ

乙女いま老いていくさを語り継ぐ

ニッポン過労死 豊かさとは何か

受けて立つ喧嘩もあった靴すべり

ひたむきに生き残照が美しい

不器用に生きてため息ばかりつく

悲しみを重ね大きくなるのです

天と地を汚し豊かになりますか

母の日も母は主役になりきれず

碩学がまた一人逝く沈丁花

転落の詩集浮いてる泥の河

ベルリンの壁を崩したのは電波

善人の帽子に止まる赤トンボ

地平線むかし関東軍ありき

登ったら何もなかった神の山

後始末せぬ父さんのフライパン

人はみな生きねばならぬ風の詩

さまざまな別れ見てきた風の駅

限りあるいのちを思う風の宿

寂しさをじっと耐えてる風の町

兄ねむる みんなみの島風渡る

兎小屋にも極楽の余り風

木堂忌 軍服を着たテロリスト

花時計 男はいつも待たされる

北向きの書斎が好きな父のペン

ペン軸が少し重たい日のコラム

辛酸をなめて仏の顔になる

生真面目も不真面目もいる猿の島

なめんなよ鉄骨飲料のんでいる

屑籠に夫の私語が捨ててある

風雪を刻んだ父のプロフィール

お茶めし風呂 妻という名の全自動

七転びしてから運がついてくる

集まるとすぐ号令をかけたがる

雑兵に妻が子がいる孫もいる

充電が放電となるコップ酒

末法の世を斬るペンを研いでいる

貧しきは恥にはあらず紙風船

よく冷えた釣りが出てきた券売機

スタートは一番だったと聞いている

赤 青 黄 岩波新書並ぶ書架

戦いは勝たねばならぬ寒椿

桃の花 孫が十五になりました

すっぱんぽんベストセラーになる平和

知りすぎた男が消えた永田町

老いらくの恋 一休も良寛も

国禁の書を読みし日よ多喜二の忌

石をもて我も追われき啄木忌

絵草紙の恋みな悲し西鶴忌

朝起きると無くなっていた僕の国

過去形で幸せ語る友と居る

再縁の絆が集う春の宴

銀紙の勲章もらう血の絆

北国に住む子がひとり雪もよい

しょうむないこと覚えてる妻の耳

ひまわりは情熱の花ゴッホの黄

常連の序列はママが決めている

表札は偽名と知らぬ郵便屋

ユダきつと一人は混じる男の輪

ジャスミンと風の噂はすぐに消え

天安門広場を僕は忘れない

愚かなる戦争だった紙の旗

カルチャーに内助を捨てた顔並ぶ

嫁った娘の部屋に壊れたオルゴール

まだ生きているのか僕の兵籍簿

500色えんぴつ僕の色がない

同床異夢妻には妻の数え唄

愛別離苦六十代と二十代

三吉の詩が胸を打つ原爆忌

遺族席 白髪が目立つヒロシマ忌

敗戦忌 夾竹桃はなぜ紅い

十年一剣 一行詩に生きる

一声がもう通らない鶴の老い

スランプの谷間で読んだ周五郎

最高の居眠り曲はブラームス

新刊書見る赤ん坊を見るように

国籍がずしりと重いパスポート

ソビエトという国ありき砂の塔

紙袋ふらんす小咄詰めておく

働いているのは二割蟻の群れ

泳いでも泳いでも泳いでも海

人生に跳ばねばならぬ時がある

過去帳に清七とあり我がルーツ

たのしみは新刊の書を開く時（橘曙覧に和す）

たのしみは名曲聴いて憩う時

たのしみは校了のペン擱いた時

コピーですお安くしますルイビトン

名場面なかった父の一代記

あの日からもう無理はせぬ信号機

欲みんな捨てると消える生命の火

古希の坂（一九九三―一九九五）

くたびれた軍旗が父の陣にある

図らずも同年だった名士の計

しなやかに妻が手綱を握ってる

土笛が鳴るとくつろぐ埴輪たち

血縁は僕だけ兄の三回忌

冬銀河 多喜一が逝きて六十年

予定ない日があつてよし春暦

父はまだ軍隊手牒持つている

滅びるは美学にあらず朱鷺の墓

古希古希と騒いでるのはお父さん

文豪という語がありき漱石忌

米寿には米寿の演技 笠智衆

男なら投げられた餌は拾わない

三冊の辞書を調べてきた自信

見る人によつてメダルの裏表

何もせん日があつたかてええやんか

清貧と愚直に生きた父の墓

冷や酒は男の涙知っている

新世紀生きるつもりの方ふまず

高倉健に似た人に逢う北の町

目立たない人がトップに選ばれる

さあという時にはいい責任者

しなつくる観音もあり春の寺

中年がみんな抱いてる不発弾

貫禄がついて影武者おろされる

清流に棲んで大魚をうらやまず

言い負けてわら人形は灰になる

発掘の度に歴史が変わるのか

人間の面をほしがる鬼もいる

出るところへ出ようと悪い方が言う

森を出たピグミーを君知らないか

どちらでもいいと大きい方を取る

落款の朱が鮮やかな一字の書

毎日が父の日ですねお父さん

円盤を見たとき子供は譲らない

虚と実の真ん中辺を風渡る

いつまでも酒飲めるよう休肝日

毎日が休日だから余暇がない

振った手が帰らなかった雲の果て

わだつみのこえが沖から響く夏

マスカット白桃メロン夏の雲

氷屋の旗 少年の日の夏よ

生国は摂津の国に御座候

月並みな一生もよし羊雲

やるが多すぎるので昼寝する

海を見て山へ行きたくなってきた

玉音を聞く八月の白い汗

松ぼっくり君に言いたいことがある

家中の灯をみな点す子の帰省

短編の夢ばかり見る真夏の夜

てふてふがひらり舞い込む春のバス

義人とは一字違いのわたしの名

いま達者なら十年は生きられる

妙策はない直球で勝負する

城壁にふと杜子春がよぎる影

一番に逃げた男を知っている

本籍の地名勝手に変えられる

後輩に大臣がいるおじいちゃん

ここでは何人ひとを殺したか

古希の坂見るべきほどのものは見つ

落石に注意と書いてあるコント

我が家では妻の口から天の声

慌てるな米がなくなることはない

再婚の妻をお前と呼べぬまま

辞令には一行都合により解雇

まあまあのもあというのが気にいらん

わくら葉が残り若葉が散る無常

生老病死 起承転結にも似たり

祝儀より不祝儀多く歳暮れる

老犬の蹠跟として行く枯れ野

編集者冥利につきる八〇〇号

七十の坂はゆつくり歩むべし

一つ許し一つ甘えて夫婦かな

気がつけば三日忘れていた日記

攻めるより守る戦がむずかしい

人の世に旅立ちがある生と死と

義歯はすす武装解除をするように

銀杏散る私が消える日を想う

如月や澤地久枝の調査メモ

玄関を土足で通るテロリスト

時々妻にも言おうありがとう

耐えているのは男かも知れないぞ

古希すぎて閑日月を友とせず

長湯して一句消えたり浮かんんだり

片付けたところへ孫がやってくる

ピッコロを吹く少年と空の蒼

年の功 見えないものが見えてくる

消去法 消し忘れてた私の名

訳あつてわたしは女性恐怖症

女子大に求人が来た四月馬鹿

制服の大学生に遭う不気味

目を洗う心をあらう本に逢う

負け犬の生涯だつていいんだよ

風船の軽さよ ちちもははもなし

人間のことがいちばん分からない

門限をつくった人が守らない

足の音 父も疲れているらしい

いかなごの釘煮が届き春となる

花明かり金子みすゞを読んでいる

小糠雨いつかひとりとなる二人

還暦は女ざかりよ桐の花

分かり合うことが一番むずかしい

群衆が散った広場に立つ孤独

映画館へ行く一人になりたくて

禁煙をしてから消えた句読点

心から人を愛したことがある

旗守る者が一人はいてもよい

女房に逃げられたならどうしよう

豊かではないが不足はない余生

窓のないくらしを君は知ってるか

紙風船 五つで死んだ姉がいる

童謡に軍歌ナツメロ父のうた

人並みに恋もしました夢も見た

切り札が二枚あるので迷ってる

原節子 我が青春に悔い多し

危険球ときどき妻が投げてくる

夾竹桃 南の島にねむる兄

商人の子に軍服は似合わない

そよ風のように生きたいなと思う

耳タコになるほど聞いた父の秘話

好きなのは人間嫌いなのも人間

あの人が鬼と呼ばれた人ですか

きびだんご貰ってからの長い旅

詩人にはなれず鉛筆なめている

女神には遠くイワシを開く妻

托鉢の僧身じろぎもせず冬に

生きるのに恥多ければ顔伏せる

本棚を背に身構えるインタビュ―

風流も酒ありてこそ雪月花

完璧をめざすと水が溢れ出す

あの戦争まちがってたとなぜ言えぬ

歳月よ失いしもの得たるもの

君はどう生きたか戦後五十年

嫌なことみなやめるべし老いぬれば

国民よ知らずともよし首相の名

勲章はいらんがやるとも言うてこず

肩たたく上司も肩を叩かれる

スタートでいつもつまずくお父さん

植えるより守ってほしい自然林

戦友の歌ラストまで歌えます

働けるうちは働く父のペン

アメリカから子の電話くる大地震（阪神大震災）

震災の余波はわが家に避難民

震災をくぐり今年も来た釘煮

アメリカは遠し不惑の子を思う

不覚にも子の夢を見た冬の月

誠実という生涯も寂しけれ

寒の月 愚直に生きるほかはなし

余命とは釣り合つてゐるか預金帳

バイブルも逆さに読めば悪魔の書

略礼服 出番がしきり古希の坂

古希過ぎてまだ働ける幸不幸

戦友会 一度も行つたことがない

金も名もいらないうと言ふ鬼だらう

長寿めでたし老醜はうとましき

晩節という言葉あり冬銀河

十一人生まれ残つたのは一人(姉の死)

老醜はあとかたもなし花樞

通夜の席たち新月を仰ぎけり

慟哭で閉まる火葬場の扉

母方の先祖は隠れ切支丹

妻の忌に三代集う花時雨

十年日記 五年目を書きうのち

嫌なものの携帯電話 留守電話

地獄で仏 極楽で鬼に会う

落日を見た少年の日の渚

美しい名でうとましき花粉症

疲れたる魂をハンガーにかける

波の音 忘れることは難しい

好物の目刺し冷や酒飲む至福

もう背伸びすることはないループタイ

本意ではないが妻には負けておく

風知草 言つてはならぬことがある

目を閉じて小さな秋を聞いている

残り火を消さないように生きている

十年日記いくたり人と別れしか

ときどきは愛を研いている夫婦

名月に明日のいのちをふと思う

生きてきた生かされてきた五十年

D A K S のネクタイ父のダンディズム

もう冬が来たなと思うにぎり酒

父と子のいて話すべきこともなし

陣太鼓鳴らしてやってきた刺客

日本の未来に薔薇は咲いてるか

パスポート（一九九六―一九九八）

雑学で生涯生きた蔵書印

登頂の望みは捨てた父の靴

僕のリストラ会一つ辞め二つやめ

D O C T O R も父と語れば普通の子

鷹になるはずはなかった鳶の子

文楽を見て旧友と新春を酌む

ミニの孫足太からず細からず

プラトニッククラブという名の片思い

こっちから頭を下げることはない

モードショー女の足を見て帰り

自分への土産 地酒と決めている

才能を食い潰して下り坂

からめ手はやめて正面から攻める

制服を脱いだらふくよかな娘

同じ柄のネクタイが行く春の雑踏

エリートと違う一段ずつ上る

あくせくは困るが暇なものも困る

もくれんを仰ぎ亡き父思うなり

定型を少しくずして生きている

歩いたら治ると本に書いてある

ブランコにゆれる少女の日と揺れる

勲章はない父さんの広い胸

年金で一人遊びをしています

五体字類きょうの私は行書体

ちちははもはらからもなし白い道

はつこいは集英尋常小学校

父の日は何はなくとも純米酒

僕よりも駄目な男を知っている

錫婚にたどり着きたり二度の婚

失せ物は妻が探せばきつと出る

慣れたのか馴らされたのか妻の味

妻病んで止まる我が家の全自動

丸い石では石垣は築けない

私より弱い敵とはたたかわぬ

雑草の種でどっこい生きている

縁日でふと寅さんの影に逢う

寅さんに会える気がする港町

先頭に立って狙撃の的になる

戦死した兄が小遣いくれました

国債をもらい余命を考える

鶴彬に代わり一筆もの申す

背囊じゃないぞリュックを背負っている

ライバルも同じ薬を飲んでいる

光った時代もあった父のペン

秒速で思いが届くファクシミリ

ピーポの車に乗ったことがある

義歯哀し吹けぬ口笛ハーモニカ

パスポート出番を待っている四月

即身仏 異国に冥るミイラたち(ヨーロッパ紀行)

女王陛下は古城がお好き秋桜

呑む人も飲めない人も大ジョッキ

神々の棲む山なれば無垢の白

ルイ王朝 栄華の跡を見て飽かず

大臣はみんな僕より若い人

職ひいてからの年月 冬木立

最後までついてきたのは影法師

ありがとう孫からもらう長寿箸

芽吹いたらすぐに摘まれる露の臺

出発は決めたらずい方がよい

どうとでもとれる答えを用意する

日記書くいのちを刻むように書く

鬼の目に人間の世は乱れ過ぎ

梅だよりセーター編む手速くなる

権力と戦ってきた過去がある

終日在宅わたしの冬ごもり

緩急と軽重を知りうろたえず

銀の匙 思ひ出はみな美しい

花道はずっと奈落に続いてた

梅の花 浪人という女の子

余生なら人と争うことはない

旅で来た小さな町にあこがれる

薔薇を見て陶磁器を見て初夏の午後

功成らず太郎が帰る菜種梅雨

FAXで父上様と書いてくる

しあわせは何か今ごろ考える

髭あたる女の指がやわらかい

時流には遠く一人の舟を漕ぐ

断りの返事静かに受話器置く

終の日はみんなに言おうありがとう

どうせなら喜劇で幕をおろしたい

ささやかな迷い紅茶かコーヒーカー

なるように成らぬ世の中あみだくじ

心に灯ポツとつくよう ちひろの絵

迷つたら静かに風の音を聞く

生と死と始めがあれば終わりあり
お互いに生きようと言い別れけり
ニッポンの何もかにもが狂つてゐる
老兵の言葉が重い敗戦記

草の芽を嗅げばいのちの匂いする
重役がネクタイのない顔さらす
欲みんな消えると体透けてくる
永すぎる命を死者に囲まれる

診断を聞く判決を聞くように
長生きをしても楽しみあるかしら
生涯を外野で終えた父の靴
さらさらと生きよう喜寿がもう近い
ガウデীরの曲線やさし遊歩道（スペイン紀行）
空あおく波おだやかに地中海

石橋を越えメルヘンの国へ行く

あらためて祈ることなし初詣で

一つだけ言っておきたい事がある

商店の悲鳴聞こえてくるチラシ

成人で赤紙が来たそのむかし

世話焼きがいるから続くクラス会

虎の子を冬眠させる低金利

下手だとは言うまい孫の稚い字

駄一つ歩く私のダイエット

はらからがおいでおいでをする彼岸

雑学で縫うつぎはぎの知恵袋

妻ようやく六十五歳おめでとう

貧乏症いつも何かをしてる妻

生きているただそれだけで僕の勝ち

年金で支え合つてゐる老夫婦

無職ではないぞ私は自由業

シナリオは短くてよし喜寿の劇

年金の夫婦 健康だけ取り柄

孫一年 小中大のそろいぶみ

司馬と行く街道をゆく春の夢

評論家 右も左も斬つておく

スギすめばお次はイネの花粉症

正論を吐く声低い方がよい

今こそが余生なんだと言ひ聞かせ

さわいでも騒がなくても新世紀

一枚の辞令でクビを切られた日

核がまだ脅しのタネになる地球

ハンカチで包めるほどの愛一つ

ペンだこの指が私の勲章だ

妻の死に男泣きしたことがある

亡き妻の声が残っているテープ

亡き妻が飛天となつて会いに来る

トマトからトマトが消えてから久し

新刊は読まぬと決めた蔵書印

父の日は映画三本見て過ぐす

須弥山の如く祀堂がそそり建つ（アンコールワット）

端麗なデパータの胸豊かなり

もう何があつても不思議ではないぞ

散歩でもしたらと妻に掃き出され

若き日の灯台だった人が逝き

もがいても人間稼業やめられぬ

田中家のメインバンクが火の車

夏よりも冬がいいなと独り言

自分史を書いて誰が読むかしら

今楽しくをモットーに生きている

一以て之を貫くのが男

鉛筆一本 平記者で朽ちた父

凡人がひとのふんどし借る政治

軍人がいまに見とれと爪を研ぐ

変人がこのまま退くと思われず

秋うらら言葉の森に迷い込み

朱雀門まぼろしの古都よみがえる

回想の右手に三八歩兵銃

自己紹介 二元軍曹と付け加え

ガイドライン老兵はまだ生きている

銀行に政府は優しすぎないか

太郎にも芽が出た研究助成金

ダイオキシンの逃げ隠れできないぞ

ザ床屋ギャルに洗髪してもらう

諺が好きな酒屋のカレンダー

したたかな女にもある泣き所

余生ならあくせく生きることはない

海越えて秋を先取りするツアー（カナダ紀行）

しぶき浴びその名も霧の乙女号

黄葉の彼方キャッスル山そびえ

妻と手をつないで歩く雪の上

氷河湖のブルーの水に手を浸す

本流に遠く一人の道を往く

天に星 地にはきらめくルミナリエ

泣き笑いペンシル抱いて五十年

あとがき

今から七年前の一九九九（平成十二）年、喜寿を記念して川柳句文集『ペンシル』を刊行した。川柳を始めた一九八三（昭和五十八）年から十六年間に発表した八百句に『川柳塔』もくじ下に掲載されたエッセイ七編を配した。これでひとまず、私のささやかな川柳人生にしめくくりをつけたつもりであった。

ところが、その後も川柳とのつながりが続いたことと、『ペンシル』に収録した文章のほかに、『川柳塔』などに掲載したエッセイのたぐいが多くあり、これも一冊の本にまとめておきたいという気持が動いて、ぼつぼつ集めはじめた。

そこで、一九九九年から六年間の作品を自選した上、畏友、高瀬霜石氏に送り、選句とコメントをお願いして二百四句とし、『続 ペンシル』に納めた。さらに先に刊行した『ペンシル』の全句を『ペンシル（再録）』として巻末に加えることとした。

文章の方は、書名にもした「赤えんぴつ」と題して前記のもくじ下から十五編、「川柳こぼれ話」として同名で『川柳塔』に連載したエッセイ二十編、さらに、これも同誌に掲載した雑文に、『番傘』誌に寄稿した一編を加えた十五編を「閑人閑話」としてまとめた。最後の「レモネード」には、サークル檸檬の会報に寄せた十六編を収めた。

以上の六十六編で、二十三年の川柳人生の中で発表した文章の大半は、収録できたと思う。

それぞれの文の末尾に掲載の年月を入れたが、現在の時点で補正したい部分には目をつむり、原則として原文のままとした。もともと私は、川柳を始めるずっと前から文章を書くことをなりわいとしてきており、この句文集もむしろ「文句集」とした方がよかったかも知れない。さて序文をどなたかにということになり、ふと頭に浮かんだのは、『川柳読本』をはじめ『川柳燦燦』『紙鉄砲』の著作があり、川柳もさることながらエッセイの第一人者として尊敬する番傘川柳本社の岩井三窓氏で、おそろおそろお願いしたところ、快く引き受けてくださり、身に余る文章を寄せていただいたのは、望外の喜びであった。

さらに、奥田みつ子さんに校正をサポートしていただき、美研アートの山本久美子さんにも一方ならぬお世話になったが、こうした少なからぬ人たちのご援助によって本書が成ったわけで、改めて厚く御礼申し上げます。

二〇〇五年三月

田 中 正 坊



2000 万博記念公園でうつす

【著者略歴】

田 中 正 坊 (たなか・しょうほん)

本 名・正 三

大正11年8月30日 大阪市 真法院町で生れ、伏見町で育つ
大阪市立集英尋常小学校・大阪府立生野中学校卒業

昭和17年9月 大阪外国語学校中国語部卒業

大阪毎日新聞社入社 社会部記者 毎日新聞労組青年部長
同 26年3月 教育タイムス社入社 取締役・『教育タイムス』編集長
日本中国友好協会大阪府連合会理事長

同 58年4月 川柳塔社同人・常任理事・『川柳塔』編集長
全日本川柳協会常任理事 もくせい川柳会会長

平成4年5月 『なにわ川柳—私の百句』刊行

同 11年3月 編著『川柳カタカナ語辞典』(葉文館出版)

同 5月 共著『川柳入門事典』(全日本川柳協会編)

同 8月 川柳句文集『ペンシル』刊行

現 在 川柳塔社参与 もくせい川柳会顧問 あかつき川柳会顧問
サークル檸檬会員 翠洋会会員 毎日あゆみ会会員

2005年4月23日 発行

川柳句文集 赤えんぴつ

著 者 田 中 正 坊

発行所 川 柳 塔 社

〒545- 大阪市阿倍野区三明町2-10-16
0005 ウエムラ第2ビル 202号室
電 話 (06) 6629-6914

頒価2,000円

美研アート 印刷